

## 学位論文要旨

養護学校の体育における個が生きる指導計画作成に関する検討

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科

教科・領域教育専攻 生活・健康系コース

学籍番号 M97758G

氏名 首藤雅浩

# 養護学校の体育における個が生きる指導計画作成に関する検討

専攻 教科・領域教育専攻  
コース 生活・健康系コース  
氏名 首藤 雅浩

## I. 目的

養護学校における生徒の能力や適性、興味・関心等には、大きな個人差がみられ、そのため、個が生きる授業が、養護学校では既に広く取り組まれている。個人差は一般に、各能力等の程度における差（以下、「量的個人差」とする）と、各種能力等を含む種々の要素で作上げられた個人の特徴における差（以下、「質的個人差」とする）とで捉えられる。これらの個人差、特に「質的個人差」に依拠していくことが、個が生きる教育につながると考えられる。

著者の所属するS市立T養護学校（以下T校）高等部の体育においても、個が生きることを願い、個に傾倒した授業を実践してきている。しかし、実践成果に問題が生じることもあった。この問題発生の原因には、授業の指導計画作成していく段階での、上記個人差への応じ方におけるあやまりが考えられる。

本研究では、T校高等部においてこれまでにやってきた、個が生きる体育授業の指導計画を具体化していく各段階での個人差への応じ方の適否について吟味し、今後における個が生きるための指導計画作成する手順について検討しようとした。

## II. 方法

### 1. 分析対象

T校高等部に平成6年度入学の6名の生徒を例に、各生徒に対する個が生きる指導計画作成

した際に用いた項目、内容を分析対象とした。指導計画作成に用いた項目を、用いた順に示すと、下記ようになる。

a) 学校教育方針と教育目標、b) 高等部経営方針と目標、c) 体育の方針と教科目標、d) 学習集団としての実態把握、e) 体育の年間指導計画、f) 個人の実態把握、g) 各単元の個人の指導計画

### 2. 分析方法

1) 本研究では、指導記録に基づく単元前後の変容から、授業による成果の成功・失敗例を明らかにし、これらの原因について検討した。この場合、分析対象項目を、g)～a)に遡りながら、成果に問題を生じさせた原因を探究した。

2) 上記1)で得られた原因について、「量的個人差」及び「質的個人差」への応じ方の視点から考察した。

## III. 結果並びに考察

### 1. T校高等部の体育における個が生きる指導計画についての検討

#### 1) 教科目標を設定するまでの段階

教科目標設定までの段階では、目指すべき方向性を規定しており、その後の展開で「質的個人差」に依拠し、その伸長を図れることが認められた。しかし、設定されている目標は毎年ほとんど変わらず、どのような生徒にも依じられるよう、抽象的な内容で設定されていることが認められた。今後は、その年度に在籍する生徒の「量的個人差」及び「質的個人差」を把握してから

考え，“この子たち”に応じるための具体的目標設定をした方が，その後の展開でより「質的個人差」に応じやすい目標となると考えられた。

## 2) 学習集団の実態把握に基づく単元設定の段階

教科目標を具体化するために，学習集団における「量的個人差」及び「質的個人差」を掴み，これらの個人差の範囲を基本として，集団に対する単元が設定されていた。したがって，この設定についても，その後の展開で「質的個人差」に応じられるように考えられていることが認められた。しかし，前年度の単元を踏襲する傾向がみられ，それによる失敗例も出現した。これらは，単元のねらいが狭く，「量的個人差」に応じることによって「質的個人差」を尊重しようとしていたことが明らかにされた。そのため，今後は，まず「量的個人差」と「質的個人差」を十分に把握し，次いで，一人ひとりの特徴を教科目標の中で伸ばせるように，単元のねらいを設定する必要のあることが指摘された。

## 3) 個人の把握に基づき各単元を具体化する段階

### ① 目標設定の段階

失敗例は，目標を教師の勝手な判断や過度な願いに基づいて行い，実態把握で得られた「質的個人差」を正しく読みとらず，「量的個人差」に応じることによって成功させようとした授業でもたらされた。したがって，今後は，「質的個人差」に応じるために，一人ひとりに適した目標に徹底する必要があると考えられた。

### ② 内容設定の段階

失敗例は，「量的個人差」に基づく内容設定となっており，「質的個人差」が軽視されていることが指摘された。したがって，今後，実態把握で得られた「質的個人差」のみに基づいた内容設定をすべきであると考えられた。

### ③ 方法設定の段階

失敗例は，「質的個人差」に応じきれず，「量的個人差」に応じようとする教師の側からの方法設定となっていた。今後は，「質的個人差」を最大限に尊重するような，その子にとっての独自の方法を考える必要があると考えられた。

## IV. 要 約

本研究では，T校で行ってきた個が生きる指導計画作成の手順について再検討することによって，今後における個が生きる指導計画作成の手順を求めようとした。その結果，以下のようなことが明らかになった。

1. 教科目標を設定するまでの段階では，「質的個人差」に応じることができると認められた。今後は，その年度に在籍する“この子たち”に応じるための目標設定とした方が，その後の展開で，より「質的個人差」に応じやすい目標となると考えられた。
2. 単元設定の段階では，前年度を踏襲した単元設定をしていたために，単元のねらいが「質的個人差」に応じるうえで範囲が狭く，「量的個人差」に応じることによって成功に導こうとして失敗した例が見られた。今後は，「量的個人差」及び「質的個人差」を明確にし，教科目標の中で一人ひとりの特徴を伸ばせるように，単元のねらいを設定する必要があると考えられた。
3. 各単元を具体化する段階では，教師の勝手な判断や過度な願い，「量的個人差」等に基づいて，目標，内容，方法が設定され，失敗した例がみられた。今後は，「質的個人差」に応じるための目標，内容，方法を徹底する必要があると考えられた。

(主任指導教官 荒木 勉)

(指導教官 荒木 勉)

# 学 位 論 文

## 養護学校の体育における個が生きる指導計画作成に関する検討

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科  
教科・領域教育専攻 生活・健康系コース  
学籍番号 M97758G  
氏 名 首 藤 雅 浩

目 次	頁
<b>第一章 本研究の動機と目的</b>	1
<b>第一節 動 機</b>	1
<b>第一項 学校教育の現状</b>	1
<b>第二項 養護学校高等部における教育</b>	3
<b>第三項 S市立T養護学校高等部の保健体育</b>	4
<b>第二節 目 的</b>	6
<b>第二章 方法</b>	8
<b>第一節 T校高等部の生徒と教員について</b>	8
<b>第二節 T校高等部体育の個が生きる指導計画作成の流れと手順</b>	9
<b>第三章 結 果</b>	14
<b>第一節 授業の成果における問題</b>	14
<b>第二節 授業の成果に問題を生じさせた要因</b>	15
<b>第一項 成果に [×] あるいは [△] を生じさせた原因についての検討</b>	15
<b>第二項 成果 [○] についての検討</b>	31
<b>第四章 考 察</b>	34
<b>T校における個が生きる指導計画の作成段階の考え方についての検討</b>	35
<b>第五章 まとめと今後の課題</b>	43
<b>第一節 本論文の総括</b>	43
<b>第二節 今後の課題</b>	48
<b>引用文献・参考文献</b>	49
<b>謝 辞</b>	
<b>資料</b>	

# 第一章 本研究の動機と目的

## 第一節 動機

### 第一項 学校教育の現状

学習者に対して、個を大切にし、個性の伸長を図ることは教育の原点であり、その目標に向かって教育を押し進めていく必要がある。つまり、学校教育は、異なった能力や特性を持つ一人ひとりの子供を援助し、その個性や可能性を最大限に伸ばし育てていくことをねらいとしているのであり、その目標に向かって、日々の授業実践においても努力していかねばならない、ということである。

しかし、現実には、授業についていけない、あるいはついていこうとしない児童・生徒が多くみられることも事実である。個を尊重する教育、個性重視の教育を指向しながら、具体的な授業の成果において、このような現象が生じてしまっていることは、教育の重要な問題の一つとなっていると捉えることができる。

授業についていけない、ついていこうとしない原因について、加藤<sup>3)</sup>は、「伝統的な一斉画一授業は学力においても、学習意欲においても、必然的に、“落ちこぼれ”をつくり出してしまふ。」と述べ、一斉画一による授業を指摘している。

この一斉画一による授業は、19世紀以後、教育の効率化、経済化を推し進めた結果生み出されてきた方法であり、機械による大量生産の教育ともいうべきものであろう。この方法の問題として、佐伯<sup>4)</sup>は、落ちこぼれを生じさせることのほかに、「第二は、すべての子どもが全く同一の取り扱いを受ける結果、同じ型にはめこまれた人間が作られ易い」と述べたうえで、「みんながわかることと、一人ひとりが生きることとは、産業革命を経て近代的な教授組織が作られた時から、必然的に付随して生じた最も重大な、そして解決困難な問題であった。」と指摘している。

この問題を解決すべく、今世紀初頭から、アメリカのウィネットカ・システムやドルトン・プラン、プログラム学習等に代表される、個を大切にしながら可能性を最大限に伸ばすための指導の工夫がなされてきている。しかし、これらの方法では、能力の低い生徒への指導が不十分で学力差のさらなる拡大が起こる、教師の負担や時間・経費が増加する、学級という組織の機能を低下する等、種々の問題も指摘されている。<sup>5), 6), 18)</sup>

我が国においても、戦後、教育基本法等の条文や文部省新教育の指針の中で、人格の完成や個性の尊重が目標とされてきた。その実現に向け、授業実践においてプログラム学習、

マスターラーニング等の欧米の方式を取り入れ、児童・生徒が主体的に学習できるシステムの構築を試み、成果を上げている。しかし、その反面、一定の学力水準に到達させるべく、より効率性や経済性を追求した一斉画一の授業が実践されてきていることも事実である。その結果、授業についていけない、あるいは、ついていこうとしない児童・生徒を生み出し、教育の荒廃ともいべき現象を作り出してしまっていると考えられる。

つまり、教育が本来目指してきた、個を大切に、個性の伸長を図るという目標に対し、授業の実践において、過度に効率化、経済化を重視するあまり、一斉画一の比重が高まり、一人ひとりという視点がなく、その結果、目標が達成されないばかりでなく、様々な問題を生じさせてしまったと考えられるのである。

こういった現状を認識し、1983年の第13期中央教育審議会、1984年の臨時教育審議会、1987年の教育課程審議会等で、個性の尊重が今後重視されるべき視点として取りあげられている。

1987年の臨時教育審議会最終答申<sup>9)</sup>では、戦後の教育改革で強調された人格の完成や個性の尊重の定着の不十分さ、画一的な教育による個性・能力・適性の開発・伸長の欠如、画一的、硬直的、閉鎖的な学校教育の弊害等を指摘した上で、「……画一性、硬直性、閉鎖性を打破して、個人の尊厳、個性の尊重、自由・自立、自己責任の原則、すなわち『個性重視の原則』を確立すること……。」と述べられている。同年の教育課程審議会の答申<sup>8)</sup>においても、教育課程における基準の改善のねらいとして、「国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性の充実を図ること。」をあげている。

そして、これらの提言をもとに、平成元年改訂の小学校学習指導要領<sup>24)</sup>では、教育課程編成の一般方針として「……地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階や特性を十分考慮して、適切な教育課程を編成する。」とし、指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項の中には、「……児童の実態等に応じ、個に応じた指導など指導方法の改善に努めること。」とされている。

また、1996年の中央教育審議会第一次答申<sup>20)</sup>では、「一人ひとりの個性を生かすための教育の改善」を、これからの学校教育の在り方の一つとして掲げ、「『生きる力』をはぐくむ上では、一人ひとりの個性を生かした教育を行うことはきわめて重要であり、そうした観点から教育課程の弾力化、指導方法の改善、特色ある学校づくり等を一層進める必要がある。」と指摘され、今後一層の教育の改善がうたわれている。

つまり、今までの授業実践においては、一斉画一の比重が高かったという状況をふまえ、

今後は、学校教育の本来目指してきた、個を大切に、個性の伸長を図るという目標のために、授業場面で一人ひとりに応じる側面を重視していく必要があると考えられる。しかし、今まで行われてきた一斉画一による授業を捨て去ることは、現実的に困難であろう。したがって、一斉画一の授業の改善を図るとともに、一層一人ひとりに応じる側面を重視した一人ひとりが生きる授業を構築し実践していかなければならないといえる。

この、一人ひとりが生きるための一人ひとりに応じる授業の実践は、養護学校では特に必要とされ、その中でも高等部においては重要な課題として捉えられている。次項では、養護学校高等部の現状を述べ、一人ひとりに応じる授業の実践の必要性を述べてみたい。

## 第二項 養護学校高等部における教育

我が国では、1995年5月現在、国・公・私立合わせて501校の精神薄弱養護学校が設置され、そのうち74.5%にあたる373校に高等部が設置されている<sup>12)</sup>。図1に示すように、

精神薄弱養護学校小学部、中学部の在籍者数が年々減少してきているのに対し、高等部の在籍者数は

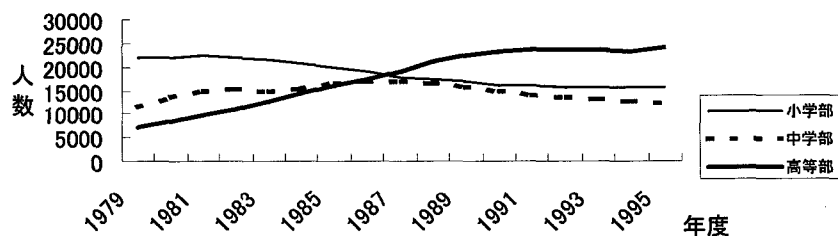


図1 精神薄弱養護学校在籍者の推移  
(文部省特殊教育資料1979-1995より)11)

年々増加傾向にある。これは、一般高等学校への就学率が90%を超える現在にあつて、図2に示すように、養護学校中学部や一般中学校特殊学級から養護学校高等部への進学率が高まってきていること、重複障害等の重い障害を持つ生徒を受け入れる高等部が整備されてきたこと<sup>13)</sup>、等が増加の理由として考えられる。

このように、養護学校高等部では、障害の程度や能力差が大きい養護学校中学部の卒業生を受け入れるとともに、一般中学校特殊学

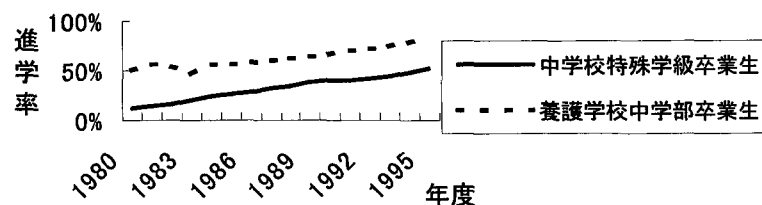


図2 養護学校中学部及び中学校特殊学級卒業生の養護学校高等部への進学率  
(文部省特殊教育資料1979-1995より)11)

級から比較的軽度の卒業生も受け入れるようになってきている。そのため、生徒間の障害の程度・能力差がさらに拡大している。したがって、そのような生徒一人ひとりが生きるようにするためには、一層一人ひとりに応じる側面を高くしていく必要があるといえる。



養護学校高等部では、これら多様な実態の生徒に応えるべく、山口大学附属養護学校による個人指導プログラムの研究<sup>19)</sup>、横浜国立大学附属養護学校による個別教育計画（IEP）の研究<sup>7)</sup>、北海道立余市養護学校による個別教育プログラムの研究<sup>1)</sup>等のように、各々の学校が、個を尊重する教育、一人ひとりに応じる教育を目指して研究に取り組み、授業を実践してきている。また、研究成果を用い授業を実践するに当たっては、障害の程度や能力差の大きい集団に対して、一斉画一で行う授業では一人ひとりに応じることが難しいため、小集団学習や個別指導等のように、一人ひとりに応じるために個という側面の比重を高めて、個を大切にした授業を実践していると思われる。

このような養護学校の現状を踏まえ、S市立T養護学校高等部の体育授業実践における問題を考えてみたい。

### 第三項 S市立T養護学校高等部の保健体育

S市立T養護学校（以下T校）高等部も、全国的な高等部の流れと同様、T校中学部生徒及び一般中学校特殊学級から入学する生徒が増加傾向にある。1989年に高等部が設置された時には、学年単学級10名定員であったが、入学希望者増加に応えるべく、1995年度入学生徒から学校裁量で定員を超える生徒を受け入れるようになった。

このように、T校高等部は、T校小学部・中学部の教育を受けてきた生徒と、一般小学校・中学校の特殊学級で教育を受けてきた生徒とが在籍している。したがって、在籍生徒の障害の程度も大きく異なり、また、それまでに受けてきた教育内容や生活経験の違いも大きいこと等から、T校高等部生徒の障害の程度や能力が多様であるといえる。

T校では、このように多様な実態の生徒に対し、より個が生きる教育を目指し、授業を実践してきた。T校では、個が生きるということについて、次のように捉えている。

障害の実態や生徒の発達段階に応じて、意図的、系統的に授業の計画・実践をし、満足感や成就感を持たせたりしながら様々なことを経験させることによって、自分から進んでやってみようとする意欲や課題や場面に自発的に取り組もうとする態度を育て、一人ひとりの生きる力を高めること、と捉えている。

このように捉える一方で、教育課程に関する研究<sup>15)、17)</sup>や実践事例についての研究<sup>16)</sup>等に取り組み、個が生きる授業の改善を図ろうとしてきた。これらの研究は、生徒一人ひとりの発達段階に応じた教育内容を検討することや実態把握をどのように行うか、また能

力別グループ学習を通して一人ひとりの力を高めて行く方法はどのように確立すべきか、等を模索しようとしたものである。

これら、T校における個が生きるということについての捉え方や、研究の目指したものは、一人ひとりの生徒の実態が大きく異なるという状況に対し、その一人ひとりの能力や特性等の個人差をいかに掴み、その個人差にどのように適切に応じていくべきかということである。

T校高等部では、個人差を次のような二つの側面で捉えている。すなわち、走る能力がA君は高く、B君は低い等のような程度（量的）の違い（以降、便宜上、「量的個人差」と略記）という側面と、A君は走る能力が高いが読む能力が低く、B君は走る能力が低いが書く能力が高い等のような、各種能力等を含む種々の要素で作上げられた個人の特徴における差（以降、便宜上、「質的個人差」と略記）の側面とがあると考えている。

普通学校においては、「量的個人差」に応じることが一般的であると考えられるが、養護学校においては、「量的個人差」ばかりでなく、「質的個人差」に適切に応じていかなければ、一人ひとりの力を十分に高めていくことはできない。T校においては、個が生きるための個人差として、主として「質的個人差」を重要視する上から、それらをいかに把握し、また、把握した結果を基にして、どのように応じていくべきかを目指していたということが出来る。

このような立場に立ち、T校高等部の体育に関わる授業実践においても、個が生きるために、指導計画を立て、授業を実践してきている。すなわち、一人ひとりの実態把握を十分に行い、単元や授業を構成するとともに、実際の授業における場の設定や教材教具の選定、指導者のはたらきかけや補助の仕方等、指導法も一人ひとりの実態に応じるよう努力をはらうようにしてきている。

T校高等部の体育では、個が生きるために、より個に応じる側面を重視した授業実践を行ってきていると考える。しかし、現実には、今までの指導計画や授業の実践では、一人ひとりの持つ力を十分に伸ばすことができなかった生徒がいることも事実である。

以下に、具体例を提示してみたいと思う。

Cさんは、重度の知的発達の遅れがあり、歩行や、ゆっくりとした駆け足ができるものの、関心を示す対象が乏しく、ボールや器具を使った運動、簡易なルールが必要とされる運動等を行うことは難しい。そのため、ほとんどの授業で教師の補助を受けながら活動している。ボール運動等では、ボールに興味を抱かせるようなはたらきかけを重視する指導

が主であった。しかし、どのようにしても、興味を示してはくれず、結局見学してしまうことが多く、どうしてもCさんの状態を変化させることはできなかった。

D君は、重度の知的発達の遅れがあるダウン症候群の生徒である。幼少時から水が嫌いで、お風呂に入ることも嫌がっている。水着に着替え、体育館まで移動して体操を行うが、プールへの入り口まで行くと急に座り込んで絶対に入ろうとしない。小プールへ連れていこうとしても、教師の腕を強く握りしめたり失禁したりしてしまう。結局高等部の3年間、水泳を行うことはできず保健室で休息したり、体育館に座していた。つまり、十分な水泳指導が行えなかったのである。

これらの例は、ボール運動と水泳の単元における問題だが、両者ともに他の単元でも、同様の姿が見られることがあった。逆に、音楽に合わせて駆け足を行う時のように、積極的に取り組もうとする姿が見られることもあった。

以上のような事実は、T校高等部の体育授業を実践するに当たっての、個が生きるための指導計画を作成していくうえで、一人ひとりの個人差への応じ方にあやまりがあったことを示唆しているように考えられる。

## 第二節 目 的

今までの学校教育において“落ちこぼれ”を生み出してきた原因の一つが、授業実践における一斉画一への傾倒にある、という現状を反省し、今後、個を大切にし、個性の伸長を図る教育を確立していくためには、一斉画一による授業の改善を図るとともに、一人ひとりに応じる側面を重視する授業を構築していく必要がある。

養護学校においては、児童・生徒の能力や適性、興味・関心等には大きな「量的個人差」、及び「質的個人差」がみられる。能力や適性等の個人差について、「量的個人差」以上に「質的個人差」を重視して、一層一人ひとりに応じていかなければ、個が生きる教育を目指すことは難しいといえる。そのため、授業実践においては、一斉画一で行う授業よりも、小集団学習や1対1による指導等のように、一人ひとりに応じるために個という側面に傾倒しなければならない傾向がある。

この一人ひとりに応じる授業実践例は、北海道立余市養護学校の取り組み<sup>2)</sup>にみられる。余市養護学校では、「学部や学年部に指導の形態を特定することなく、あくまでも、子

ども一人ひとりの課題を明確にし、その課題を解決するための教育内容・方法を個別に選択できる教育課程」を編成し、4月いっぱいを見学・生徒の姿を捉える時期として、それに基づいて目標、内容、方法を個人毎に処方する「個別指導計画」を作成している。

このように、一人ひとりに応じるための取り組みは、何らかの形で各養護学校でなされていると考えられるが、T校高等部においても、障害の程度や能力差における「量的個人差」及び「質的個人差」の大きい生徒に対し、より個が生きる教育を目指してきている。個が生きるためには、「量的個人差」以上に「質的個人差」を重視する必要があると捉えている。それを踏まえ、一人ひとりの実態（生育歴や障害の特徴、学習経験等）を把握し、研究成果を用い、実態に応じて適切な内容を選択して指導し、一人ひとりの力を高めていくように授業を計画し、実践してきた。

しかし、前述したCさんやD君のような事例は、個が生きることを願って作成した指導計画や授業の実践であったにもかかわらず、明らかに失敗であったことを表している。

このような事実は、T校高等部の体育授業を実践するに当たっての、個が生きるための指導計画を作成していく段階で、一人ひとりへの応じ方にあやまりがあったのではないかと示唆しているように考えられる。

そこで、今後、CさんやD君のような生徒を生じさせないために、T校高等部において、これまでに行ってきた個が生きる体育の指導計画について、授業へと具体化していく各段階での個人差への応じ方が、よかったかどうかを明らかにし、今後必要とされる個が生きる指導計画を作成する手順について検討することを目的とした。

## 第二章 方法

本章では、T校高等部の体育において個が生きる指導計画を、どのような手順で作成してきたのかを記述する。その際、併せて、個が生きる指導計画を作成していく過程の各段階の考えについても記述する。

次の第三章「結果」の項では、T校高等部の体育における個が生きる指導計画に基づいて行った、授業の成果における問題について、その問題が、指導計画作成のどの段階で、どのような考えによって生じたのかを検討する。また、第四章「考察」の項では、その結果について考察を行おうとした。なお、「結果」及び「考察」の方法については、それぞれの章で詳述する。

### 第一節 T校高等部の生徒と教員について

T校高等部は、各学年単学級で1学級の定員が10名である。しかし、平成8年度は、1学年が13名（定員を超えて受け入れ）、2学年が13名（同）、3学年が9名（1名途中転出）の、計35名である。これらの生徒の障害の種別と発達の程度を表1、表2に示す。また、これらの生徒に対し、体育の授業において教員14名が指導に当たる。

表1 障害の種別

主たる疾患	人数
単純精神薄弱	13
精神神経系疾患（てんかん）	5
精神疾患系疾患（自閉的傾向）	6
染色体異常（ダウン症候群）	4
染色体異常（5番染色体異常）	1
内分泌疾患（小人症）	1
神経皮膚疾患（結節性硬化症）	1
機能障害（舞踏病）	1
小頭症	2
水頭症	1

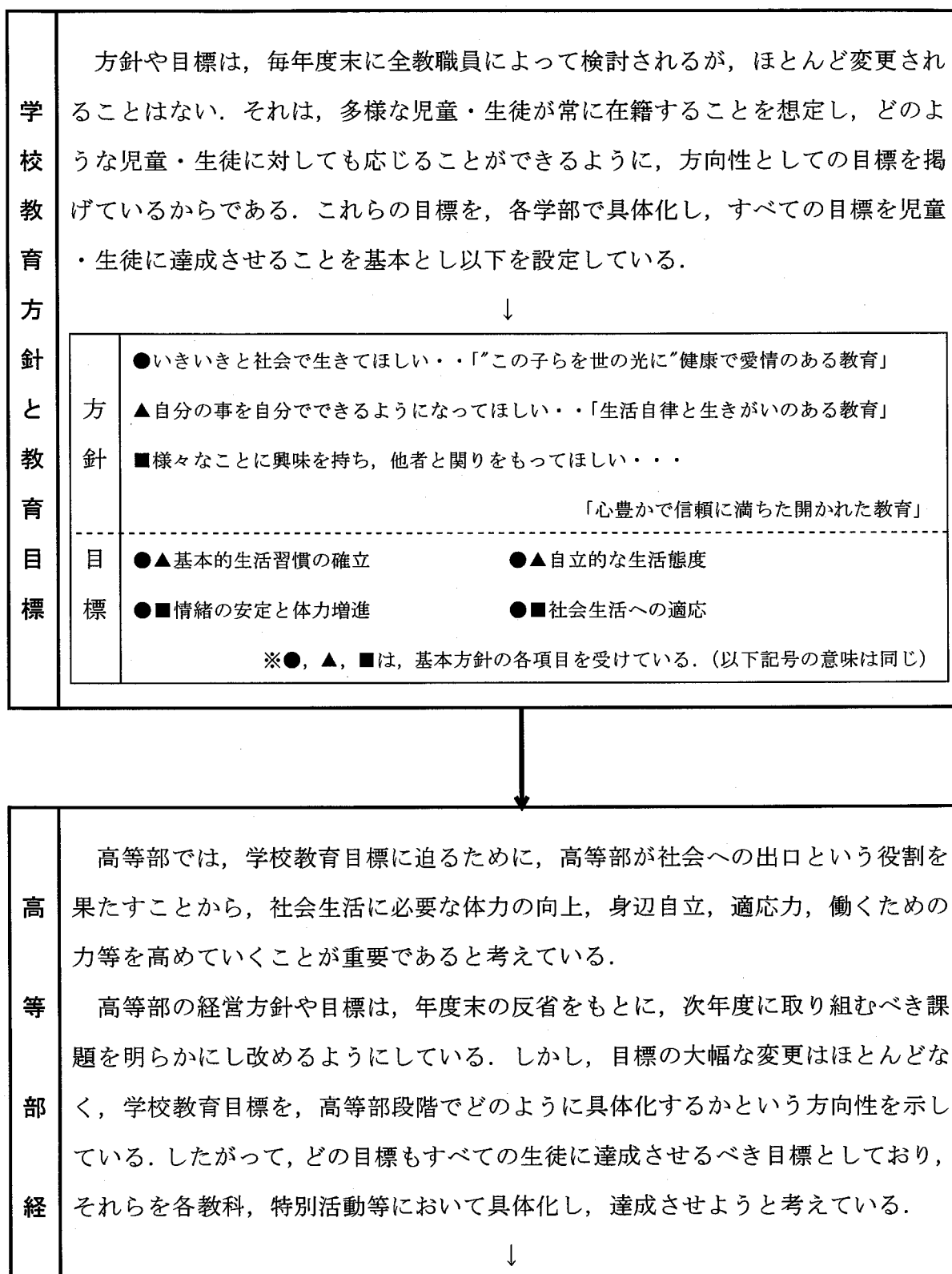
表2 発達の程度

発達年齢	運動	探索	社会	生活	言語
6歳以上	14	2	7	18	8
5～6歳	3	5	3	3	4
4～5歳	6	6	4	4	1
3～4歳	6	10	0	2	3
2～3歳	2	2	6	0	4
1～2歳	3	6	13	6	8
0～1歳	0	3	2	0	6

※津守式乳幼児精神発達診断法(H8.5)より

## 第二節 T校高等部体育の個が生きる指導計画作成の流れと手順

T校高等部の平成8年度第3学年の6名の生徒を例にして、各生徒に対する個が生きる指導計画作成した際の手順について以下に示す。



↓

営 方 針 と 学 部 目 標	①生徒理解のための諸検査，調査，観察を行い，実態を的確に把握し，さらに様々な観点から集団としての特性を明らかにする。 ②社会との接点としての高等部の役割と位置づけを，小学部・中学部との関連の中で明らかにし，個々の実態に応じた指導目標を設定してその達成に努める。 ③能力や適性に対応できるよう指導内容の選択を行い，適切な教育課程を編成する。 ④生徒の能力や特性に応じた学習集団の編成とT-Tの工夫により効果的な指導を図る。 ⑤指導記録の累積に基づき，学習の評価を適切に行う。 ⑥交流教育を計画的，継続的に推進する。 ⑦関係諸機関と緊密な連携を取り合い生徒個々の能力に合った適切な進路指導を行う。 ⑧家庭との連携を密にし，一貫した指導をめざす。
	● 体力の向上を図り，心身共に健康で安全な生活ができるようにする。 ●▲基本的な生活習慣をより確実にし，生活の自立を図る。 ●■様々な場面での適応力を高め，落ち着きのある充実した生活ができるようにする。 ●■個々の実態に応じた指導目標を設定して，社会生活に必要な様々な能力を高め，意欲を持って取り組む態度を養う。

↓

体 育 の 方 針	<p>体育の目標についても年度末の反省を踏まえ改めるようにしているが，高等部目標を受けて設定しているため，大きな変更はない。これらの目標を，程度の差はあっても，どの生徒にも達成させたいと考えている。そこで，高等部の目標において掲げられていることを具体化するために，高等部目標において掲げられていることを以下のように捉え，目標を設定している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体力の向上を第一目標として掲げている。</li> <li>・生活自立のためには，様々なことを克服していく力を高める必要がある。</li> <li>・他者と関われる運動を身につけることで充実した生活を送ることができる。</li> <li>・適応力や落ち着きのある行動を集団の中でとれるようにする。</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p>
-----------------------	--

と 目 標	針 ①学部の目標を、各単元で一人ひとりの実態に合わせて達成させる。 ②他学部の指導内容、時間、場所等を考慮し、高等部としての目標を設定する。 ③在籍生徒の実態を充分把握し、どの生徒にも行える内容とする。 ④前年度の反省を十分に活かした目標、内容、方法とする。
	目 標 ● 体力の向上を図り、心身ともに健康で安全な生活が送れるようにする。 ●■克服する力や頑張ろうとする気持ちを高める。 ●■余暇や将来に渡って行える運動を身につける。 ●■集団としての行動や活動が落ち着いてできるようにする。

学 習 集 団 の 実 態 把 握	<p>これらの目標を達成させるために単元を設定するが、その設定のための基礎資料を得るために学習集団の実態把握を行う。ここでは、発達年齢の開きを捉えるために標準化されたテストを用いたり、どの位の体力(歩いたり走ったりする力)があるかを知るために過去の記録を用いたり、配慮しなければならない生徒の事柄を知るために生育歴を用いたりしながら、学習集団としての特性を把握しようと考えている。</p>	
	<table border="1"> <tr> <td>集 団 の 把 握</td> <td>           発達年齢の開きの把握……理解する力、運動能力(移動等)、社会性等            ・津守式乳幼児精神発達質問紙検査やSM式社会生活能力検査            体力や運動経験……歩いたり走ったりする力、興味や関心            ・過去の学習内容やその記録            配慮すべき事柄……障害の特性や程度、病歴等            ・障害の状態                      ・生育歴         </td> </tr> </table>	集 団 の 把 握
集 団 の 把 握	発達年齢の開きの把握……理解する力、運動能力(移動等)、社会性等 ・津守式乳幼児精神発達質問紙検査やSM式社会生活能力検査 体力や運動経験……歩いたり走ったりする力、興味や関心 ・過去の学習内容やその記録 配慮すべき事柄……障害の特性や程度、病歴等 ・障害の状態                      ・生育歴	



体育の年間指導計画

学習集団としての実態把握から得られた事柄をすべて尊重して、単元を設定すべきではあるが、学校や学部の間年の行事計画、他学部との関係から制限される活動場所、指導できる教師の数等、様々な条件も考慮しなければならず、その結果、以下のような年間の単元を設定している。

なお、各単元は、教科目標の各項目を達成させるために、それぞれ以下のようなねらいをもって設定されている。

- 体力作り I, II : 体力の向上, 克服する力や頑張ろうとする気持ちを高める, 他者との関わりがもてる, 集団としての行動を身につける
- 運動会 : 克服する力や頑張ろうとする気持ちを高める
- 球技 I, II, III : 他者と関わって行える運動を身につける
- 水泳 : 体力の向上, 克服する力や頑張ろうとする気持ちを高める
- マラソン : 体力の向上, 克服する力や頑張ろうとする気持ちを高める



	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2,3月
単元	体力作り I	運動会	球技 I	水泳	水泳	球技 II		マラソン	球技 III	体力作り II
体力作り(行事等との関係で時間がとれない場合、学校近辺を歩いたり走ったりする)										

個人毎の実態把握

各単元を計画するに当たっては、はじめにその単元のねらい、期間、場所、指導者の人数等を確認する。次いで、その単元の中で、個が生きるようにするために、より詳しく一人ひとりの実態を把握する。その実態把握では、心身の状態や配慮すべきこと、その単元に関係する能力(歩く力や操作する力、理解する力等)、興味や関心のあること等を把握し、指導計画に生かしたいと考えている。個人毎の実態把握の例は、資料 I-1~I-6を参照。



握	個	心身の状態や配慮すべき事柄
	人	・ 障害や健康の状態                      ・ 障害や病気からくる配慮事項
	毎	単元に似関係する能力
	の	・ 歩いたり走ったりする力      ・ 物を操作する力      ・ 理解する力
	把	興味や関心
	握	・ 過去の学習内容やその記録      ・ 普段の生活の様子



各 単 元 の 指 導 計 画	<p>これらの把握事項を基に、単元における個人毎の目標や指導内容、方法を決め、指導計画を立てていく。6名の指導計画を作成した際に用いた考えを、資料Ⅱ-1～Ⅱ-6に示す。（資料の太枠線で囲まれた部分）</p> <p>指導計画を個人毎に詳しく立て、授業を行うべきであるが、活動場所や指導者数の制限で、同じような目標や内容を設定した生徒達を、グループ（3～4グループ）としてまとめた形で指導計画を提示して、各グループに教員2～6名を配置し、一人ひとりの目標を達成させるように、各指導者に配慮してもらうようにしている。</p> <p>なお、各単元の指導計画は、資料Ⅲ-1～Ⅲ-8を参照。</p>
--------------------------------------	---

### 第三章 結果

本章では、はじめに、T校高等部体育の指導計画に基づいて行った授業による成果を示す。次いで、成果における問題が、指導計画作成段階のいずれにおいて生じたのかを明らかにする。

#### 第一節 授業の成果における問題

T校高等部の平成8年度第3学年の生徒6名に対して行った体育授業8単元において、単元終了後の成果は、以下の表3のようになった。評価の基準としては、各生徒に単元毎に立てた目標に対し、単元終了後に概ねその目標に到達したものを〔○〕、ほとんど到達できなかったものを〔×〕、一部到達したものを〔△〕としている。また、長期欠席の生徒や体調不良等で見学が多かった生徒については、これらの評価は〔－〕としている。単元によっては、ひとりの生徒に対して到達すべき目標を2つ設定している単元もある。

なお、各生徒の実態並びに指導計画作成の流れは、資料Ⅲ－1～Ⅲ－6に示す。

表3 授業の成果

氏名	体力Ⅰ	運動会	球技Ⅰ	水 泳	球技Ⅱ	マラソン	球技Ⅲ	体力Ⅱ
T.M.	○	×・○	×	○	×	○	×	－
F.H.	△	×・○	×	×	○	○	○	○
Y.M.	○	○	△	△	○	○	○	○
S.Y.	△	○・○	○	○	○	○	○	○
H.R.	○	○・○	△	○	○	－	○	○
I.Y.	△	○	○	○	○	○	－	－

## 第二節 授業の成果に問題を生じさせた要因

第一節で示したような問題は、T校における個が生きるための基本的な考えを具体化していった結果生じた成果である。したがって、具体化していく過程のどこかに、これらの問題を生じさせた根元的原因があると考えられる。

本節では、問題を生じさせた根元的原因が、どの段階で生じたのかを検討する。

### 第一項 成果に [×] あるいは [△] を生じさせた原因についての検討

#### 1) 単元・体力作り I

##### (1) F.H. 成果 [△]

目標：友達と手をつなぎながら最後まで歩き通す。

内容：約800mの距離をグループ内の友達と手をつないで歩く。

成果：休まずに最後まで歩き通すことはできるが、つないでいる手を離して歩いてしまう。F.H. が手を離す都度、手をつなぎにしてくれる友達とペアにしたり、ペースを合わせてくれる友達と歩かせたのだが、最後まで手をつなぐことはどうしてもできなかつた。

F.H. は、始めは手をつなぐが、歩いていると突然手を離し、立ち止まったり一人で歩いてしまった。授業では、教師が手をつなぐように働きかけたり、歩くスピードが同じような友達にしたり、離されても手をつなぎ直してくれる友達とペアにしたが、その時はつなぐものの、何十メートルか歩くとまた手を離してしまった。また、この状態は単元始めから終わりまで変わることがなかつた。しかし、800mという距離は余裕を持って歩いていた。

これらのことから、F.H. がつなぎ通せなかつたのは、歩く距離やペースが辛くて手を離したのではなく、友達との関わり方として最後まで手をつなぐことが、その時点でのF.H. にとって難しかった、あるいは、一緒に歩く友達の選択に原因があつた、と考えられる。

最後まで手をつなぐという目標は、友達と関わる機会も少なく、その関わり方も身に付いていないF.H. に対して、友達と関わる第一歩として手をつながせようと考えたものである。F.H. は、教室の中で友達と一緒にいるが、自分から積極的に関わろうとせず、また、友達からの働きかけも少ない。しかし、母親と500m程の登下校時には手をつないでいられることが把握されており、母親と手をつなぎ続けられるのであれば、友達とも手をつなぎ続けるようになるのではないかと考え、目標として設定している。その結果、最後までつ

なくことはできないが、何十メートルかはつないで歩いており、他者との関わりとしての手をつなぐことが、いくらかできるようになってきていると捉えられる。

次に、一緒に歩く友達の選択については、F.H.と同じグループの生徒の内、F.H.が手を離しても手をつなぎ直してくれるような友達や、一緒にペースで歩くような友達を教師の方で選択して手をつながせている。実態把握の“誰と関われるか”という項目に対して、母親や教師とは手をつなぎ続けられること、特定の友達の側へ寄っていったり友達を叩いたりする等のいたずらが見られること、が把握されている。これを基に一緒に歩く友達を選択すべきだが、実際の授業では、F.H.が興味を示す友達を手をつなぐペアとして選ぶのではなく、同じグループ内で手をつないでくれる友達とペアにさせている。つまり、F.H.が“手をつなぎたい”と思っている友達を選ぶのではなく、教師の側がF.H.と手をつないでくれる友達を選択しているのであり、F.H.が興味を示す友達と手をつながせれば、最後まで手をつなぎ続けたかもしれないとも考えられる。

以上から、実態把握から目標を設定する際、F.H.が興味を示す友達がいたということを十分に取り入れず、教師の側からF.H.と手をつないでくれる友達を選択して手をつながせようと考えたことに、成果としての問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、実態把握の結果を方法に十分反映させなかったことに、原因があるように考えられる。

## (2) S.Y. 成果 [△]

目標：友達と手をつなぎ、決まった距離を速く、休まずに最後まで歩き通す。

内容：1.2Km程の距離を友達と手をつないで30分以内で歩く。

成果：長い距離を歩けるようになってきたが、ペースが速くなると集団についていけず、突然座り込むことがあった。

S.Y.は、長い距離を歩けるようになったが、ペースが速くなると集団についていけず、突然座り込んでしまう。つまり、ペースが速くなるとついていけないことが問題といえる。

単元の始めは、授業時間内で学校へ帰ってくる必要から、距離を短くして歩かせ、慣れるにしたがい距離を伸ばしている。S.Y.は、単元中盤以降1.2km程度であれば、30分前後で歩き通せるようになった。その距離やペースでは問題なく歩いていたS.Y.だが、単元終盤にさらに速く歩かせようとしたところ、突然座り込んでしまうようになった。その際、教師がS.Y.に体調の確認をしたり、励ましたり、一緒に歩いている友達に待ってもらって手をつなぎ直してもらおうと、立ち上がって再度歩き始めた。しかし、またしばらくすると同

じように座ってしまった。その結果、集団から遅れて学校へ戻ってくることが多く、単元終了時までこの様子に変化は見られなかった。

これらのことから、ペースが速くなると座り込んでしまったのは、S.Y.が歩ける最高のペースが他の生徒のそれと比べて低く、したがって、S.Y.に要求する歩くペースの設定が高すぎたことに原因があったと考えられる。

このペースは、現在の体調や障害の状態が安定しているので、友達と手をつなぐことでペースを速められると考えて設定している。S.Y.は、心臓に疾患があり、疲れやすく運動しすぎると顔色が悪くなる等、気分を悪くしてしまうこともあった。しかし、頑張ろうとする意欲が強く、その頃は心臓の状態も安定し、周囲からの励ましに応えて活発に活動できるようになってきていた。そこで、友達と手をつないで集団として歩き、周りから影響されてそのペースを少しずつ上げていくことで、体力を高めようと考えたのである。実態把握では、S.Y.が歩けるペースも把握されており、それを基本として少しずつ速くしていこうとも考えている。

しかし、座り込んでしまったということは、集団のペースがS.Y.の最高のペースよりも高いものとなっていたということである。集団のペースを落とすことで、つまり、S.Y.にとって最適のペースで歩かせることができたならば、S.Y.が最後まで座り込まずに歩き通せたかもしれないといえる。

以上から、実態把握でS.Y.の歩くペースをつかみそれを基本としながら、授業ではその実態が尊重されずに、集団のペースでS.Y.を歩かせようと考えたことに、成果としての問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、実態把握を内容に十分反映させなかったことに、原因があるように考えられる。

### (3) I.Y. 成果 [△]

目標：友達のペースに合わせてたり段差に気を配りながら手をつないで歩く。

内容：1.5km程の距離を友達と手をつないで歩く。

成果：教師のことばかりを気にして友達のことを考えて歩くことができなかった。

I.Y.は、友達と手をつないで歩いているが、教師のことばかりを気にして、友達のペースに合わせてられなかったり、手をつなぎながら教師の方へ寄ってきたりしたことが問題といえる。教師が、“しっかりと前を見て”、“〇〇ちゃんが道路にはみ出るよ”等と声を掛けても、その時に直すだけで、また、教師の方を見て話をしようとしてしまう。つまり、興

味の対象が教師に向けられ、友達を考えて歩くことができなかつたのである。

実態把握では、“最高学年としての自覚をもてるようになってきているが、友達との関わりは持てない”ことが明らかにされており、友達のことを考え、関われるようになってほしいと願って目標を設定している。I. Y. は、知的なレベルも高く、教師が話すことをほぼ理解できる。そうであれば、友達と手をつないで歩くことで、相手のペースや段差等を考え、それがきっかけとなって、友達との関わりがもてるようになるのではないかと考えたのである。

しかし、教師のことばかりを気にして、友達と関わるができなかつたということは、実態把握の結果から相手のことを考えて行動できると判断したことに原因があつたのではないかと考えられる。

I. Y. は、小学校、中学校と養護学級で過ごしたが、その頃から同年代の友達とは関わりを持ちづらく、会話の対象は教師が中心であつた。T校高等部に入学してもその傾向は変わらず、普段、友達から声を掛けられると顔を合わせられずにそむけたり、一緒に遊ぼうと誘われても返事をできないこともあつた。しかし、3学年に進級し生徒会長という役を担うことになり、最高学年、生徒会長という意識が高まりつつあつた。そこで、関わりの対象を教師ではなく、友達に向けさせようと意図したのだが、単元を通して関わる姿が見られることはなかつた。

これらのことから、普段友達からの働きかけに応えられない姿を見て、I. Y. は友達とどのように関わったらよいかを身につけていないと判断し、知的レベルや生徒会長等の意識の高まりを見て、友達と関わる方法を身につければ関われるようになると考えていることが分かる。しかし、単元を終了して、I. Y. は関われないのではなく、関わろうとしないことが分かつた。つまり、I. Y. は、友達のことを“自分が関わるべき対象”と考えず、“関わりの対象は教師である”と考えていたのである。すなわち、実態把握で、関わり方を知らないから顔をそむけたり返事ができないと解釈したが、実際には、友達と関わっても面白くないとI. Y. は思っているのであり、ここで解釈の違いが生じているのである。

I. Y. の場合、友達との関わり方を身につけさせるのではなく、同年代の友達、特に、中、重度の知的障害のある友達と関わることの必要性を理解させ、気持ちを育てることが必要であつたと考えられる。

以上から、I. Y. が友達と関わっても面白くないと考えていることを分からず、教師が勝手に、友達との関わり方を知らないと判断して、I. Y. が関わり方を知れば、友達と関わる

ようになると考えたことに成果としての問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、実態把握の解釈を誤り、目標を正しく設定できなかったことに原因があるように考えられる。

## 2) 単元・運動会

### (1) T.M. 成果 [×]

目標：教師にできるだけ補助されずにゴールまで走り続ける。

内容：80mの徒競走。

成果：教師に働きかけられないとゴールまで走りきれなかった。

T.M.は、教師から働きかけられないと最後まで走りきれず、単元終了までこの状態に変容は見られなかった。

徒競走の練習では、教師が手をつないだり、教師が前に立ち、走る方向から呼んだりして、T.M.を走らせるようにした。すると、その働きかけに応じて、ゴールまで走り通すこともあった。しかし、教師の位置が離れたり、働きかけられないと走ることをやめてしまった。つまり、どうしても一人では走り通すことができず、教師の働きかけが不可欠であった。

徒競走は、生徒個々の実態に則して距離を決めるようにしている。T.M.は教師が傍らにつくと校庭の半周程なら走り通すようになってきているので、徒競走の距離を校庭半周と設定した。また、徒競走が発表の場であるので、できるだけその半周を教師の働きかけがない状態で走り通すことを目標とした。T.M.の場合、教師が働きかければ半周を走り通すことができるので、その働きかけを少なくしていき、運動会では一人で走れるようになってほしいと考えたのである。

しかし、一人で走ることができなかったことは、“教師が働きかければ走るので、働きかけを少なくすれば一人で走れるようになる”と考えたことに原因があると考えられる。

実態把握では、T.M.が日常生活のほとんどで介助を要し、一人でできることも少ないことを把握していた。しかし、走ることについては、教師が“よーいどん”といって走り出すと、それについて走り出す等、模倣して走ることが分かっている。そこで、少しでも一人で走ってほしいと願い、教師からの働きかけを、少なくしていこうと考えたのである。

しかし、最後まで目標を達成できなかったということは、T.M.が模倣するレベルには至っているが、ゴールまで走るものの意味や価値を見い出すまでには至っていないために、



一人で走ることができなかつたと考えられる。つまり、走る、走らないということについては実態を見ているが、なぜ走るのかというその意味や価値の認識については深く追求していなかつたといえる。

教師からの働きかけが少ない状態で走るということは、ゴールまで走る、速く走るといった徒競走の意味や価値を見出していなければ、行えないことであると考えられる。しかし、T.M.は見出していなかつたのであり、この点の実態把握が不十分であつたといえる。

この徒競走の意味や価値を見出しているか否かについては、実態把握の項目として設定していない。これは、T.M.とは関係しない段階で、徒競走という種目を運動会種目として設定しており、この種目がT.M.のために設定したものではないからである。

T.M.の場合、一人で走ることを前提とした運動会種目を設定するのではなく、T.M.の実態に則した教師と手をつないでの徒競走や、目標物を利用する等の働きかけによる徒競走を許容する単元とすべきであつたと考えられる。

以上から、徒競走の意味や価値を見出しているか否かを調べないまま、つまり、見出しているか否かに関係なく、一人で走ることを前提として単元を設定したことに、成果としての問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、学校独自でねらいを設定し、生徒の実態を知ろうとせずに、単元を押しつけようとしたことに原因があるように考えられる。

## (2) F.H. 成果 [×]

目標：教師からできるだけ補助されずにゴールまで走り通す。

内容：80mの徒競走。

成果：教師に押されないとゴールまで走りきれない。

F.H.も、T.M.と同じような目標と具体内容を設定し指導を行ったが、同じような問題が生じている。

以上から、徒競走の意味や価値を見出しているか否かを調べないまま、つまり、見出しているか否かに関係なく、一人で走ることを前提として単元を設定したことに、成果としての問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、学校独自でねらいを設定し、生徒の実態を知ろうとせずに、単元を押しつけようとしたことに原因があるように考えられる。

### 3) 単元・球技 I (手を使った球技)

#### (1) T.M. 成果 [×]

目標：興味を示す対象を広げる。

内容：風船に触れる。

成果：風船に興味を示さず、触れようとしなかった。

T.M. に対して、目で追えるように、動きのゆっくりとした風船を釣り竿に糸で結びつけ、目の前をゆっくり動かしたり、興味を引くよう声を掛けたりしたが、単元終了まで、まったく興味を示さず、手を伸ばしてもくれなかった。様々な働きかけをしたり、風船の色を変えても、風船を目で追わず、手も伸ばさなかったということは、T.M. が風船を興味の対象とできなかったと考えられる。

本単元でT.M. に対して風船を用いたのは、T.M. が興味・関心の対象が乏しいために好きな物が分からなかったが、動きのゆっくりとしたボール（風船）を用いれば、今はできなくても、少しでもできるようになれば、物や用具を使った運動へと発展していくと考えたからである。

ところが、結果としてまったく興味を示さず、触れようとしなかったということは、風船がT.M. の興味を引くような物ではなかったということであり、実態把握においてT.M. が興味を示すような物を見つけられなかったことに原因があると考えられる。

実態把握においては、手を使った球技を行わせるために、T.M. の興味・関心がどのようなことにあるのかを見つけようとしているが、友達が遊んでいる姿を気にする（動いている意味が分かれば寄っていく）等、他者への関心が芽生えつつあることを把握している。そこで、社会性が少しずつ高まってきているので、遊び道具として風船を与えたら、もっと広がってくれるのではないかと考えたのである。しかし、まったく風船に興味を示さなかったということは、その時点のT.M. が風船を用いての運動をできる段階に達していたのか、という点も問題として指摘できる。

T.M. の発達年齢は、諸検査で1歳児未満という結果が出ている。つまり、他者との関わりを持つ方法としての球技という運動は、その時点でのT.M. にとっては、難しい課題であったのではないかと考えられる。

本単元の球技は、学習集団の実態把握を基に、ボールや風船が一つあれば将来や余暇、他者と関わるための運動となる、用具や場所を工夫することで軽度から重度の生徒まで対応できる、小学部時代から手を使ったボール運動が行われており風船等の動きがゆっくり

とした物であれば重度の生徒でもできる、と考え設定している。しかし、学習集団の実態把握では、T.M.のような重度の発達の遅れのある生徒が在籍していることは分かっており、それにも関わらず、球技のような単元を設定したことにこそ原因があると考えられる。

T.M.の場合、ボールに主眼をおいた単元を設定するのではなく、他者との関わりを持つための遊びや運動（ゲーム等）を許容できる単元を設定すべきであったと考えられる。

以上から、T.M.のように興味・関心の対象が非常に狭く、広げる段階までに至っていない生徒がいることを把握していながら、その他の生徒のことを考えて無理に球技を行わせようとしたことにこそ、成果としての問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、学習集団としての実態把握の結果を単元の編成に十分に反映させなかったことに、原因があるように考えられる。

## (2) F.H. 成果 [×]

目標：興味を示す対象を広げる。

内容：空中にある風船に触れ、叩く。

成果：風船にあまり興味を示さず、自分から手を伸ばすことが少なかった。

F.H.に対して、目で追えるように、動きのゆっくりとした風船を釣り竿に糸で結びつけ、目の前をゆっくり動かしたり、興味を引くよう声を掛けたりしたが、単元終了まで、ほとんど興味を示さず手を伸ばしてくれなかった。様々な働きかけをしたり、風船の色を変えたりしても、風船を目で追わず手も伸ばすことが少なかったということは、F.H.が風船に興味の対象とできなかつたと考えられる。

本単元で、F.H.に対して動く物（風船）に触れさせようとしたのは、身の回りにある物を投げたり、大玉を転がすことができるので、自分の近くにきた物や動きがゆっくりとした物であれば興味を示し、空中にある物へも手を伸ばして触れたり、叩くのではないかと考えたからである。その結果、いくらかではあるが、風船に手を伸ばしたり触れたりすることもあった。これらの成果から、F.H.は、できないのではなく、しようとしなかつたのではないかと捉えることができる。つまり、F.H.にとっては、風船があまり興味を引くような物ではなく、風船を叩くということに面白みを感じられなかつたと考えられる。

実態把握では、能力的なこと、過去の学習経験、興味・関心のあること等を把握している。それらから、動く物を目で追う能力が低いという側面を重視し、目の前に来た物に触れることを目標としている。さらに、目で追うためには、動きがゆっくりとした物でなけ

ればいけないことから、風船を用いるようにした。

しかし、結果としてF.H.にとって風船が興味を引くような物ではなかったことから、内容の設定で、興味・関心や過去の学習経験を重視しなかった、つまり、把握された事柄が生かされなかったために、問題が生じてしまったと考えることができる。

F.H.の場合、過去に指導され興味を引かなくなった風船を用いるのではなく、ボールにこだわらずに、興味を示す大玉や身の回りにある物を用いて指導すべきであったと考えられる。

以上から、実態把握において把握された興味・関心のあることを重視せず、F.H.の能力的側面だけに基づいて、F.H.の内容を設定してしまったことに、成果としての問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、実態把握の結果を十分に反映させずに、内容（風船）を設定したところに、原因があるように考えられる。

### (3) Y.M. 成果 [△]

目標：ルールを理解して、友達と楽しんでゲームができるようになる。

内容：2対2の風船バレーボール。

成果：ルールを理解して相手コートに打てるようになったものの、友達と協力してのプレーはできなかった。

Y.M.は、ルールを理解して相手コートに打てるようになったが、友達と協力しながら楽しんでプレーすることができなかった。その場で自分の方に来た風船を打って、自分なりに楽しめるようになったが、友達との間に落ちる風船を、友達と協力して打ち返すことはできなかった。ここでの問題は、友達と協力して楽しめるまでには高まらなかったということである。

Y.M.は、ルールを理解し風船バレーボールを積極的に行うようになってきた。しかし、協力して楽しめなかったということは、Y.M.が協力の意味を理解したり、それをプレーとして行える段階まで至らなかったために、目標に到達できなかったと考えられる。

本単元の目標で、Y.M.に対して“友達と楽しんで”を設定したのは、実態把握で“普段の生活で友達と関わることができる”や“他者への関心が芽生えてきている”という実態を把握したからである。つまり、友達と関わって何かを行い、楽しめる活動をしてほしいと考えたのである。同時に、“ひとり遊びが多く、他者と関わって行う遊びまでには至っていない”という実態も把握しており、この実態からは、他者と関わる仲立ちとしての遊びや

運動を身につけることが難しいことも分かる。

そこで、簡易なルールで、移動スピードもゆっくりとした風船を用いれば、運動が苦手なY.M.も余裕をもって活動でき、友達と協力してプレーできるようになり、楽しめるのではないかと考えたのである。しかし、この風船バレーはY.M.の興味や関心のあることから設定したのではなく、能力的な把握からできるのではないかと考え、設定したものである。

単元内では、ルールを理解し、積極的なプレーが表出するまでになっており、このことは大きな成果といえる。しかし、“他者と関わって楽しむ”を目標に設定したことが、Y.M.にとっては難しかったのではないかと考えられる。

Y.M.にとっては、このような目標の設定ではなく、ゲームを積極的に行えるようになることを始めの目標とし、それができた後に、他者との関わりという目標を設定すべきであったと考えられる。

以上から、“独り遊びが多く、他者と関わって行う遊びまでには至っていない”という実態を把握しながら、その実態を軽んじ、“普段の生活で友達と関わることができる”ことから、協力してプレーを楽しむことを目標にできるのではないかと考えたことに、問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、実態把握の結果を十分に反映させずに、目標を設定したところに、原因があるように考えられる。

#### (4) H.R. 成果 [△]

目標：チーム内で連携してゲームが行えるようになる。

内容：ビーチボールを用いてのグループ同士のバレーボール。

成果：相手コートには返すが、チーム内で連携してプレーするまでは高まらなかった。

H.R.は、ルールを理解して相手コートに打てるようになったが、チーム内で友達と協力してプレーすることはできなかった。

H.R.の場合も、Y.M.と同様、実態把握の読みとりが甘く、“連携して”プレーをすることを目標にしたのは高すぎたといえる。

このことから、自分の前に来たボールを返すことだけで精一杯のH.R.に対し、友達との連携プレーをするという教師の側から過度な要求をしてしまったことに、問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、実態把握の結果を十分に反映させずに、目標を設定したところに、原因があるように考えられる。

#### 4) 単元・水泳

##### (1) F.H. 成果 [×]

目標：少しでも水に対する苦手意識を克服する。

内容：教師とともにプールサイドへ行く。

成果：プールの方向へ行くことを拒否し、どうしても活動することができなかった。

準備運動の後、教師一人が、F.H.を時間をかけてプールの方へ行くように働きかけたが、F.H.は嫌がって座り込んでしまったり、おもらしをしてしまう等、どのように働きかけても、プールの方へ行くのを拒否してしまった。

F.H.がプールを拒否したのは水が嫌いだからであり、このことは実態把握において十分に把握していた事柄である。F.H.が水を嫌いであるにもかかわらず、プールの方へ行くことを目標としたのは、本単元の活動場所がプールであり、水に入らなくてもプールサイドの近くまで行き、少しでも水に慣れてほしいと願ったからである。しかし、プールを拒否してしまったということは、水に慣れることを、プールという活動場所のみで実現させようと考えたことに原因があると考えられる。つまり、F.H.にとっては、プールに行くのはすぐに克服できることでなく、それ以前に水に慣れるような活動を用意しなければならなかったということである。

本単元は、学校内にプールがあり、水泳指導を行うことができる条件があるので、高等部段階の生徒達に水遊びばかりでなく、泳ぎにつながるような指導を行いたいと考えて設定している。しかし、水中での活動を苦手とする生徒もいることから、小プールも利用して水に慣れる活動や水遊び等も行えるような計画を立てることにしている。しかし、指導者の人数の関係から、活動場所をプール以外には考えていない。そのため、F.H.の活動場所もプールと限定しており、目標がプールの方へ行くことにしているのである。

しかし、F.H.の場合、どうしてもプールを拒否してしまったことから、活動場所としてプールを前提とするのではなく、水に慣れることを他の場所で行えることを許容できる単元設定をすべきであったと考えられる。

以上から、プールを拒否するような生徒がいるにも関わらず、単元設定で活動場所をプールに限定し、狭い範囲の水遊びを押しつけようとしたことに、成果としての問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、学習集団としての実態把握の結果を単元の編成に十分に反映させなかったことに、原因があるように考えられる。

## (2) Y.M. 成果 [△]

目標：水に慣れて顔を水につける。

内容：水の中を歩いたり，水中での水遊びを取り入れた水慣れ。

成果：水の中でひとりで活動できるようになってきたものの，顔に水がつくのを嫌がり，顔を付けることはできなかった。

Y.M.は，壁伝いに歩いたり，ビート板を持って歩く等，水中の活動が行えるようになってきており，“水に慣れる”という目標が達成されつつあった。しかし，“顔を水につける”までには至らなかった。

この，“顔を水につける”という目標は，“克服する力や頑張る気持ち”をねらって，顔を水につけられるようになり，水中で思い切った活動をしてほしいと考えて設定している。そこに至る過程では，教師が手をつないでプールに入り，壁に沿って歩いたり，友達と円陣を組んで肩まで水につかったりと，段階を踏んで指導を行うようにしている。しかし，それ以上の段階（顔を水につける）までにはどうしても進まなかったのであり，目標を達成させるための指導段階の設定に無理があったのではないかと考えられる。

実態把握においては，顔に水がつくのを嫌がること，水に対する恐怖心を持っていること，等を把握している。これらを踏まえながらも，水遊びの種類を増やし，水中での活発な活動ができるようになることを願い，嫌いや恐怖心を克服してほしいと考え，段階を踏んだ指導を行うようにしている。

しかし，顔を水につけることができなかったということは，Y.M.にとっては，それ以前に，例えば，遊具を使って遊ぶ等の水に慣れるための活動を行う必要があったと考えられる。つまり，系統だった内容を指導段階として取り入れ，それをY.M.に適用しようとしたが，それがY.M.に合っていなかったことが，問題の原因と考えられる。

以上から，実態から把握されたことに応じて内容を計画したのではなく，決まったプログラムを用いたことに，問題を生じさせた原因があるといえる。すなわち，実態把握の結果を十分に反映させずに，方法を設定したところに，原因があるように考えられる。

## 5) 単元・球技Ⅱ（用具を使った球技）について

### (1) T.M. 成果 [×]

目標：簡易ゴルフができるようになる。

内容：簡易ゴルフ。

成果：クラブは振るが、ボールを見ようとせず、ボールも追おうとしなかった。

この成果は、T.M.の単元・球技Ⅰの問題と同様であり、T.M.のように興味・関心の対象が非常に狭く、広げる段階までに至っていない生徒がいることを把握していながら、その他の生徒のことを考えて無理に球技を行わせようとしたことに、成果としての問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、学習集団としての実態把握の結果を単元の編成に十分に反映させなかったことに、原因があるように考えられる。

## 6) 単元・球技Ⅲ（足をつかった球技）について

### (1) T.M. 成果 [×]

目標：足下のボールを蹴り、追えるようになる。

内容：教師と1対1のサッカーボール蹴り。

成果：ボールに関心を持たず、蹴ることも追っていくこともできなかった。

この成果についても、単元・球技Ⅰ、Ⅱの問題と同様であり、T.M.のように興味・関心の対象が非常に狭く、広げる段階までに至っていない生徒がいることを把握していながら、その他の生徒のことを考えて無理に球技を行わせようとしたことにこそ、成果としての問題を生じさせた原因があると考えられる。すなわち、学習集団としての実態把握の結果を単元の編成に十分に反映させなかったことに、原因があるように考えられる。

以上、各問題を生じさせた原因を探ってみたわけだが、これらの問題を生じさせた原因となる段階（表4-1,2）とその際に考えられたこと（表5-1,2）を以下にまとめる。



表 4-1 問題を生じさせた段階 (1)

単元 氏名 段階	体力 I			運動会		球技 I			
	F. H.	S. Y.	I. Y.	T. M.	F. H.	T. M.	F. H.	Y. M.	H. R.
教科目標	○	○	○	○	○	○	○	○	○
集団把握	○	○	○	○	○	○	○	○	○
単元設定	○	○	○	×	×	×	○	○	○
実態把握	○	○	○	×	×	×	○	○	○
目標設定	○	○	×	×	×	×	○	×	×
内容設定	○	×	×	×	×	×	×	×	×
方法設定	×	×	×	×	×	×	×	×	×
成 果	△	△	△	△	△	×	×	△	△

表 4-2 問題を生じさせた段階 (2)

単元 氏名 段階	水 泳		球 II	球 III
	F. H.	Y. M.	T. M.	T. M.
教科目標	○	○	○	○
集団把握	○	○	○	○
単元設定	×	○	×	×
実態把握	×	○	×	×
目標設定	×	○	×	×
内容設定	×	○	×	×
方法設定	×	×	×	×
成 果	×	△	×	×

表5-1 考えられたこと (1)

生じさせた段階	単元名	氏名	考えられたこと
学習集団としての 実態把握から 単元設定	運動会	T.M. F.H.	徒競走の意味や価値を見出しているか否かを調べないまま、つまり、見出しているか否かに関係なく、一人で走ることを前提として単元を設定した。
	球技Ⅰ 球技Ⅱ 球技Ⅲ	T.M.	T.M.のように興味・関心の対象が非常に狭く、広げる段階までに至っていない生徒がいることを把握しながら、その他の生徒のことを考えて無理に球技を行わせようと考えた。
	水 泳	F.H.	プールを拒否するような生徒がいるにも関わらず、単元設定で活動場所をプールに限定し、狭い範囲の水遊びを押しつけようとした。
実態把握から目 標の設定	体力Ⅰ	I.Y.	I.Y.が友達と関わっても面白くないと考えていることを分からず、教師が勝手に、友達との関わり方を知らないと判断して、I.Y.が関わり方を知れば友達と関われるようになると考えた。
	球技Ⅰ	Y.M.	把握した実態を軽んじ、“普段の生活で友達と関わることができる”ことから、協力してプレーを楽しむことを目標とできるのではないかと考えた。
	球技Ⅰ	H.R.	自分の前に来たボールを返すことだけで精一杯のH.R.に対し、教師の側から過度な要求をした。

表5-2 考えられたこと (2)

生じさせた段階	単元名	氏名	考えられたこと
目標から内容の設定	体力 I	S. Y.	実態把握でS. Y. の歩くペースをつかみそれを基本としながら，授業ではその実態が尊重されずに，集団のペースでS. Y. を歩かせようと考えた。
	球技 I	F. H.	実態把握において把握された興味・関心のあることを重視せず，F. H. の能力的側面だけに基づいて，F. H. の内容を設定してしまった。
内容から方法の設定	体力 I	F. H.	興味を示す友達がいたという実態を十分に取り入れず，教師の側からF. H. と手をつないでくれる友達を選択して手をつながせようと考えた。
	水 泳	Y. M.	実態から把握されたことに応じて方法を用いたのではなく，実態を軽視して，決まったプログラムを用いようと考えた。

## 第二項 成果 [○] についての検討

T.M. と F.H. は、成果としての問題 [×] が多く出現しているが、[○] の成果も得られている。そこで、T.M. と F.H. の [○] の成果がどのようにして得られたのかを、明らかにしたい。そこで、T.M. の単元・水泳と、F.H. の単元・球技Ⅱがどのような考えに基づいて作成したのかを明らかにする。

### 1) 単元・水泳

#### (1) T.M. 成果 [○]

目標：水中での活動を多く行えるようになる。

内容：小プールや大プールを歩いたり、遊んだりする。

成果：暖かい日には喜んでプールに入り、教師と手をつないでプールの中を歩く等、活動できる時間が長くなった。

T.M. は、気温が高い日には、調子よく活動でき、笑顔で教師と共にプールに入って手をつないで歩くことができた。自発的な活動は見られないものの、プール内で活動できる時間も徐々に長くなってきた。体調が思わしくないときは、気温が高い日でも短時間の内に唇が紫になってしまったが、プールサイドで休憩をとると、また活動を再開する等、水中での活動が長く行えるようになってきている。前年度に比して、このように活動できるようになったのは、体力作りによって、基礎的な体力が向上してきているためであると思われる。そのために、手をつないで歩くような活動ならば、比較的長く行えるようになってきたと考えられる。

この、水中での活動を多く行えるようになるという目標は、T.M. の基礎的な体力が高まってきており、水温が高く体調もよければ、教師の補助で水に慣れるための活動が行えるようになると考え、設定されている。T.M. は小学部以来水遊びやプールでの活動を経験しているが、痩身であるために水温が低いと体熱を奪われやすく、水に入っている時間が制限され、十分な活動が行えなかった。しかし、高等部に入り、学校を欠席する日も少なくなり、歩く距離等からみても、基礎的な体力が高まってきている。そこで、水温が高くコンディションがよければ水中での活動を行え、また、それを通してさらに体力を高めてほしいと願ったのである。その結果、水中での活動時間が長くなってきたと考えられる。

また、水中での活動内容については、無理強いをせず、T.M. が行えそうなことを中心に、

教師が働きかけるようにした。そのために、実際の指導は、教師が常にT.M.と手をつなぎ、T.M.が恐怖心を持たないような歩くことを中心とした活動内容となっている。

次に、本単元の実態把握であるが、T.M.が常に介助を要する生徒であることから、水中での活動を考える際に配慮する事柄が多く、そのために、現在の健康や身体の状態、障害の状態、過去の記録、水に対する気持ちや水に入った時の変化、介助の方法等を項目としている。また、水中で活動できそうな内容等も項目としている。その結果から、T.M.の体調をよく観察しながら、無理強いせず、できることを中心とした目標や内容を設定できたのである。

本単元は、体力の向上と克服する力や頑張る気持ちの高まりを、プールでの水に慣れる活動や泳ぎにつながる活動を通して実現させようと設定されている。T.M.に対しても、これらのねらいから、T.M.の今の力を基本とし、それをいくらかでも高めることを目指して、実態把握をし、T.M.に合った目標や内容を設定している。

以上から、単元のねらいを達成させるために、T.M.の今の実態を正しくつかみ、今できることを基本としながら、目標や内容を設定し、無理強いしない指導を行ったことが、成果として〔○〕を生じさせたと考えられる。

## 2) 単元・球技Ⅱ（用具を使った球技）

### (1) F.H. 成果〔○〕

目標：簡易ゴルフができるようになる。

内容：教師と一緒に簡易ゴルフ。

成果：クラブを渡すと一人で振ってボールを打てるようになり、転がったボールの方へ歩いていくこともあった。

F.H.は、はじめボールを見ようとしなかったが、教師がF.H.の背後につきクラブの振り方やボールの打ち方を指導し、転がったボールと一緒に追っていくようにしたところ、一人で振ってボールに当たるようになった。すると、当てたボールの転がった方へ歩いていく姿が見られるようになった。これは、F.H.がボールをクラブで打つことを覚え、それができるようになって、面白みを感じられるようになったからであると考えられる。

この、簡易ゴルフができるようになるという目標は、F.H.が教室や校庭で棒を渡すと握って振ったり、的等の目標物をいくらかは理解できることから、F.H.が扱いやすい用具を用意して、ボールを打つことができれば、的に向かってボールを打てるようになるのでは

ないかと考えて設定している。その結果、はじめ、クラブでボールを打つ意味とやり方を分からなかったF.H.が、教師から指導されて当てることを覚え、積極的に打ってボールを追うようになったと考えられる。

実態把握においては、用具を使った球技を行わせるために、物への関心、物を扱う力、目と手を協応させる力等を項目としている。その結果、棒を握ったり、振ったり、たたいたりでき、目標物をいくらかは理解できることを把握している。この実態から、教師が介助すれば、クラブを振ってボールを打てるようになると考えている。

また、本単元は、余暇や将来に他者と関わって行う運動ができるようになることをねらいとし、用具を使った球技としてゴルフ（ボールを目標物に向かって打つ）を設定している。これは、前年度、重度の知的発達遅れのある生徒が、クラブを握って一人で振り目標物までボールを打ち続けた、ということから、用具を工夫することによって、全生徒が楽しめるようになるのではないかと考えたのである。

以上から、単元設定の段階ではF.H.がこの単元を行えるかどうか分からなかったものの、実態把握から物に興味を示し、操作も行え、目的を理解する力もいくらかあることが分かり、1対1の指導の結果、できるようになってきたと考えられる。

## 第四章 考 察

個を大切に、個性の伸長を図るということは、学校教育が本来目指すことであったが、現実には、“落ちこぼれ”現象を生み出している。その原因の一つが、一斉画一による授業にあるということは、第一章で指摘したところである。この、“落ちこぼれ”という問題に対し、これからの学校教育では、一斉画一による授業の改善を図るとともに、一層個に傾倒する側面を高める授業を構築し、展開していく必要があると考えられる。

養護学校においては、個に傾倒した側面を高める授業に当初から取り組んできている。特に、養護学校の高等部にあつては、在籍する生徒達の障害の程度や能力が多様化していることから、個に傾倒した側面を高める授業を行っていくことが急務とされている。

T校高等部の体育においても、多様化する生徒一人ひとりに対し、個が生きることを願い、個が生きる授業を実践してきている。T校では、個が生きるということを、障害の実態や生徒の発達段階に応じて、意図的、系統的に授業の計画・実践をし、満足感や成就感を持たせたりしながら様々なことを経験させることによって、自分から進んでやってみようとする意欲や課題や場面に自発的に取り組もうとする態度を育て、一人ひとりの生きる力を高めること、と捉えている。これは、一人ひとりの生徒の実態が大きく異なるという状況に対し、その一人ひとりの能力や特性等の個人差をいかに掴み、その個人差にどのように適切に応じていくことの表れである。

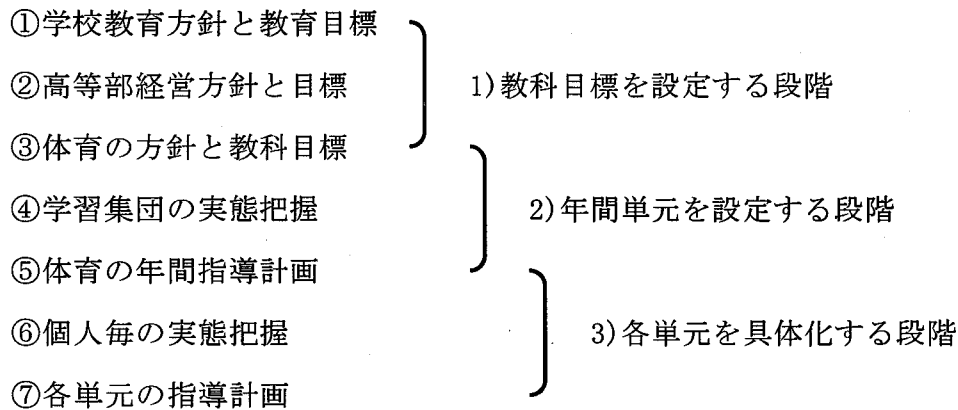
しかし、このように考え、個が生きることを願って計画し、実践した授業であっても、成果として問題が生じたことも事実である。この問題発生の原因には、個が生きることを教科体育で具体化していく段階で、一人ひとりの個人差への応じ方にあやまちがあつたのではないかということを示唆していると考えられる。

そこで、今後、成果としての問題を生じさせないために、T校高等部において、これまでに行ってきた個が生きる体育の指導計画について、授業へと具体化していく各段階での個人差への応じ方が、よかつたのかどうかを明らかにし、今後必要とされる個が生きる指導計画を作成する手順について検討しようとした。

本章では、第3章で明らかとなつた授業の成果としての問題を生じさせた原因について、その原因を、一人ひとりの個人差にどのように応じようとしていたのかという視点から考察する。

## T校における個が生きる指導計画の作成段階の考え方についての検討

T校高等部の体育では、障害の程度や能力差における「量的個人差」及び「質的個人差」の大きい生徒に対し、より個が生きることを願って指導計画を立て授業を実践してきた。その流れを示すと以下のようなになる。



これらの各段階を、1)学校教育目標、学部目標から教科目標を設定する段階、2)教科目標と学習集団の実態把握から年間単元を設定する段階、3)年間の単元と個人の実態把握から各単元を具体化する段階の3つの段階に分けて考察を行う。

### 1)教科目標を設定する段階

T校では、遺伝的あるいは後天的な障害により、様々な問題を抱えている児童・生徒に対し、一人ひとりが将来生き生きと、他者と関わり合いながら、自律した生活を送れるようになるという方針のもと、学校教育目標を設定し児童・生徒像を描いている。

学校教育目標を受け高等部では、高等部が社会への出口という役割を果すことから、体力向上、身辺自立、適応力、働く力等を高めていくことが重要であると考え、高等部の目標を設定している。

それらを受け、体育科では、体力の向上を図ること、克服する力や気持ちを高めること、余暇活用の運動、集団行動を目標として設定している。

学校教育目標から教科目標へと至る各段階では、目指すべき大まかな方向性を規定している。この目標は、その後の展開で、「量的個人差」と「質的個人差」を考慮し、特に「質的個人差」に応じることによって、それらの伸長を図ろうとしていることが認められる。

前章の失敗例の検討では、この段階に原因があったものがみられなかったことから、この目標自体に問題はないと考えられる。しかし、この目標は、毎年ほとんど変わらないこ



とから、どのような生徒にも応じられるよう、生徒を見る前から、教師が経験的につかんでいることや一般的な養護学校として備えておく目標、といった観点で設定しているのが現実といえる。したがって、今後は経験に基づき、あるいは、一般論で設定するのではなく、その年度に在籍する生徒の実態（「量的個人差」及び「質的個人差」）を把握してから考え、“この子たち”に応じるための目標設定をした方が、これ以降の段階で具体化していく際に、より一人ひとりの「質的個人差」に応じやすい目標を設定できると考えられる。表現を変えれば、教科目標が、学習集団に受け入れられやすいものとなると考えられる。

## 2) 年間単元を設定する段階

学習集団の把握では、単元を設定していくための基礎資料となるように、生徒の発達段階、過去に何をやってきたか、要配慮生徒の有無等をつかみ、「量的個人差」及び「質的個人差」をふまえた学習集団の特性を把握しようと考えている。教科目標に迫るためには、この生徒達はどういうことが、どの程度可能であるかという個人差をつかむ必要があったからである。

この個人差の範囲を基本とし、この集団に対する年間の単元を設定していた。この設定については、その後の展開で、「質的個人差」に応じられるように考えており、問題はないように考えられる。しかし、実際には前年度の単元を踏襲する傾向があり、その結果、以下のような問題を生じさせた原因が明らかにされている。

年間単元を設定する段階に原因のあった例は、

・球技Ⅰ、球技Ⅱ及び球技ⅢのT.M.

原因) T.M.のように興味・関心の対象が非常に狭く、広げる段階までに至っていない生徒がいることを把握していながら、その他の生徒のことを考えて無理にT.M.に応じきれないような球技を行わせようと考えた。

・水泳のF.H.

原因) F.H.のような、プールを拒否する生徒がいるにも関わらず、単元編成で活動場所をプールに限定し、狭い範囲の水遊びをさせようと考えた。

・運動会のT.M.とF.H.

原因) 徒競走に意味や価値を見出しているか否かということの問題とせず、見出しているか否か関係なく一人で走ることを前提として単元を設定した。

の3例であった。

T.M.のように、運動を広げる段階までに達していない生徒がいることを把握していながら、その生徒が応じられないようなボールゲームを、無理に行わせるような単元を設定していた。これは、他の生徒のことも考えたために、ボールゲームという設定をし、さらにボールに重点を置くようにして単元を設定したために、その結果単元のねらいが狭くなりすぎてしまったからであると考えられる。つまり、学習集団の実態把握で、集団の特性という把握の仕方をしたために、一人ひとりの生徒の「質的個人差」のつかみが甘く、T.M.にとって、単元のねらいがよいか悪いかの確認を行っていなかったといえる。また、確認をしなかったのは、ボールの種類はたくさんあるので、「量的個人差」を考慮した具体的な指導方法で何とかなるだろうと考えたからである。

また、F.H.のように、おもしろいほど拒否してしまうことを知っていながら、プールでの活動を設定したのは、学校にプールがあり、泳ぎや水遊びを身につけさせたいと願ったからである。また、プールに限定せざるを得なかったのは、指導する教師の人数の関係で、他の場所で活動をするような選択肢を選ばず、また、高等部なので“これ位の活動は必要だ”という教師の思いもあったからである。すなわち、把握された「質的個人差」を重要視せず、教師側からの要求や諸条件等を優先して、単元のねらいを設定してしまったと考えられる。その結果、狭い範囲内でしか目標や内容を設定できず、F.H.が許容できる単元のねらいではなかったと考えられる。

T.M.やF.H.については、2人の徒競走に対する気持ちや意味づけが問題とされないまま、単元を設定している。これは、運動会が学校の3大行事の一つで、保護者に成長を見てもらう必要から、高等部としての願いが先行したからである。その結果、生徒一人ひとりが単元で行うことに価値を見出しているかどうかは問題とされずに単元のねらいが設定されている。つまり、その後の段階で「質的個人差」に応じることができないような単元のねらいを設定していたといえることができる。

これらのことが、個が生きる指導計画を作成する上での、重大な過ちとなっていたと指摘できる。このようにならないためにも、今後は、単元を設定する前に、生徒の個人差、特に「質的個人差」を十分把握し、一人ひとりの特徴を教科目標の中で伸ばせるように、集団把握で「量的個人差」及び「質的個人差」をはっきりさせる必要があると考えられる。また、それを基に、一人ひとりが教科目標を達成できる（許容できる）ような単元のねらいを設定する必要がある。

### 3)各単元を具体化する段階

#### (1) 目標設定に原因があった例

個人の実態、特に「質的個人差」の把握に基づく目標設定に原因のあった例は、

・体力作り I のI. Y.

原因) 友達と関わりたくないという思いを理解せず、関わり方を知ることによって、友達との親和を期待できると考えた。

・球技 I (手を使った球技) のY. M.

原因) 把握した実態を軽んじ、「普段の生活で友達と関わるができる」ことから、協力してプレーを楽しむことを目標として設定できるのではないかと考えた。

・球技 I (手を使った球技) のH. R.

原因) 自分の前に来たボールを返すことだけで精一杯のH. R. に対し、教師の側から過度な要求(連携プレー)をした。

の3例であった。

I. Y. が普段友達と関わらないのは関わり方を知らないために関われない、すなわち、「量的個人差」の視点で、教師が勝手に判断し、I. Y. が友達と関わっても面白くないと考えているとは考えもしなかったことに、原因があつて問題が生じている。ここにおいては、教師が、I. Y. の「質的個人差」に応じようとしているものの、実態把握の結果を先入観で判断し読み誤ったために、真にI. Y. の立場に立った目標設定ができなかったといえる。

また、Y. M. やH. R. については、はじめに高めていかなければならない「質的個人差」(巧緻性等の技能的側面)を軽視し、友達と関われるようになってきていることを以て、協力したプレーを目標としたため、問題が生じてしまった。

すなわち、これらの問題は、目標設定を、教師側の勝手な判断や過度な願いに基づいて行い、実態把握で得られた「質的個人差」を正しく読みとらずに設定した結果といえる。つまり、「質的個人差」に着目して、真に生徒の立場に立った目標の設定を行わなかったために生じたということである。

今後は、先入観で実態を捉えるのではなく、その子の背景や普段の様子からその子の「質的個人差」に基づいて、目標を設定していかなければならない。つまり、目標を一人ひとりの生徒に適したものとするためには、実態把握から目標を設定する段階で、「質的個人差」に応じるということを徹底する必要があるといえる。

## (2) 内容設定に原因があった例

個人の目標に基づく内容設定に原因のあった例は、

・ 体力作り I の S. Y.

原因) 実態把握で S. Y. の歩くペースをつかみそれを基本としていながら、授業ではその実態が尊重されずに、集団のペースで S. Y. を歩かせようと考えた。

・ 球技 I (手を使った球技) の F. H.

原因) 実態把握において把握された興味・関心のあることを重視せず、F. H. の能力的側面だけに基づいて、F. H. の内容を設定してしまった。

の2例である。

S. Y. の授業中の様子から、集団に引っ張られてさらにペースを上げていくことができると考えた。ところが、S. Y. はある一定以上になるとついていけなくなり、座り込んでしまった。つまり、S. Y. が応じきれないような歩行のペースを、無理に行わせるような内容設定をしていたといえる。このことは、他の生徒たちの力も高めるためには、速いペースを設定せざるをえず、そのため、読みとった実態を正しく用いなかったからである。つまり、「質的個人差」ではなく、「量的個人差」を重視したために生じてしまったと考えられる。

また、F. H. については、能力的な側面を重視し、興味、関心や過去の経験等を軽視してしまったために、F. H. が興味を示さないような内容を教師の側で設定し、その結果、関心を示さなかったことが分かった。

川村<sup>4)</sup>が、「それほど新しくもなく意外でもないものは退屈であり、新しすぎるものは我々を当惑させる。」というように、F. H. にとって風船は刺激を与えられるものではなかったと考えられる。これは、過去になされた風船を使った学習経験から、F. H. にとっては、もはや風船が関心を持てる内容とはならなかったと考えられる。

しかし、動きの速いものであれば F. H. が扱えないことを把握した結果、動きの速さを重視すると、風船のようなものにせざるをえなかった。つまり、そこにおいては、F. H. の興味、関心や過去の経験よりも、できるできないといった能力的な視点、すなわち、「量的個人差」が内容を設定する上で大きなウェイトを占めてしまったのである。

この例においては、内容を定める際に、「質的個人差」に基づいた内容とせず、「量的個人差」に基づいて設定した内容で F. H. に関心を示させようとしたといえる。

これらの例から、2例とも、「量的個人差」に基づいた内容設定となってしまったということができ、「質的個人差」を軽視していたということが指摘できる。

今後、個が生きる指導計画とするには、内容設定においても、実態把握で得られた「質的個人差」を最大限に尊重する内容の設定をすべきであるといえる。つまり、内容を一人ひとりの生徒に適したものとするために、目標から内容の設定の段階で、「質的個人差」に応じることを徹底する必要がある。

### (3) 方法設定に原因があった例

個人の内容に基づく方法設定に原因のあった例は、

・ 体力作り I の F. H.

原因) 内容を設定する際、F. H. が興味を示す友達がいるという実態把握の結果を取り入れず、教師の側から手をつなぐ友達を選択して手をつながせようと考えた。

・ 水泳の Y. M.

原因) 実態から把握されたことに応じて方法を用いたのではなく、実態を軽視して、決まったプログラムを用いようと考えた。

の2例である。

F. H. に対する方法を設定する際に、関わりたい相手のことについては考慮されずに、教師の側で手をつなぐ相手を指定している。つまり、方法の設定で、生徒の側の意思が尊重されていなかったということである。

これは、“体力の向上”と“他者との関わり”を一度にねらったものの、他の生徒のことを考えたため（指導の効率性）に、方法の設定の段階で F. H. の興味・関心については軽視せざるをえなかったと考えられる。つまり、内容の設定までは、単元のねらいを具体化するために、「質的個人差」に応じようとしていながら、方法の設定段階では、その応じ方が不十分となり、結果として F. H. の「質的個人差」を尊重した方法が設定できなかったといえる。

また、Y. M. については、グループ全員に共通のプログラムを用いて指導を行うような方法を設定している。指導場面では、可能な限り個別に対応して、恐怖心や苦手意識を取り除いていくようにしている。しかし、Y. M. のような中度の障害の生徒を、最後まで1対1で指導することは、指導者の人数からいって難しい。特に、グループ単位での指導を行う場合、指導の効率を図るための系統だったプログラム<sup>10)</sup>を用いることが多い。

このプログラムを生徒に合うようにアレンジするものの、Y. M. にはどうしてもそのままでは適用できなかった。これは、能力的にできないというよりも、気持ちの上でこだわり

が強いために、共通のプログラムの各ステップを踏めなかったと考えられる。つまり、Y. M. の「質的個人差」に応じきれず、教師の側からの方法設定となっている。

これらのことから、今後は、実態把握の「質的個人差」に基づき、それを最大限に尊重するような、その子にとっての独自の方法を考える必要があると思われる。つまり、方法の設定においても「質的個人差」に応じるということを徹底する必要であるということが出来る。

なお、必要であれば、どの段階においても、「質的個人差」を確認するための実態把握を行う必要があると考えられる。

単元を具体化する段階をまとめると、今後は、各単元のその子の目標、内容、方法についても、実態把握で得られた「質的個人差」に基づいて設定し、その子の「質的個人差」に応じることができるかどうかの確認を行う必要があると考えられた。つまり、この段階において、この視点を徹底する必要があるということである。

以上、T校高等部の体育における個が生きる指導計画の作成段階の考え方について考察を行った。これらから、得られたことをまとめると、今後の個が生きる指導計画の改善点は表6のようになる。改善すべきこととして重要な点は、「質的個人差」に徹底して応じなければならないということであり、「量的個人差」で応じていくことを途中で安易に取り入れないということである。

このような改善点が得られたので、これが方向性として正しいかどうかを確認する意味で、「結果」の項で述べた成果〔O〕の2例についてみてみた。これらの例では、単元設定の段階においては、2人の「質的個人差」に応じられるような設定となっていた。それは、2人の障害の程度が重度であったために、他の段階においても、「質的個人差」に応じざるを得なかったということが分かった。その結果、手順として結果的に表6を満たすことになった。

これらの成功例は、表6にまとめられた改善点を配慮して計画を作成すれば、成功する可能性が高いことを示唆していると考えられる。

表6 個が生きる指導計画の各段階の問題点と今後における改善点

段 階	問 題 点	今後における改善点	
教科目標を設定する段階	教科目標   集団把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特になし.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科目標が、この子たちの「量的個人差」及び「質的個人差」を受け入れられるかどうかを把握する.</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人ひとりの特徴（「質的個人差」）を知っていたが、現実条件から見過ごしていた.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科目標の中で、その子の特徴（「質的個人差」）を伸ばすことができるかどうかの確認をする.</li> </ul>	
年間単元を設定する段階	集団把握   単元設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人ひとりの「質的個人差」を許容できる単元のねらいではなかった.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人ひとりの特徴を教科目標の中で伸ばすために、特に「質的個人差」を明確にするよう集団の把握をし、それを基に、一人ひとりが教科目標を達成（許容）できる単元のねらいを設定する.</li> <li>・必要ならば「質的個人差」を確認するための個人の実態把握を行う.</li> </ul>
各単元を具体化する段階	単元目標設定   内容設定   方法設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その子に対する教師の期待が大きく、「量的個人差」で応じようとするあまり、「質的個人差」を正確に解釈しようとしなかった.</li> <li>・その子に対する教師の期待が大きすぎて、「質的個人差」の解釈を誤った.</li> <li>・2つのねらいを一度にねらったために、その子に応じられなかった.</li> <li>・「量的個人差」に応じて内容が設定されたため、その子の「質的個人差」に応じられなかった.</li> <li>・「量的個人差」に応じた方法のみで授業を展開した.</li> <li>・「量的個人差」に基づく方法であったため、その子の「質的個人差」に応じられなかった.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標の方向性は決まっているので、一人ひとりの「質的個人差」を見てから、それに基づき一人ひとりの目標を設定する.</li> <li>・単元の中で2つの目標を設定してもいいが、同時に2つの目標に対する内容を設定せず無理をしない.</li> <li>・内容についてもその子の「質的個人差」に応じる必要がある.</li> <li>・方法についてもその子の「質的個人差」に応じる必要がある.</li> </ul>

## 第五章 まとめと今後の課題

### 第一節 本論文の総括

個を大切にし、個性の伸長を図る教育を確立していくためには、一斉画一による授業の改善を図るとともに、一人ひとりに応じる側面を重視する授業を構築していく必要がある。

養護学校においては、児童・生徒の能力や適性、興味・関心等には大きな「量的個人差」、及び「質的個人差」がみられる。能力や適性等の個人差について、「量的個人差」以上に「質的個人差」を重視して、一層一人ひとりに応じていかなければ、個が生きる教育を目指すことは難しいといえる。そのため、授業実践においては、一斉画一で行う授業よりも、小集団学習や1対1による指導等のように、一人ひとりに応じるために個という側面に傾倒しなければならない傾向がある。

このように、一人ひとりに応じるための取り組みは、何らかの形で各養護学校でなされていると考えられるが、T校高等部においても、障害の程度や能力差における「量的個人差」及び「質的個人差」の大きい生徒に対し、より個が生きる教育を目指してきている。個が生きるためには、「量的個人差」以上に「質的個人差」を重視する必要があると捉えている。それを踏まえ、一人ひとりの実態（生育歴や障害の特徴、学習経験等）を把握し、研究成果を用い、実態に応じて適切な内容を選択して指導し、一人ひとりの力を高めていくように授業を計画し、実践してきた。

しかし、個が生きることを願って作成した指導計画や授業の実践であったにもかかわらず、成果としての問題が生じてしまっている。

このような事実は、T校高等部の体育授業を実践するに当たっての個が生きるための指導計画を作成していく段階で、一人ひとりへの応じ方にあやまりがあったのではないかということを示唆しているように考えられる。

そこで、今後、成果としての問題を生じさせないために、T校高等部において、これまでに行ってきた個が生きる体育の指導計画について、授業へと具体化していく各段階での個人差への応じ方が、よかったかどうかを明らかにし、今後必要とされる個が生きる指導計画を作成する手順について検討することを目的とした。

第三章において、T校高等部で作成した個が生きる指導計画に基づいて行った授業成果の問題について、その問題を生じさせた原因を探求したところ、以下のようなことが明らかになった。



## 1) 単元設定の段階に原因があった事例

- ・徒競走の意味や価値を見出しているか否かということ、実態把握項目として設定せず、見出しているか否かに関係なく一人で走ることを前提とした。
- ・興味・関心の対象が非常に狭く、広げる段階までに至っていない生徒がいることを把握しながら、その他の生徒に対応させた単元・球技を設定した。
- ・プールを拒否するような生徒がいるにも関わらず、単元設定で活動場所をプールに限定し、狭い範囲の水遊びを押しつけようとした。

## 2) 各単元を具体化する段階に原因があった事例

### (1) 目標設定に原因があった事例

- ・友達と関わることに興味を示さないことを分からず（実態把握の読みとり違い）、関わり方を知れば友達のことを考えて関わるようになると考えた。
- ・普段の生活で友達と関わるができることから、把握した実態把握の結果を軽んじ、協力してプレーを楽しむことを目標に設定できると考えた。
- ・自分の前に来たボールを返すことだけで精一杯の生徒に対し、教師の側から過度な要求（目標設定）をした。

### (2) 内容設定に原因があった事例

- ・実態把握によるその生徒の歩くペースを基本としていながら、授業ではその実態が尊重されずに、集団のペースでその子を歩かせようとした。
- ・実態把握で明らかになった興味・関心のあることを重視せず、能力的側面だけに基づいて内容を設定した。

### (3) 方法設定に原因があった事例

- ・興味を示す友達がいたという実態把握の結果を十分に取り入れず、教師の側から手をつなぐ友達を選択して手をつながせようとした。
- ・実態から把握されたことに応じて方法を設定したのではなく、既定の決まったプログラムを用いた。

次に、第四章では、授業の成果としての問題を原因を生じさせた原因について、その原因を、一人ひとりの個人差にどのように応じようとしていたのかという視点から考察した結果、以下のようなことが明らかになった。

## 1) T校高等部の体育における個が生きる指導計画を検討した結果について

### (1) 教科目標を設定する段階

この各段階では、目指すべきことの方向性を規定していた。この目標は、その後の展開で、「質的個人差」に応じ、それらの伸長を図ろうとしていることが認められた。

第三章の失敗例の検討では、この段階に原因があったものがみられなかったことから、この目標自体に問題はないと考えられた。しかし、この目標は、毎年ほとんど変わらないことから、どのような生徒にも応じられるよう、生徒を見る前から、教師が経験的につかんでいることや、一般的な養護学校として備えておく目標、といった観点で設定しているのが現実といえる。

したがって、今後は、その年度に在籍する生徒の実態（「量的個人差」及び「質的個人差」）を把握してから考え、“この子たち”に応じるための目標設定をした方が、これ以降の段階で具体化していく際に、より一人ひとりの「質的個人差」に応じやすい目標を設定できると考えられた。すなわち、教科目標が、学習集団に受け入れらやすいものとなると考えられる。

### (2) 年間単元を設定する段階

この段階では、学習集団の把握を通して「量的個人差」及び「質的個人差」をつかみ、この個人差の範囲を基本として、この集団に対する単元を設定していた。これ以降で、「質的個人差」に応じられるように考えており、問題はないように考えられた。

しかし、実際には前年度の単元を踏襲する傾向があり、その結果、前述した3つの失敗例が生じていた。

これらの例は、学習集団の実態把握で、“集団の特性”に応じて単元を設定し、「質的個人差」に応じようとしているが、その範囲が狭く、「質的個人差」における実態が尊重されないような応じ方で何とかしようとしていたといえた。

このことが、個が生きる指導計画を作成する上での、重大な過ちとなっていたと指摘でき、こうならないためにも、今後は、単元を設定する前に、生徒の個人差、特に「質的個人差」を十分把握し、一人ひとりの特徴を教科目標の中で伸ばせるように、集団把握で「量的個人差」及び「質的個人差」をはっきりさせる必要があると考えられる。また、それを基に、一人ひとりが教科目標を達成できる（許容できる）ような単元のねらいを設定する必要がある。

### (3) 各単元を具体化する段階

#### ①目標設定の段階

この段階では、3つの失敗例が生じている。これらの問題は、目標設定を、教師側の勝手な判断や過度な願いに基づいて行い、実態把握で得られた「質的個人差」を正しく読みとらずに設定した結果といえた。

今後は、先入観で捉えるのではなく、その子の背景や普段の様子から、その子の「質的個人差」に基づいて、目標を設定していかなければならない。つまり、目標を一人ひとりの生徒に適したものとするためには、実態把握から目標を設定する段階で、「質的個人差」に応じることを徹底する必要があるといえた。

#### ②内容設定の段階

この段階では、2つの失敗例が生じていた。これらは、2例とも、「量的個人差」に基づいた内容設定となってしまったということができ、実態把握の「質的個人差」に基づいていないということが指摘できた。

今後、個が生きる指導計画とするには、内容設定においても、実態把握で得られたことに基づく「質的個人差」を重要視した内容設定をすべきであるといえた。つまり、内容を一人ひとりの生徒に適したものとするために、目標から内容の設定の段階で、「質的個人差」に応じることを徹底する必要がある。

#### ③方法設定の段階

この段階でも、失敗例が2つ生じていた。これらは、どちらも「質的個人差」に応じきれず、教師の側からの方法設定となっていた。

今後は、「質的個人差」に基づいた、それを最大限に尊重するような、その子にとっての独自の方法を考える必要があると考えられた。つまり、方法の設定においても「質的個人差」に応じるということを徹底する必要があると考えられた。

なお、必要であれば、どの段階においても、「質的個人差」を確認するための実態把握を行う必要があると考えられた。

これらの考察から、今後の個が生きる指導計画の手順をまとめると、以下のようになった。

- 学校教育目標，学部目標，教科目標を具体化していくためには，はじめに学習集団の実態（「量的個人差」及び「質的個人差」）を捉え，教科目標が集団に対して妥当かどうかを確認した後，より一人ひとりの「質的個人差」をはっきりと捉え，その特徴を教科目標の中で伸ばせるようにしなければならない。
- 単元設定では，「量的個人差」及び「質的個人差」を明確にし，教科目標の中で一人ひとりの特徴を伸ばせるように単元のねらいを設定する必要がある。
- 「質的個人差」を正確に読みとった後，一人ひとりの目標を設定する。
- 内容の設定に当たっては，単元内で2つのねらいを設定してもよいが，同時に2つの目標に対する内容を設定せず無理をしない。また，「質的個人差」に応じた内容の設定が必要である。
- 方法の設定に当たっても，「質的個人差」に応じることが必要である。
- これらの設定に当たって，必要であれば，その都度，「質的個人差」を確認するための実態把握を行っていく必要がある。

以上のことから，今後，T校高等部の体育で，個が生きる指導計画を作成するためには，在籍する生徒が能力や障害の程度に大きな幅があることを踏まえ，毎年度，学習集団と教科目標との整合性を確認し，生徒一人ひとりという視点に立って，一人ひとりの特徴（「質的個人差」）が教科目標の中で伸ばせるように，単元設定から目標，内容の設定を行っていく必要があるといえた。

## 第二節 今後の課題

個が生きることを目指して取り組んできたT校高等部体育の授業実践において、単元後に得られた問題が、どのような原因によって生じたのかが明らかになった。その問題を今後生じさせないためには、毎年、学習集団の「量的個人差」及び「質的個人差」を把握し、特に「質的個人差」を明確にした上で教科目標を確認し、その中で、その子の特徴（「質的個人差」）を伸ばすという視点で、単元設定以下の手順を踏まなければならない。

しかし、本研究では、著者が気づいた大きな失敗例を基に反省したため、これ以外にも失敗の例があったかもしれない。厳しく見つめ直し、それらの細かな点を加えていけば、さらに、より具体的な改善の手順が得られるかもしれないとも考えられる。その作業を、今後も引き続き行っていきたいと考える。

このような手順を踏む場合、現実の学校にあっては指導者の数や施設等の条件によって制約を受けることは容易に想像できる。しかし、真に個が生きることを望むのであれば、条件の改善も含め、新たな指導計画の立案手順に挑戦していかなければならないといえる。

したがって、今後、現場における実践において、本研究で得られた個が生きる指導計画の作成の手順を試み、授業を実践していき、その有効性について検討していくことを課題としたい。

また、生徒の真の立場に立つことができなければ、「質的個人差」を明確にすることは難しい。しかし、言葉もなく、表現することが難しい生徒達にあって、その心の中や真の姿を十分に把握することも、困難なことといえる。一般の性格検査等を適用できない生徒達の性格を把握することは、一緒に生活することを通してしか望むことができないと思われる。だが、指導計画を立てる時期にも限界があり、生徒理解で終わってしまい、計画を立てることができなければ、生徒の成長も期待できない。

余市養護学校<sup>4)</sup>においては、生徒の実態を把握する期間を4月中としている。しかし、子どもの真の姿をつかむためには、その方法がいいのか、あるいは、1学期間にわたってじっくりと子どもを見て把握し、その後に計画を立てるのがいいのか、これも合わせて検討する必要があると考える。

## 引用文献・参考文献一覧

- 1) 北海道立余市養護学校(1997)「明日を拓くー平成8年度研究集録第6号」。北海道立余市養護学校。
- 2) 北海道立余市養護学校(1997)「明日を拓くー平成8年度研究集録第6号」。北海道立余市養護学校。 pp, 14.
- 3) 加藤幸次(1972)「個別化教育入門」。教育開発研究所。 pp, 4.
- 4) 川村幹(1982)「動機付けの諸問題」。風間書房。 pp, 40.
- 5) 岸俊彦(1973)「ドルトンプラン」。天城勲・奥田真丈・吉本二郎編「現代教育用語辞典」。第一法規。 pp, 406.
- 6) 岸俊彦(1973)「プログラム学習」。天城勲・奥田真丈・吉本二郎編「現代教育用語辞典」。第一法規。 pp, 455-456.
- 7) 小林芳文編・横浜国立大学付属養護学校著(1998)「QOLを支える個別教育計画 (IEP)」。明治図書。
- 8) 教育開発研究所編(1989)「新学習指導要領全文と要点解説」。教育開発研究所。 pp, 363.
- 9) 教育政策研究会編著(1987)「臨教審総覧=上巻」。第一法規。 pp, 320-321.
- 10) 文部省(1986)「水泳指導の手引」。ぎょうせい。 pp, 5-7, 13-29.
- 11) 文部省初等中等教育局特殊教育課(1979-1995)「特殊教育資料 (昭和54年度～平成6年度)」。文部省初等中等教育局特殊教育課。
- 12) 日本精神薄弱者福祉連盟編(1996)「発達障害白書1997」。日本文化科学社。 pp, 75.
- 13) 日本精神薄弱者福祉連盟編(1996)「発達障害白書1997」。日本文化科学社。 pp, 84.
- 14) 佐伯正一(1972)「個をのばすーみんながわかりひとりひとりが生きる授業ー」。法律文化社。 pp, 04-05.
- 15) 仙台市立鶴谷養護学校編(1992)「生きる力を高めるための教育課程の研究ー系統性のある編成を目指してー平成3年度研究紀要第14集」。仙台市立鶴谷養護学校。
- 16) 仙台市立鶴谷養護学校編(1996)「実践研究集録ー事例研究編ー平成7年度研究紀要第18集」。仙台市立鶴谷養護学校。
- 17) 仙台市立鶴谷養護学校編(1997)「生きる力を高めるための教育課程の研究ー一人一人の生きる力を高めるためにー平成8年度研究紀要第19集」。仙台市立鶴谷養護学校。

- 18) 辰野千尋(1993)「個別学習」. 奥田真丈・河野重男編「現代学校教育大事典」. ぎょうせい. pp, 232-233.
- 19) 山口大学附属養護学校編(1978)「障害児教育と個人指導プログラムー教育課程の編成とその実践ー」. 第一法規.
- 20) 山内政男編(1986)「キーワード中教審答申読本」. 教育開発研究所. pp, 247.

## 謝 辞

本研究を終えるにあたり、終始変わらぬご指導、ご助言を賜りました兵庫教育大学 生活・健康系の荒木勉教授に心より感謝申し上げます。先生からご指導頂いたことを忘れず、今後の教育活動に取り組んでいく所存です。

本研究のために多くの示唆を賜りました生活・健康系の先生方にも、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

また、本研究のために、多忙にも関わらず学校訪問の機会を与えてくださり、多くのことをご教授いただいた北海道余市養護学校の松本忠孝校長先生をはじめ、職員の皆様に、心より御礼申し上げます

さらに、2年間という長期にわたる貴重な研究の機会を与えていただきました仙台市教育委員会、宮城県教育委員会、仙台市立鶴谷養護学校の酒井保校長先生、長澤靖彦前校長先生をはじめ、職員の皆様、児童・生徒のみなさんに、重ねて謝意を申し上げます。

最後になりましたが、2年間互いに励まし合った同期の皆様に感謝申し上げ、謝辞といたします。

平成10年12月21日 首 藤 雅 浩



## 資 料

資料Ⅰ-1～Ⅰ-6 個人の実態把握表

資料Ⅱ-1-1～Ⅱ-6-3 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果

資料Ⅲ-1～Ⅲ-8 各単元の指導計画

資料 I - 1 個人の実態把握表 (T.M.)

○心身の障害の状態

- ・精神発達遅滞 ・てんかん ・心室中隔欠損症 ・大動脈弁閉鎖不全症
- ・側わん

○諸検査結果(H7. 7. 1実施)

- ・津守式乳幼児精神発達質問紙検査  
     運動 探操 社会 食事 理言  
     1:3 0:6 0:10 1:6 0:10

- ・S-M式社会生活能力検査  
     身辺 移動 作業 意志 集団 統制  
     1:4 2:11 1:6 2:0 1:2 0:0

○行動の記録や配慮事項

- ・一人で行えることが少ないものの、日常生活の場面で自ら行おうとする様子がみられるようになってきた。しかし、ほとんどの面で介助を要する。
- ・歩行不安定なため、障害物や段差などを注意してあげなければならない。
- ・指示を理解して行動することが難しい。
- ・言語面や行動面で模倣を行うようになってきている。
- ・病弱で発作があり欠席も多い。家庭は体力の向上を望んでいるが、家庭との連絡を絶やさないようにしなければならない。

○各単元に関する実態

単元名	単元に関する実態
体力作り I	体調がよいときは継続して歩けるが、突然歩けなくなってしまうこともある。教師が手をつなぎ、ペースを合わせて歩く必要がある。
運動会	障害物の前で止まってしまう、進めなくなってしまうことがある。段差がきつい種目や難易度が高い種目はできない。
球技 I	ボールを目で追おうとせず、目の前に来たボールに触れようとしないが、他の生徒がプレーしている方へ歩いていく。
水 泳	水を怖がらないが、寒さに弱いため長く水に入っていることはできない。手を繋いであげると水中で歩くことができる。
球技 II	棒を握ることができる。 ボールを注視することはできない。
マラソン	5分位の駆け足なら休まずに走ることができる(教師が傍らにつく必要がある)。
球技 III	ボールを蹴ることができない。 寒いと体が固まってしまう、動かなくなる。
体力作り II	休まずに歩くようになってきているが、寒さで突然動かなくなってしまうことがある。

資料 I-2 個人の実態把握表 (F.H.)

○心身の障害の状態

・精神発達遅滞 ・ダウン症候群 ・ネフローゼ ・肥満度17%

○諸検査結果(H7.7.1実施)

・津守式乳幼児精神発達質問紙検査

運動 探操 社会 食事 理言

1:9 0:6 1:3 1:6 0:9

・S-M式社会生活能力検査

身辺 移動 作業 意志 集団 統制

2:10 2:11 2:2 1:3 0:10 1:8

○行動の記録や配慮事項

・声掛けがないと着替えを始めない。巧緻性を求められることは難しいが、それ以外の着脱はできる。靴は左右を間違えがちである。

・有意言語はなく、常時うなりが認められる。

・身の回りにある物や他人の服や眼鏡をつかむなどの、いたずらが見られるようになってきた。

○各単元に関する実態

単元名	単元に関する実態
体力作りⅠ	毎日徒歩で通学しているので歩くことができるが、急がせるとしゃがみ込んでしまう。 友達と手を繋ごうとしない。
運動会	障害の前で止まってしまう、進もうとしない。 難しい種目はできず、駆け足も止まることが多い。
球技Ⅰ	ボールを目で追わないが、目の前に来たボールにはいくらか手を出す。 大きなボールには興味を示す。
水泳	水を怖がり、絶対に入ろうとしない。
球技Ⅱ	棒を握って振ることができる。 ボールを注視することはできない。
マラソン	歩くことは得意だが走ろうとしない。 体重がましてきている。 ネフローゼの状態も今ひとつ。
球技Ⅲ	体重を片足で支えることが難しくバランスをとれないが、目の前にあるボールを何とか蹴ろうとする。 速い動きには対応できない。
体力作りⅡ	通学で毎日歩いているので、凹凸にも対応できる。 歩きすぎると座り込んでしまう。

資料 I - 3 個人の実態把握表 (Y.M.)

○心身の障害の状態

- ・精神発達遅滞 ・外斜視 ・踵骨内反

○諸検査結果(H7. 7. 1実施)

- ・津守式乳幼児精神発達質問紙検査

運動 探操 社会 食事 理言

2:6 3:0 2:6 4:6 3:0

- ・S-M式社会生活能力検査

身辺 移動 作業 意志 集団 統制

5:5 3:10 4:5 2:10 3:1 5:8

○行動の記録や配慮事項

- ・一人で着替えるが、取りかかりが遅く声掛けがないと独り言を言って時間がかかかかる。
- ・二語文での会話を行えるようになってきた。
- ・爪かみや口の周辺を気にすることが多く、ほぼ常時行っている。
- ・教師や周囲の人の様子を見て行動し、教師の目の届かないところではいたずらや友達をたたいたりすることがある。
- ・いろいろな面でストレスを感じ、体調に影響してしまう。好きなことは多いが、巧緻性や柔軟性に乏しく、得手不得手が多い。

○各単元に関する実態

単元名	単元に関する実態
体力作り I	長く歩き続けられるがペースが遅く、他者が手をつないでペースを合わせて歩く必要がある。
運動会	段差がきつい種目や難易度が高い種目は難しく、高い場所が苦手で体が固まってしまう。
球技 I	速い動きのボールを目で追えないが、目の前に来たボールには触れることができる。模倣しようとするがうまくできない。
水 泳	水に若干の恐怖心を持ち、顔についた水にこだわる。 手をつなぐと水中で歩くことができる。
球技 II	動作をまねようとする。 できそうなこと、おもしろそうなことに興味を示し、やってみようとする。
マラソン	走ることが苦手な教師に手を引かれて走る場面が多く見られ、ペースはゆっくりである。負担をかけすぎると体調を崩してしまう。
球技 III	バランスをとることが難しいため、ボールを強く蹴ることはできず、走りながら歩きながらのプレーもできない。 簡易なルールは理解できる。
体力作り II	段差や滑る場所が不得手で、できないと思うと体が硬直し止まってしまう全く動こうとしなくなってしまう。

資料 I - 4 個人の実態把握表 (S.Y.)

○心身の障害の状態

- ・精神発達遅滞 ・ダウン症候群 ・心室中核欠損症

○諸検査結果(H7. 7. 1実施)

- ・津守式乳幼児精神発達質問紙検査

運動 探操 社会 食事 理言  
4:6 3:0 4:0 7:0 3:6

- ・S-M式社会生活能力検査

身辺 移動 作業 意志 集団 統制  
7:0 3:9 5:1 2:8 4:2 6:4

○行動の記録や配慮事項

- ・身辺処理は自立しており、着替えなどの動作も早い。
- ・語彙数が増えてきているが、発音が不明瞭である。
- ・ランニングでは心臓や扁平足の関係から疲れやすく、しゃがみ込むことが多い。
- ・勝手に行動してしまうことが多い。

○各単元に関する実態

単元名	単元に関する実態
体力作り I	「白線の内側を歩く」等の指示が分かり、友達と手をつないで歩くことができる。 長い距離は苦手で、ペースも速くはない。
運動会	他と競争しようとする意識があり、障害物に積極的に挑んでいこうとするが、段差がきつい種目や難易度が高い種目には尻込みする。 太鼓叩き等応援が得意である。
球技 I	目の前に来たボールを打ったり、ボールを目で追うことはできるが、友達と協力したり、移動しながらプレーすることは難しい。 転がったボールを拾いに行く。
水 泳	プールが好きで、水遊びができる。 寒いと自分から水をでて活動しようとしなくなってしまう。
球技 II	道具を使って遊ぶことが好きで、簡易なルールが理解でき、一度理解した遊びを休み時間や家で行う。
マラソン	心臓疾患のためか、2, 3分走ると座り込み、教師が肩を叩くとまた走り出す。
球技 III	ボールを蹴ることができるが、無造作である。 ルールを理解する力はある。
体力作り II	長い距離も歩けるようになってきた。 斜面や滑る道は慎重にゆっくりと歩く。

資料 I - 5 個人の実態把握表 (H.R.)

○心身の障害の状態

- ・精神発達遅滞 ・舞踏病 ・心身症

○諸検査結果(H7. 7. 1実施)

- ・津守式乳幼児精神発達質問紙検査

運動 探操 社会 食事 理言  
4:0 4:0 4:6 6:6 6:6

- ・S-M式社会生活能力検査

身辺 移動 作業 意志 集団 統制  
10:6 10:2 6:7 7:8 8:7 10:11

○行動の記録や配慮事項

- ・徒歩で通学し、身辺処理も完全に自立。日常会話にも問題がない。
- ・責任感が強く、決められたことを最後まで頑張り通そうとする。しかし、頑張りすぎて飽和状態になると、パニックになる。
- ・他者との関わりを積極的に持とうとする。
- ・手先が自由に動かさず、意図したことが出来ないことがある。
- ・スピードは出さないが、自分のペースで長い時間走ることができる。
- ・模倣運動を正確に行おうとする。

○各単元に関する実態

単元名	単元に関する実態
体力作り I	どんな距離でもがんばって最後まで歩き通す。 友達のこと考えながら歩くことができる。
運動会	駆け足はゆっくりだが最後まで走り通す。 障害物に対し積極的に挑戦する。
球技 I	目の前に来たボールを打ったり、簡易なルールを理解できる。動きながらのプレーは難しい。
水 泳	水に対する恐怖心はなく、進んでプールに入ろうとする。しかし、泳ぐことは難しい。
球技 II	クラブの扱い方やルールの理解ができる。 ボールとクラブの距離を合わせる事が難しい。
マラソン	ゆっくりとしたペースで長時間走り通すことができる。 がんばりすぎてしまうので、無理をしないように配慮する必要がある。
球技 III	ボールを蹴ったり、ルールを理解することはできる。 動作がゆっくりしている。
体力作り II	がんばって最後まで歩き通す。 起伏のあるところは苦手である。

資料 I - 6 個人の実態把握表 (I.Y.)

○心身の障害の状態

・精神発達遅滞      ・てんかん

○諸検査結果(H7. 7. 1実施) 田中・ビネーIQ67

・津守式乳幼児精神発達質問紙検査

運動 探操 社会 食事 理言

7:0    7:0    7:0    7:0    7:0

・S-M式社会生活能力検査

身辺 移動 作業 意志 集団 統制

10:6 11:1 10:2 10:9 7:11 12:2

○行動の記録や配慮事項

- ・徒歩で通学し、身辺処理も完全に自立。
- ・自分の考えを正確に相手に伝えることができ、難しい言葉も知っている。
- ・体力があまりなく、心配事があると意欲が乏しく行動も遅くなる。
- ・精神的に不安定なときがあり、友達と喧嘩をしてしまうことがある。
- ・生徒会長でもあり、リーダーとしての自覚が芽生えつつある。

○各単元に関する実態

単元名	単元に関する実態
体力作り I	指示されたコースをひとりで歩くことができる長い距離を歩くことができるが、友達とは積極的に手をつながない。
運動会	難しい傷害物も越えることができる。 調子がよければ大きな声で応援ができる。
球技 I	ルールを理解でき、チームプレーの認識もある。 ボールを扱う技術は低い。
水 泳	プールが好きで、何とかして泳ごうとするが、手足をばたつかせるだけなので泳げない。
球技 II	ルールを理解でき、道具の操作方法も理解できる。
マラソン	ペースは速くないが、最後まで走り通すことができる。精神的に不安定なときはスピードが大幅にダウンする。
球技 III	ボールを蹴ってシュートしようとする。 健康状態が芳しくない。
体力作り II	体調不良が継続し、欠席が目立つ。 雪上を歩いたりそり遊びをする能力は十分にある。

資料Ⅱ-1-1 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (T.M.-1)

項目/単元		体 力 作 り I	運 動 会	球 技 I
年間 計画	ねらい	・体力の向上.	・克服する力や気持ちを高める.	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる.
把握の理由		<p>本生徒は長期休業中ほとんどを家の中で過ごし、その結果運動不足となり、歩く力が低下してしまう傾向がある。また、学校生活が始まると週の終わりになるほど疲労が蓄積し、母親が土曜日を休養日と決めている。朝方の発作もあり、日によって活動できる程度に差が認められ、母親との連絡を密に行っている。</p> <p>そこで、</p>	<p>心身の障害の状態を考えると、走り続けたり障害物を越えることは困難なことである。しかし、日常生活の殆どで介助を要する状態から、少しでも自発的な行動や挑戦する気持ちが芽生えてほしいと教師は願っている。運動会は発表の場でもあり、「一人で」行う姿を示すことは、家族の励みにもなると考えた。</p> <p>そこで、運動会種目の徒競走と障害物走のために、</p>	<p>本生徒は介助が必要で行動も制限されており、学校で関わる人は限定されている。また、遊びに関しても広がりをもっていない。しかし、これから様々な人と関わりながら生活していく必要があり、その生活を充実させるためには、他者と関わるための仲立ちとなる遊びや運動を広めていくことが有効であると考えた。</p> <p>そこで、本単元(手を使った球技)のために、</p>
実態把握項目		<ul style="list-style-type: none"> <li>・休業期間中の生活</li> <li>・運動の有無</li> <li>・体調の変化</li> <li>・現在の体力や健康状態等がどの程度であるかを把握した上で、行える運動量を設定する必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・走り続けられる距離</li> <li>・障害物に対する対応</li> <li>・怖がること、不得意なこと等を知り、「一人で」行える距離や種目を設定しようとした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・興味や関心のあること</li> <li>・理解する力</li> <li>等を知り、何ができるか、何にだったら興味を持つかを把握しようとした。</li> </ul>
具体化した理由		<p>この単元においては、現在の体調や発作の状態はよいものの、春休み中の運動不足から春休み前に比べ、歩く力が低下していることが認められた。</p> <p>そこで、日々の様子を見ながら、少しずつ歩く距離を伸ばし、最後まで歩き通すことによって、低下した歩く力を高めようと考えた。</p>	<p>歩く力は高まっており、教師が傍らにつくと校庭の半周ほどなら走るようにもなっている。また、低い段なら容易に越す姿も認められた。しかし、段差のきつい段や這ったりよじ登るような種目は困難である。</p> <p>このような実態から、本人に合わせた距離や障害物を設定し、できるだけ一人で言うことを目標とした。</p>	<p>ボールに対する反応が弱い(動いているボールを目で追わない)ものの、友達が遊んでいるのを気にしたり、人にいたずらをする等人への興味は高まってきている。このことから、本生徒は興味対象を広げられる時期にきていると考え、ゆっくりとした動きの風船を用い、それに興味を示すようになることを目標とした。</p>
単元 計画	目 標	決まった距離を最後まで歩き通す。	できるだけ教師に補助されずにゴールまで走り通す。できるだけ補助されず障害物を越える。	興味を示す対象を広げる。
	具体内容	学校の周囲(800m)を教師と手をつなぎ40分間歩く。14時間実施。	80mの徒競走と障害物走を15時間実施。	風船に触れる。7時間の授業を実施。
授業中の様子		教師の手を引き、自分から進もうとすることもある。継続時間も増しているが、週末の授業等に歩けなくなることがある。	教師に手を引かれなければ進もうとしない場面が多く、特別メニューを用意した。	風船を棒に糸で繋ぎ、目の前に持って行くが、触れようとしなかった。たまに、自分から手をあげるが、見学がほとんどである。
単元終了後の成果		2年時より長く歩けるようになり、教師の手を引いて歩くこともあった。(○)	教師に手を引かれずに走らない。(×)しかし、スズランテープくぐりなど一人でできる障害があった。(○)	他生徒への関心を示すが、自分から風船に触れようとしなかった。(×)



資料Ⅱ-1-2 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (T.M.-2)

項目/単元		水 泳	球 技 Ⅱ	マ ラ ソ ン
年間計画	ねらい	・体力の向上。 ・克服する力や頑張る気持ちを高める。	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。	・体力の向上。 ・克服する力や頑張る気持ちを高める。
把握の理由		本生徒は小学部時代から水泳を経験しているが、瘦身児であるため、水中で熱を奪われやすく活動できる時間は短い。しかし、水泳は全身運動で、浮力を使った普段経験できない感覚も味わえ、皮膚を強くする運動でもあるので、水泳を経験することの少ない本生徒にとって、是非経験させてあげたい種目である。	本生徒にとって他者と関わる為の仲立ちとなる遊びや運動を広めることは重要である。球技Ⅱでは、道具を使ったボール運動としてゴルフを取り上げた。難しい運動ではあるが、前年度重度の障害の生徒が、球を打つことを覚え、いつまでも打ち続けることがあったので、本生徒も介助すればできるのではないかと考えた。	マラソン大会は中学部時代から経験しているが、教師が手を繋いで走ったり、他生徒と出発地点を違えるなど配慮しなければならなかった。走るのに時間がかかるため仕方ないのだが、今年度は休みも少なく、他単元で頑張っている姿から、何とか最後まで声がけだけで走り通して欲しいと考えた。
実態把握項目		そこで、 ・水に対する気持ちや水に入った時の変化 ・水中で行えること ・現在の健康状態 等を把握することで、活動の内容や配慮すべき事柄等を知ることができる。	そこで、 ・物を持って操作できる力 ・目と手の協応能力 ・興味や関心 ・理解する力 等を把握し、道具をどの様に使えるか、何に興味を持つか、どの様に介助すればよいかを知らうとした。	そこで ・休まずに走り続けることができる距離 ・現在の健康状態 等を把握し、マラソン大会のコースを走り通すことが出来るかどうかを把握しようとした。
具体化した理由		寒いと体が硬直するものの、水を怖がらないので、暖かい日の活動に支障はない。泳ぐことに直接結びつくような活動は望めないが、教師が補助すれば水に慣れるための活動は行えると考えた。 そこで、水深の深いプールで教師と手を繋いで歩くことを目標とした。	ここでは、ボールを見ながらクラブを振ることは難しいことが把握されたが、自分で打ったボールであれば、興味の対象となるのではないかと考えた。また、軽いクラブであれば振ることができるのではないかと考えた。そこで、介助されながら、簡易ゴルフが行えるようになることを目標とした。	健康状態もよく、5分位の駆け足なら走り続けられるようになってきたので、マラソン大会の一番短いコースを、教師と手を繋ぎながら一人で走らせたいと考えた。 それを実現させるために、各時間で教師の声がけだけで走る練習を行うようにした。
単元計画	目 標	水中での活動を多く行えるようになる。	簡易ゴルフができるようになる。	手をつなぐずに、最後まで走り通す。
	具体内容	小プールや大プールを歩いたり、遊んだりする。3時間実施。	本生徒にあった用具を用いての簡易ゴルフ。15時間実施。	約100mの徒競走。15時間実施。
授業中の様子		常に教師が手を繋いでいなければならない、自発的な行動は見られない。短時間の内に唇が紫になってしまう。	教師が手を取ってクラブを振らせるが、ボールを見ようとせず、ただされるがままとなってしまう。	寒さのため体が動かず、移動することに時間を要する。
単元終了後の成果		暖かい日には喜んでプールに入り、教師と手をつないでプールの中を歩く等、活動できる時間が長くなった。(○)	クラブを渡すと一人で握るようになったが、振れなかった。また、ボールが転がっても追おうとしなかった。(×)	一番短いコースを最後まで走り通すことが出来た。(○)

資料Ⅱ-1-3 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (I.M.-3)

項目/単元		球 技 Ⅱ	体 力 作 り Ⅱ
年間計画	ねらい	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。	・体力の向上。
把握の理由		球技Ⅱでは人気スポーツであるサッカーが設定され、他者と関わる為の仲立ちとなる遊びや運動を広めることをねらいとしている。 本生徒にとって、ボールを蹴ったり、止めることは難しいことであり、ゲームに参加することも難しい。しかし、興味の対象が幾分広まってきているので、補助されながら、少しでも蹴ることができれば、そのボールを追えるようになるのではないかと考えた。 そこで、	本生徒は寒さに弱く、冬になると外での活動を行う際には防寒着を二重に着せるなど、配慮しなければならないことがある。本単元は冬のスポーツ教室に向けての単元であるが、母親が心配し、過去一度もその活動に参加していない。しかし、今後冬道を歩くことは避けて通れないことであり、寒さに対する耐性を高めることも本生徒にとって必要なことである。したがって、スポーツ教室に参加できなくても、冬道を歩く力を高めることをねらっている。
実態把握項目		・単元に関する過去の記録 ・ボールを蹴ることに関する実態 ・ルールを理解する力	・歩く力 ・段差に対する実態 ・寒さに対する実態
具体化した理由		等を把握することで、サッカーという単元でどのように指導すべきかを知ろうとした。 上述したように、自分でボールに働きかけられればそのボールを目で追うようになっていくので、蹴る際に教師が支えてボールを蹴らせれば、そのボールに少し興味を示すようになると思った。 そこで、教師に介助されながらボールを蹴り、それを追うことを目標とした。	等把握し、冬道を歩く際に配慮すべき事柄を知ろうとした。 今までの単元から歩く力はついてきているので、防寒対策を施し、滑るような場所での補助を十分に行えば、寒い日でも外を歩けるようになると思った。 そこで、教師の補助の元、決まった距離を最後まで歩き通すことを目標とした。
単元計画	目 標	足下のボールを蹴り、追っていけるようになる。	寒い日や雪の上でも、頑張って歩き続けるようになる。
	具体内容	サッカーボール蹴り。7時間実施。	雪上歩行(学校外を歩く)。9時間計画。
授業中の様子		教師が強引に動かす場面が多い。ボールに関心がなく蹴ろうとしない。教師が体を動かして蹴る動作をさせたりした。寒い日は保健室での見学が多い。	
単元終了後の成果		ボールに関心を持てず蹴ることが出来なかった。(×)	長期欠席のため指導記録なし

資料Ⅱ-2-1 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (F.H.-1)

項目/単元		体 力 作 り I	運 動 会	球 技 I
年間計画	ねらい	・体力の向上。 ・余暇や将来、他者と関わって運動が行える。	・克服する力や気持ちを高める。	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。
把握の理由		本生徒は肥満傾向で、また病気の為激しい運動はできない。しかし食事制限だけでは体重維持ができず、日々の運動が必要である。毎日母親と0.5Km程の道を通学しており、その程度の運動は行える。病気の状態も安定しており、運動量の増加も可能ではないかと考えた。しかし、体調の変化はいつ起るか分らず、特に長期休業後の運動には配慮する必要がある。また、手をつなぎ続けることができないため、他者と関わって運動することも難しい。	本生徒は肥満傾向にあるためか、積極的に運動を行おうとせず、走ったり障害物を越える等の運動を行う際には、教師からの働きかけなしでは動こうとしない。ほんの少しの段差でも、その前で止まって常動行動を行っている。しかし、教師が側につくと行う種目もあるので、距離や種目の内容を可能な限り本生徒に合わせられれば、運動会で自分から徒競走や団体種目に取り組むのではないかと考えた。	本生徒は学校内で自発的な行動や他者に対する働きかけ・気持ちの表出が少なく、発語もない為、コミュニケーション能力が低い。家庭においても余暇はずっと常動行動(ハンカチをひらひら動かす)を行っているだけであり、他者との関わりを持つことができない。しかし、今後の生活では他者と関わることは必要であり、その際に仲立ちとなる遊びや運動ができれば、充実した関係を築けると考えた。
実態把握項目		そこで、 ・春休み中の生活と運動 ・現在の心身の状態 ・誰と関わられるか 等を把握し、歩く距離や一緒に歩く友達を決めることにした。	そこで、 ・走り続けられる距離 ・障害物に対する対応 ・怖がること、不得意なこと等を把握してから、運動会種目での距離や種目を決めることにした。	そこで、手を使った球技を行うに当たって ・単元に関する過去の記録 ・興味や関心のあること ・理解する力
具体化した理由		休み中も母親と外を歩いており、健康状態にも問題ない。また、手をふりほどいてもすぐ手をつなぎ直してくれる友達がいるので、その力を借りることにした。 以上から、決められた距離を友達と手を繋いで歩けるようになることを目標とした。	走ることにしても教師の補助が必要で、距離を短くしても同様であった。また、簡易と思われる種目でも、やろうとしない傾向があり、選定に困難があった。その為、多少難しくても教師がついて行うようにし、止まらないで走ることと声かけ中心の補助で行うことを目標とした。	教師が見ていない時物を投げたり友達にいたずらをする行動が見られ、興味の対象が広まりつつある。しかし、素早い動きには目がついていけない。そこで、ゆっくりとした動きの風船を目で追わせ、たたけるようになることを目標とした。
単元計画	目 標	友達と手をつなぎ、最後まで歩き通せるようになる。	できるだけ教師に補助されずにゴールまで走り続ける。できるだけ補助されず障害物を越える。	興味を示す対象を広げる。
	具体内容	周囲約800mを40分で歩く。14時間実施。	80mの徒競走と障害物走を15時間実施。	目の前に来た風船をたたく。7時間の授業。
授業中の様子		暑くなるとしゃがむことがあり、起きあがらせるのに苦労する。 手をつなぐが、一人で歩こうとすることが多い。	教師に背を押されながら練習に取り組む姿勢が目立った。 短い距離を休まずに走ることができない。	風船を使った運動を試みたが、あまり興味を示さない。意欲を高めるために、大玉を用いてリレー等を行う。
単元終了後の成果		歩き続けられるが、友達と手をつないで仲良く歩くことができなかった。(△)	教師が背を押さないと走らない。(×) 補助が必要であったが、一人で行える障害もあった。(○)	風船にあまり興味を示さず、自分から手を伸ばすことが少なかった。(×)

資料Ⅱ-2-2 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (F.H.-2)

項目/単元		水 泳	球 技 Ⅱ	マ ラ ソ ン
年間計画	ねらい	・体力の向上。 ・克服する力や頑張る気持ちを高める。	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。	・体力の向上。 ・克服する力や頑張る気持ちを高める。
把握の理由		本生徒は家庭で風呂に入る時にも慎重になる位、水に対する恐怖心がある。小学部以来水泳指導を行っているが、水深30cm程の小プールにも入ろうとせず、無理にプールへ連れていくと、途中でしゃがみ込んだり、お漏らしをしてしまうことがある。何人かの教師で小プールへ運んだことがあったが、普段の動きとは考えられないスピードでそこから逃げ出してしまった。	集団の中にいる時も常動行動をとり、周囲の動きと同調できない等、他者と関わることが苦手であり、球技Ⅰでもそうであったように、周囲がやっていることとは異なった内容となってしまうことが多い。球技Ⅱでは、過去に重度の生徒が一人で行えたゴルフを取り上げ、その運動を楽しむを通して、他者と関わる仲立ちとなる運動まで高まってほしい。	マラソン大会は中学との合同行事で走る距離が決まっている。しかし、本生徒は肥満傾向にあり、また病気の為長い距離を走り続けるのは難しい。通学や体力作り等で歩く力の高まりが認められるが、走ることにしても積極的にではなく、数10m走ると歩くというように、教師と手をつないだり、声がけされないと、走り続けようとしにくい。
実態把握項目		そこで指導を行う為に、 ・過去に指導記録 ・日常生活での水に対する反応 ・リラックスできる環境等を十分に把握し、水泳指導に当る必要がある。	そこで、 ・物を持って操作できる力 ・目と手の協応能力 ・人や物への関心 ・興味関心や理解する力等を把握し、道具をどの様に使い、どう介助すべきかを把握しようとした。	そこで、 ・休まずに走り続けることができる距離 ・教師の働きかけの程度や仕方 ・現在の病気の状態等を把握し、最後のマラソン大会を、できるだけ一人で走り続ける為にはどうすべきかを知らうとした。
具体化した理由		年数回の水泳指導しかできない為か、拒否する傾向は変わらず、入水させることは難しいと判断せざるを得なかった。しかし、せめてプールサイドへ行き水に対する苦手意識を少しでも克服してほしいと願った。	いたずらをする等、他への興味がわきつつあり、棒を振ったりすることもできるので、本生徒に合った道具を用いれば、的に向かってボールを打つのではないかと考えた。	ペースをゆっくりにすれば、声をかけると走り続けられるようになってきており、一番短いコースなら最後まで頑張ることができのではないかと考えた。
単元計画	目 標	少しでも水に対する苦手意識を克服する。	簡易ゴルフを行えるようにする。	休まないで、一定の距離を走り通すようになる。
	具体内容	教師とともにプールサイドへ行く。3時間実施。	用具を工夫した簡易ゴルフ。15時間実施。	500mのマラソン。15時間実施。
	授業中の様子	準備運動が終わりプールに移動しようすると猛烈に拒絶し、プール入り口で座り込んだり、お漏らしをすることがある。	はじめボールを見ようとしなかったが、ボールに当たると一人で行うようになった。	体調の不良からか、どうしても活発に活動できない。走り続けることはできない。
	単元終了後の成果	気分を和らげながら、時間をかけてプールサイドへつれていこうとしたが、結局行けなかった。(×)	クラブを渡すと一人で振ってボールを打てるようになり、転がったボールの方へ歩いていくこともあった。(○)	一番短いコースを最後まで走り通すことができた。(○)

資料Ⅱ-2-3 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (F.H.-3)

項目/単元		球 技 Ⅱ	体 力 作 り Ⅱ
年間計画	ねらい	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。	・体力の向上。
把握の理由		球技Ⅱの実態把握の理由同様、集団の中で周囲と同調した動きができず、ルールを理解する力も低いので、本単元においてゲームに参加することは難しい。過去2年間サッカーを行っているが、ボールを蹴ったり止めたりすることも難しい。しかし、できなくても、他者からパスされたり、声をかけられたりすることは重要であり、他者と関わる基礎となると思われる。	毎日母親と徒歩で通学しており、段差や凹凸のある所を避けて歩く等、歩く力は高まってきている。冬道を歩く経験もあり、この単元を行うことに無理はないと考えられる。しかし、冬のスポーツ教室では、深雪の中を歩く必要があり、積極的に悪路を歩かせなければならない。また気温が低い場合、着衣や靴、凍結した路面等、配慮しなければならないことが多い。
実態把握項目		そこで ・単元に関する過去の記録 ・ボールを蹴ることに関する実態 ・理解する力	そこで、 ・歩く力 ・段差や滑る場所に対する実態 ・寒いときの体調 ・現在の病気の状態
具体化した理由		等を把握し、何ができ、どう介助すればよいかを知ろうとした。 足下にあるボールを少しだけ蹴ることができる。また、蹴ったボールを追おうとする球技Ⅱの成果から、自分で蹴ればボールを追っていくのではないかと考えた。 そこで、ゲームに参加させ、教師が声をかけながら、足下に来たボールを蹴り、追えるようになることを目標とした。	等を把握し、冬道を歩く際に配慮すべき事柄を知ろうとした。 歩く力は十分あり、段差や凹凸のある所も問題ないので、防寒対策を施し、積極的に外を歩くことで、深雪や凍結した冬の道でも安定して歩けるのではないかと考えた。 そこで、できるだけ補助を受けずに、冬の道を歩き続けることを目標とした。
単元計画	目 標	足下に来たボールを蹴り、追っていく。	寒い日や雪の上でも、頑張って歩き続ける。
	具体内容	サッカーボール蹴り。7時間実施。	雪上歩行(校外を歩く)。9時間実施。
授業中の様子		1対1や円陣パスで足下に転がってきたボールを少しずつ強く蹴るようになってきた。ボールが転がる方向へ移動しようという意欲が乏しく、扱うのは自分の所へ来たボールだけ。	初めは教師と手をつないで歩いたが、みんなについて一人で歩けるようになってきた。 疲れるとペースが落ちしゃがみ込んでしまった。
単元終了後の成果		移動できないが、自分のところに来たボールを蹴れるようになってきた。(○)	他の生徒が足を滑らせるような場所でも、安定して比較的速く歩くことができた。(○)

資料Ⅱ-3-1 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (Y.M.-1)

項目/単元		体力作り I	運動会	球技 I
年間計画	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体力の向上.</li> <li>・克服する力や気持ちを高める.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・克服する力や気持ちを高める.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる.</li> </ul>
把握の理由		<p>本生徒は行動全般がゆっくりとしており、歩く時に友達のペースについていけず遅れてしまう。急がせると頑張ってしまうが、それがストレスとなり、家庭で物を壊す行動が見られる。家庭では過保護に育てられ、無理をさせないようである。しかし、運動をしようとしなない為体重が増えつつあり、運動を自分から行う必要がある。また、高等部段階でもあるので、つらくても頑張ってしまう気持ちを育てることも必要と考えた。</p>	<p>本生徒は踵骨内反という障害から斜面の登降が不得手で、また、高い所に立つと動けなくなってしまう。体のバランスを取ることも苦手で、障害物競争ではどうしても時間がかかってしまう。徒競走でもペースを速めることができず、運動会の練習ではストレスを感じてしまう。しかし、学校生活最後の運動会であり、教師の介助を可能な限り受けずに、各々の種目に挑戦することが、気持ちを高める上で必要なことであると考えた。</p>	<p>本生徒の趣味は鍵やハンカチを収集すること、ブランコに乗ることだが、他者と関わって行う遊びや運動までには高まっていない。日常生活では二語文での会話が表出し始め、模倣や他者へのいたずら等を行うようになってきている。他者と関わる仲立ちとなる様々な遊びや運動を経験することが必要だが、運動を苦手とする本生徒にとって、複雑なルールや速い動きを要求される運動種目は困難である。</p>
実態把握項目		<p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の体調と心身の状態</li> <li>・現在の障害の状態</li> <li>・歩き続けることができる距離とペース</li> </ul> <p>等を把握し、友達と一緒に歩くペースや距離を知ろうとした。</p>	<p>そこで</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障害物に対する対応</li> <li>・怖がること、不得意なこと、得意なこと</li> <li>・障害からくる体の特徴</li> </ul> <p>等を把握し、障害物競走でどんなことががんばれるかを知ろうとした。</p>	<p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単元に関する過去の記録</li> <li>・興味や関心のあること</li> <li>・理解する力</li> <li>・他者との関わり</li> </ul>
具体化した理由		<p>健康状態も安定しており、ペースは速くないが距離が長くても歩き続けることができる。</p> <p>そこで、友達と手を繋ぎ、他者に合わせて歩くことで、自己のペースを高め、歩く力の向上を図ろうとした。</p>	<p>段差がきつい種目や難易度の高い種目は苦手である。また、体を上手に動かさないことも分かった。</p> <p>そこで、障害物の高さ等を工夫し、時間がかかっても一人で障害物を越えることに挑戦させようとした。</p>	<p>を把握し、どの様にすればボールに興味を持ち、友達と楽しんでプレーができるかを知ろうとした。</p> <p>動きが速いボールを目で追えず、そのボールへの恐怖心もある。だが模倣や簡易ルールを理解し友達との関わりがもてる。</p> <p>そこで、風船を用い、教師が声をかけながら行う、2対2のゲームを楽しむことを目標とした。</p>
単元計画	目 標	決まった距離を、できるだけ速く休まずに最後まで歩き通す。	ゆっくりでもいいから難しい障害物を一人で頑張って越える。	ルールを理解して、友達と協力してゲームができるようになる。
	具体内容	約1.2Kmの歩行。14時間実施。	障害物競争。15時間実施。	風船を用いた2対2のゲーム形式。7時間実施。
授業中の様子		友達と手をつないで歩くがだんだんと集団から離れてしまうことがあるが、最後まで頑張っている。	一つひとつの障害物を、時間がかかっても確実に越えさせるようにし、声をかけて頑張らせた。	風船を用い2対2でゲーム形式のバレーを行ったが、目の前に来た風船はさわるが、移動が必要な場合は声がけが必要である。
単元終了後の成果		ペースが速くなると友達に手を引かれて歩くことが多かったが、少しは自分のペースをあげることができた。(○)	苦手の障害物も、一人で時間をかけても確実に越えていけるようになった。(○)	友達と協力したり、自分から移動してプレーすることはできなかったが、ルールを理解して相手コートに打てるようになった。(△)

資料Ⅱ-3-2 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (Y.M.-2)

項目/単元		水 泳	球 技 Ⅱ	マ ラ ソ ン
年間計画	ねらい	・体力の向上 ・克服する力や頑張る気持ちを高める	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。	・体力の向上 ・克服する力や頑張る気持ちを高める
把握の理由	実態把握項目	<p>本生徒は手洗いで手に水がつくと、ハンカチでいつまでも水滴を拭いているほど、体に水がつくことを気にする。プールに入ることを拒否はしないが、水への恐怖心を持っているようである。しかし、1年の内、プールに入れるのは限られた回数であり、その時に水の中でする活動や全身の日光浴を経験することは重要であると考えた。</p> <p>そこで</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水に対する気持ちや態度</li> <li>・水に入った時の体の変化</li> <li>・寒さに対する実態</li> <li>・心身の状態</li> </ul> <p>等を把握し、水中でできることや水中での配慮事項を知ろうとした。</p> <p>水が体(特に顔)につくことを嫌がること、水中では教師が側についていないと不安がること、寒いと比較的短時間で顔色が悪くなってしまうこと等が分かった。</p> <p>そこで、難しい課題だが、顔についた水を気にしなくなる程水に慣れて欲しいと願い、目標を「顔を水につける」とし、教師と一緒に活動して、徐々に慣れさせようと考えた。</p>	<p>本生徒は他者と関わる為の仲立ちとなる遊びや運動が乏しい。今後の生活を考えると、他者と関わりを持って行う運動を身につけることは必要であると考えた。球技Ⅱでは、友達との協力は難しかったが、ルールを理解してプレーしているの、本単元でもゴルフのルールを理解しプレーできると考えた。また、道具を操作することも、細かな動きが要求されなければ行えると考えた。</p> <p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・物を操作できる力</li> <li>・目と手の協応能力</li> <li>・興味や関心</li> <li>・理解する力</li> </ul> <p>等を把握し、道具をどのように使えるか、何に興味を持つか、どの様に介助すべきかを知ろうとした。</p> <p>本生徒は簡易なルールを理解し、クラブの操作もできる。また、面白そうなことには興味を示しやってみようとする。</p> <p>そこで、やり方が分れば、自分から行うようになるのではないかと考え、一人で行えるようになることを目標とした。</p>	<p>例年、マラソン大会の時期に休みがちになる程、走ることを苦手としている。無理に走らせると、帰宅してストレスを祖父母や物に発散させてしまい、母親からはどうしたらいいかと相談される程である。しかし、最後のマラソン大会でもあり、是非みんなと一緒にゴールまで頑張って走って欲しいと考えた。</p> <p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・無理せず休まずに走り続けることができる距離</li> <li>・教師の介助の程度</li> <li>・心身の状態</li> </ul> <p>等を把握し、どのコースだったら休まず走り続けられるか、どの様に介助したら頑張る走れるかを知ろうとした。</p> <p>単元前、健康状態はよかったが、「マラソンあるの?」と朝母親に聞く程、気にかけていた。しかし、本人のペースでなら何とか二番目に長いコースを走れそうである。</p> <p>そこで負担となりすぎないよう、自分のペースを大切に、二番目に長い距離を一人で休まずに走らせたいと考えた。</p>
単元計画	目 標	水になれて顔を水につけたりできる。	ボールを一人で打って、的に入れるようになる。	ゆっくりでも休まずに、最後まで走り通す。
	具体内容	水に慣れる運動や水中での遊び。3時間実施。	簡易ゴルフ。15時間実施。	約1.2Kmのマラソン。15時間実施。
	授業中の様子	教師が手をつなぐと安心するが、一人の時はプールの中を歩くことを怖がることある。顔を水につけることを嫌がった。	教師が手を取ってクラブを振らせたり、模範を示してやらせようとした。興味を示し、一人でやるようになってきた。	本人の気持ちを大切にしながら、できるだけ走り続けるよう働きかけたところ、少しずつ走り続ける距離がのびてきた。
	単元終了後の成果	プールの中を一人で歩けるようになってきたが、顔に水がつくのを嫌がりそれ以上進まなかった。(△)	地面に置いてあるボールをよく見て、一人で打ち、目標まで打ち続けることができるようになった。(○)	二番目に長いコースをゆっくりではあるが、休まずに走り続けることができた。(○)

資料Ⅱ-3-3 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (Y.M.-3)

項目/単元		球 技 Ⅱ	体 力 作 り Ⅱ
年間 計画	ねらい	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。	・体力の向上。 ・克服する力や気持ちを高める
	把握の理由	球技Ⅱで、興味を持ったことに積極的に取り組む姿勢が見られた。サッカーは集団スポーツであり、他者と関わるいい運動である。ゴルフ同様、サッカーへも興味を示してくれば、本生徒が行う遊びや運動の幅が広がると思われる。しかし、走ったり、パランスを取ったりすることが不得手な本生徒にとって、サッカーをすることは難しいといえる。	本生徒は斜面を不得手とし、さらにその場が滑るという条件が加われば、体が硬直し動かなくなってしまう。しかし、冬のスポーツ教室ではそり遊びを行うために、一人で斜面を登っていかなければならない。その為、意識して冬の雪道や氷の上等を歩く練習をする必要がある。
	実態把握項目	そこで、 ・単元に関する過去の記録・蹴ることに関する実態 ・理解する力 ・友達との関わり	そこで、 ・歩く力 ・斜面に対する実態 ・滑る所に対する実態 ・寒さに対する実態 等を把握し、冬道を歩くために配慮すべき事柄を知ろうとした。
	具体化した理由	等を把握し、どの様なことができるか、ゲームにどう参加させるか、介助をどうするか等を知ろうとした。 動いてプレーしたり強く蹴ることは難しいが、止まって教師が補助すればボールを蹴ることができる。 そこで、声をかけながらパス等の練習を行い、ゲームでも止まってプレーすることのできるのではないかと考えた。	ちよつとした斜面でも教師に頼ってしまい一人で歩こうとしない。しかし、平坦な雪道であれば、何とか一人で歩けることが分った。 そこで、教師に頼らずちよつとした斜面を歩けるようになって欲しいと思い、友達と協力しながら歩けるようになることを目標とした。
単元 計画	目 標	ボールを追って、友達やゴールにボールを蹴るようになる。	教師に頼らず友達と手をつないで、雪道を歩けるようになる。
	具体内容	サッカーゲーム。7時間実施。	雪上歩行(校外を歩く)。9時間実施。
	授業中の様子	教師が意識的に動かせるようにし、ボールを追って行かせ、シュートしたりパスしたりするよう声掛けしたところ、段々ゴールに蹴ることが分ってきた。	教師の手を強く握り慎重に歩かせるようにした。 氷の上や雪の斜面などでは止まってしまうことが多い。
	単元終了後の成果	体をうまく使えずボールを強く蹴ることはできなかったが、ボールを追ったり友達にパスしようとする姿が見られるようになってきた。(○)	ゆっくりではあるが、雪道を友達と手をつないで歩けるようになった。(○)



資料Ⅱ-4-1 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (S.Y.-1)

項目/単元		体力作り I	運動会	球技 I
年間計画	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体力の向上.</li> <li>・克服する力や気持ちを高める.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・克服する力や気持ちを高める.</li> <li>・他者と関わって行えること.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる.</li> </ul>
把握の理由		<p>本生徒はダウン症で心臓に疾患を持ち、歩き続けると疲れて顔色が悪くなったりする。そのため、長い距離を歩いたりペースを早くすると、しゃがみ込んでしまうことがある。しかし、大丈夫かと声をかけるとすぐに歩き始める等、頑張りやさんでもある。最近では心臓疾患の状態も安定しているようであり、少しずつ体力を高めていくことが、体調の維持にも必要であると考えた。</p>	<p>他と競争する気持ちが強く、障害物に積極的に挑もうとする。しかし、高等部段階になると障害物の難易度が高い為、自分にはできないと判断すると後込みしてしまう。運動会は発表の場で、保護者に頑張っている様子を見てもらう機会でもあるので、本生徒が挑戦する姿や活躍する姿を示す必要がある。</p>	<p>本生徒は学校で学習した遊びを家庭で反復して行ったり、友達に遊ぼうと働きかけたりする。しかし、語彙数が少なく発音も不明瞭な為、理解してもらえないこともある。また遊びの種類も広まっているとはいえず、他者と関わる仲立ちとなる遊びや運動を、更に獲得していき、それを楽しむ必要があると考えた。</p>
実態把握項目		<p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の体調</li> <li>・現在の障害の状態</li> <li>・歩き続けることができる距離とペース</li> <li>・指示を理解する力</li> </ul> <p>等を把握し、現在の歩く力や体調がどの程度であり、どの位まで歩けるかを知らうとした。</p>	<p>そこで</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障害物に対する対応</li> <li>・怖がること、不得意なこと</li> <li>・得意なこと</li> <li>・他者との関わり方</li> </ul> <p>等を把握し、障害物競走でできることや、運動会での活躍の仕方を知らうとした。</p>	<p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単元に関する過去の記録</li> <li>・興味や関心のあること</li> <li>・理解する力</li> <li>・他者との関わり</li> </ul> <p>等を把握し、本単元で何ができるか、ルールをどうすればよいか、等を知らうとした。</p>
具体化した理由		<p>体調や障害の状態は安定しており、指示理解もしっかりしている。</p> <p>そこで、友達と手をつなぎ一緒に歩くことで、歩く距離やペースを高め、最後まで歩き通すことができるようになることを目標とした。</p>	<p>本生徒は段差がきつい種目を不得手としており、それを越す場合介助が必要である。しかし、挑戦しようとする気持ちは強い。またお祭りが好きで太鼓を叩けることも分った。</p> <p>そこで、挑戦する気持ちを大切にしながら、少し難しいことに挑戦させようとした。また、祭りが好きなので、応援活動ができると考えた。</p>	<p>目の前にきたボールを叩いたり取ったりできるが、友達との協力や移動してボールに触れたり、動きの早いプレーは難しい。しかし、転がったボールを拾いに行く等、ルールは理解できそうである。</p> <p>そこで風船を用い、簡易ルールで試合が行えることを目標とした。</p>
単元計画	目 標	友達と手を繋ぎ、決まった距離を、速く休まずに最後まで歩き通す。	難しい障害物を頑張って越える。 友達を応援できる。	ルールを理解して、友達と楽しんでゲームができるようになる。
	具体内容	約1.2Kmを友達と手をつなぎ歩く。14時間実施。	160mの徒競走と障害物走。15時間実施。	風船を用いた2対2のゲーム形式。7時間実施。
授業中の様子		教師の声がけにしたがって、友達と手をつないで歩く。距離が長くなると集団についていけない。	はじめ伴走が必要だったが、慣れてくると障害物を一人で越えられるようになってきた。 紅白応援の太鼓を一人で叩くようになった。	風船を使った2対2の風船バレーを行い、敵に向かって風船を打てるようになってきた。少し手をのばすと届くところに来た風船を打てるようになってきた。
単元終了後の成果		長い距離を歩けるようになってきたが、ペースが速くなると集団についていけず、突然座り込むことがあった。(△)	一人で障害物を越えられるようになった。(○) 応援活動を頑張って行うことができた。(○)	ルールがわかり、打った風船を相手が落とすと喜び、移動しながらボールを打てるようになった。(○)

資料Ⅱ-4-2 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (S.Y.-2)

項目/単元		水 泳	球 技 Ⅱ	マ ラ ソ ン
年間計画	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体力の向上.</li> <li>・克服する力や頑張る気持ちを高める.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体力の向上.</li> <li>・克服する力や頑張る気持ちを高める.</li> </ul>
把握の理由		<p>本生徒はプールが好きで、泳げないが水中での遊びも得意である。寒くなると自分からプールを出てプールサイドで休む等、自分で判断できることも多い。暖かい日が少なくプールに入る機会も少ないが、少し寒くても頑張っプールに入り体を鍛えることは本生徒にとって必要なことと思われる。また、水中での遊びも行えるので、そこから泳ぎにつなげていければ望ましいと考える。</p> <p>そこで、</p>	<p>本生徒は道具を使って遊ぶことが得意であり、学校で学んだことを家庭で行える等、応用する力も高まってきている。本単元のゴルフは、一人でも行えるが、他者と競い合って行えば、より楽しめるスポーツである。宿泊施設でパターゴルフを行える所もあり、今後生活する上で、他者と関わる仲立ちとなる運動であると思われる。しかし、ゴルフ本来の道具は扱いが難しく、そのままでは本生徒に扱える道具ではない為、その点を工夫すれば十分楽しめると考えた。</p> <p>そこで</p>	<p>本生徒は数分間走り続けると急に立ち止まり、しゃがみ込んでしまう。心臓疾患のせいと考えられるが、少し休むとすぐに走り始めるので、以前に比べ走る力が高まってきていると思われる。マラソン大会のコースは3つあり、本生徒が最後まで走り続けるコースを選び、最後まで頑張ることによって、自信をつけることが大切であると考えた。しかし、楽なコースを選んでしまうと克服する力が高まらないともいえる。</p> <p>そこで、最終時の大会でねらいが達成できるよう、</p>
実態把握項目		<ul style="list-style-type: none"> <li>・水に対する気持ちや水に入った時の変化</li> <li>・寒さに対する実態</li> <li>・水中で行えること</li> <li>・現在の心身の状態</li> </ul> <p>等を把握し、水中でできることや水に対する恐怖心の有無、健康の状態を知ろうとした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物を操作できる力</li> <li>・目と手の協応能力</li> <li>・興味や関心</li> <li>・ルールを理解する力</li> </ul> <p>等を把握し、道具をどのように使えるか、補助の程度、ルールをどうするか等を知ろうとした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今休まずに走り続けることができる距離</li> <li>・教師の働きかけの程度</li> <li>・心身の状態</li> </ul> <p>等を把握し、大会でのコースと、それを走るためにどのように練習して行けばよいかを知ろうとした。</p>
具体化した理由		<p>水遊びが好きで、水を怖がらず、暖かい日であれば、最後まで水中での活動が続けられる。健康状態も問題がないことが分かった。</p> <p>そこで、水中での活動をさらに広げられるのではないかと考え、水中に潜れるようになることを目標とした。</p>	<p>本生徒は、簡易なルールを理解し道具の操作も上手であり、一度模範を示せば一人でできることが分かった。</p> <p>そこで、ゴルフのやり方を説明し模範を示して、最終的に一人で打つて的に入れることを目標とした。</p>	<p>2、3分走ると休んでしまうが、教師が声をかけると走り始める。健康状態もよい。</p> <p>そこで、二番目に長い距離を選び、練習で少しずつ高めることによって、走らせられるのではないかと考えた。</p>
単元計画	目 標	水になれて水中に潜ったりできるようになる。	簡易ゴルフができるようになる。	休まずに、最後まで走り通す。
	具体内容	水中での遊びや歩行等の運動。3時間実施。	簡易ゴルフ。15時間実施。	約1.2Kmのマラソン。15時間実施。
授業中の様子		少し勝手な活動が見られるが、暖い日には喜んでプールに入り、手をつないで水に潜るなどの活動を行う。	クラブの操作や的に向かって打つことが、うまくできるようになってきたが、指示されないのにやってしまうことがある。	走っては休み、走っては休みの連続で、声が必要である。
単元終了後の成果		バタ足の真似をしったり水に顔をつけたり、水中に潜ったりできるようになった。(○)	ボールを遠くの的に向かって打つことを短期間で理解し、一人でも行えるようになった。(○)	二番目に長いコースを休まずに走り通すことができ、記録も高めることができた。(○)

資料Ⅱ-4-3 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (S.Y.-3)

項目/単元		球 技 Ⅱ	体 力 作 り Ⅱ
年間計画	ねらい	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。	・体力の向上。 ・克服する力や気持ちを高める。
把握の理由		球技ⅠやⅡから、ルールを覚えることで積極的にその種目に参加する本生徒の姿が見られた。サッカーは人気があり、狭い場所なら円陣パスを行ったり、コートがあればゲームを行ったりと応用のきくスポーツである。本生徒もテレビの影響か教室内でボールを蹴ることもあり、関心を持っていると思われる。この単元では、簡易なルールでゲームを行い、一人で蹴るだけでなく、他者との関わりを持ってプレーできるようにしてほしいと考えた。	本生徒はそり遊びを一人で行え、雪の坂を一人で登っていける。また、寒い日であっても外で活動することに問題はない。しかし、路面が凍っていたり、段差がきつい道路を歩く際には慎重となり、教師の手をきつく握りしめることがある。できるならば、どんな冬道であっても一人で歩けるようになって欲しいし、そうすることで、冬のスポーツ教室当日も教師の介助なしに活動を行えると考えた。
実態把握項目		そこで、 ・単元に関する過去の記録やボールを蹴ることに関する実態 ・ルールを理解する力 ・友達との関係 等を把握し、どの様に指導すべきかを知ろうとした。	そこで、 ・歩く力 ・斜面に対する実態 ・滑る所に対する実態 ・教師の介助の程度 等を把握し、冬道を一人で歩くために配慮すべき事柄を知ろうとした。
具体化した理由		ルールを理解できるが、ボールを蹴るのは無造作で声かけが必要である。 そこで、教師がパスする相手の名前を呼んだり、ボールを追うよう声掛けする等して、ボールを追って友達やゴールに蹴ることを目標とした。	平坦な道や雪の斜面を歩く力はある。しかし、氷の上や雪の段差等は、介助を必要とする。 そこで、苦手な滑る道を教師が手を繋いで積極的に挑戦させ、段々と介助を少なくしながら、滑る道路や斜面も歩けるようになることを目標とした。
単元計画	目 標	サッカーができるようになる。	滑るところや斜面が、歩けるようになる。
	具体内容	サッカーのゲーム。7時間実施。	雪上歩行(校外を歩く)。9時間実施。
授業中の様子		目の前に来たボールを強く蹴るようになってきたが、ボールを積極的に追う姿はあまり見られず、声かけが必要であった。	滑る道では、教師の手をしっかりと握るが、回数を重ねるにつれ、雪道を歩くのになれてきたようである。
単元終了後の成果		ゴールにシュートするということは理解してプレーしたが、意欲が高まらず教師からの声かけが必要であった。(○)	途中で休むことなく歩けるようになり、滑るような斜面も一人で登るようになってきた。(○)

資料Ⅱ-5-1 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (H.R.-1)

項目/単元		体力作り I	運動会	球技 I
年間計画	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体力の向上.</li> <li>・他者との関わりを持つ運動.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・克服する力や気持ちを高める.</li> <li>・他者との関わりを持つ運動.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余暇や将来に、他者と関わって行える運動が行えるようになる.</li> </ul>
把握の理由		<p>本生徒はバスと徒歩で通学し、日常生活面でも自立している。また、頑張りやで責任感があるが、決まったパターンや自己のペースを崩すことを嫌い、強要されると体調を崩すことがある。徒歩で通学する位の歩く力はあるが、それほどペースは速くないので、単位時間内で歩く距離は限られる。しかし、体力を高める為には、他に合わせて急いで歩くことを経験させることも必要であると考えた。</p> <p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の歩く力</li> <li>・現在の心身の状態</li> <li>・他者との関わり</li> </ul> <p>等を把握し、一緒に歩く友達や距離、目標とするペース等を知ろうとした。</p> <p>本生徒は他者と積極的に関わり、自分から手を繋ごうとする。また、体調もよく、精神的にも安定していることが分かった。</p> <p>そこで、速いペースで歩く友達について歩くことで、自分のペースを速くし、最後まで歩き通すことを目標とした。</p>	<p>運動会では徒競走と団体種目の障害物リレーがあるが、走るペースが遅い本生徒にとっては、どちらも苦手な種目であるといえる。しかし、最後まで頑張ろうとする気持ちは強く、何事にも積極的に取り組んでいる。その努力が実を結ぶよう、授業を展開する必要がある。また、紅白対抗でもある団体種目で、チームを意識させ、競い合うことも経験させたいと考えた。</p> <p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・走るスピードと距離</li> <li>・障害物に対する対応</li> <li>・理解する力</li> <li>・チームや競争の意識</li> </ul> <p>等を把握し、徒競走の距離や障害物の設定、配慮の仕方等を知ろうとした。</p> <p>チームや競争を意識できだいたい障害物を一人で越えられることが分かった。</p> <p>そこで、速いグループで走ることで自分の殻を破ってさらに速く走ることで、また、チームを意識させることでさらに競争意識を高め団体種目に参加させることを、目標とした。</p>	<p>ボールを手で転がしたり蹴ったりする等、ボール運動を行え、友達と共に行おうとすることから、他者と関わる為の仲立ちとなる運動をいくつか知っていると思われる。しかし、バレーボールの経験は少なく、空中にあるボールを叩いたり追いかけることは難しい。模倣を行うが、障害のため体をうまく使えない。しかし、幅を広げさせる意味からも、ぜひバレーボールを身につけさせたいと考えた。</p> <p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボールを扱う技能</li> <li>・集団の中での意識</li> <li>・ルールの理解</li> </ul> <p>等を把握し、どのような用具やルールで行い、どのような技能を高める必要があるかを知ろうとした。</p> <p>集団の中での自分の役割やルールを理解で、また、ゆっくりとした動きの物であれば目で追いつて打てること分かった。</p> <p>そこで自分の役割を自覚し、チームを意識し連携してプレーできるようにすることを目標とした。</p>
実態把握項目		<p>そこで</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の歩く力</li> <li>・現在の心身の状態</li> <li>・他者との関わり</li> </ul> <p>等を把握し、一緒に歩く友達や距離、目標とするペース等を知ろうとした。</p> <p>本生徒は他者と積極的に関わり、自分から手を繋ごうとする。また、体調もよく、精神的にも安定していることが分かった。</p> <p>そこで、速いペースで歩く友達について歩くことで、自分のペースを速くし、最後まで歩き通すことを目標とした。</p>	<p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・走るスピードと距離</li> <li>・障害物に対する対応</li> <li>・理解する力</li> <li>・チームや競争の意識</li> </ul> <p>等を把握し、徒競走の距離や障害物の設定、配慮の仕方等を知ろうとした。</p> <p>チームや競争を意識できだいたい障害物を一人で越えられることが分かった。</p> <p>そこで、速いグループで走ることで自分の殻を破ってさらに速く走ることで、また、チームを意識させることでさらに競争意識を高め団体種目に参加させることを、目標とした。</p>	<p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボールを扱う技能</li> <li>・集団の中での意識</li> <li>・ルールの理解</li> </ul> <p>等を把握し、どのような用具やルールで行い、どのような技能を高める必要があるかを知ろうとした。</p> <p>集団の中での自分の役割やルールを理解で、また、ゆっくりとした動きの物であれば目で追いつて打てること分かった。</p> <p>そこで自分の役割を自覚し、チームを意識し連携してプレーできるようにすることを目標とした。</p>
具体化した理由		<p>本生徒は他者と積極的に関わり、自分から手を繋ごうとする。また、体調もよく、精神的にも安定していることが分かった。</p> <p>そこで、速いペースで歩く友達について歩くことで、自分のペースを速くし、最後まで歩き通すことを目標とした。</p>	<p>チームや競争を意識できだいたい障害物を一人で越えられることが分かった。</p> <p>そこで、速いグループで走ることで自分の殻を破ってさらに速く走ることで、また、チームを意識させることでさらに競争意識を高め団体種目に参加させることを、目標とした。</p>	<p>そこで自分の役割を自覚し、チームを意識し連携してプレーできるようにすることを目標とした。</p>
単元計画	目 標	友達と手をつなぎ、他のペースに合わせて最後まで歩き通す。	できるだけ速く徒競走を走る。 チームを意識して団体種目に参加する。	チーム内で連携したゲームが行えるようになる。
	具体内容	学校の周囲(1.2Km)を、40分間歩く。14時間実施。	160Mの徒競走と障害物走。15時間実施。	ビーチボールを用いてゲーム形式の7時間の授業。
授業中の様子		自分から友達と手をつないだり、友達に声をかけたりして、歩き通す。	すべてに対し意欲的に取り組む。 チームという意識もあり、相手を意識しながら練習する。	止まったままのプレーが目立ち、相手コートには返すが、味方との連携は難しいようである。
単元終了後の成果		自分のことばかりではなく他の生徒を考え、ペースを合わせるように歩き続けることができるようになった。友達との関係も良好。(○)	スピードは上がらなかった、一生懸命頑張った。(○) チームを意識して団体種目に取り組み、越え方もうまく速くなった。(○)	相手コートには返すが、チーム内で連携してプレーするまでには至らなかった。(△)

資料Ⅱ-5-2 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (H.R.-2)

項目/単元		水 泳	球 技 Ⅱ	マ ラ ソ ン
年間計画	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体力の向上.</li> <li>・克服する力や頑張る気持ちを高める.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余暇や将来に、行える運動ができるようになる。(ゴルフ).</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体力の向上.</li> <li>・克服する力や頑張る気持ちを高める.</li> </ul>
把握の理由		<p>小・中学校の特殊学級時代に水泳の経験はあるが、泳ぐことはできない。しかし、体を上手に使うことができない本生徒にとって、水中で体を動かしたり、浮いたりすることは、いい刺激となり、体を丈夫にさせる意味もあると考える。また、模倣する意識も高く、泳ごうとする気持ちも強いことから、ぜひ泳ぎを身につけさせてあげたいと考えた。</p>	<p>本生徒は積極的に他者と関わりを持とうとし、知っていることを伝えたり、お世話をしたりすることが好きである。球技Ⅰではビーチバレーを経験し、その後も昼休み等に友達と行っていた。この単元でゴルフという新しい運動を身につけることができれば、さらに他者との関わり方が増えるものと期待できる。しかし、道具を使うことが苦手な本生徒にとって、ゴルフは難しい種目といえる。</p>	<p>本生徒は、何事にも一生懸命で、決まったことや言われたことは最後までやり通さないと気がすまない。過去のマラソン大会でも意欲を持って走り通している。しかし、どうしてもペースがあがらない為、順位は今ひとつであった。入賞することが目的ではないが、最後のマラソン大会でもあるので、入賞できるように頑張らせたいと考えた。</p>
実態把握項目		<p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水に対する気持ち</li> <li>・過去の指導記録</li> <li>・心身の状態や障害の状態</li> </ul> <p>等を把握することで、これから指導する事柄とどの様に指導するか、指導する上で配慮すべき事柄等を知らうとした。</p>	<p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・道具を操作する力</li> <li>・理解する力</li> <li>・他者との関わり</li> </ul> <p>等を把握し、どの様な用具を使うか、ルールをどうすべきか、介助をどの様にするか等を知ろうとした。</p>	<p>そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・休まずに走り続けることができる距離</li> <li>・現在の心身の障害の状況</li> </ul> <p>等を把握し、本生徒が頑張れば入賞できるかもしれないコースや練習の内容、働きかけの方法等を知らうとした。</p>
具体化した理由		<p>本生徒は、水に対する恐怖心もなく、水の中での活動に意欲的である。また、水に顔をつけたり潜ったりできることが分った。</p> <p>そこで、水に慣れることから始めていき、徐々に水泳の初歩的な動作を身につけ、いくらかでも泳げるようになることを目標とした。</p>	<p>ルールを理解でき、軽い用具であれば操作に問題がなく、介助も必要ないことが分かった。</p> <p>そこで、教師が示範したのを見てクラブの操作を身につけることで、一人で行うようにし、その後は友達と競いながらゴルフを楽しむことを目標とした。</p>	<p>2番目に長いコースであれば、友達と競い合っってトップ集団についていけることが分かった。しかし、体調が思わしくない。</p> <p>そこで、2番目のコースを走ることで、他の生徒からの刺激を受けて練習して自分のペースをあげながらも、無理せず走ることを目標とした。</p>
単元計画	目 標	水泳の初歩的な動作を身につける。	ルールを理解し、積極的にゴルフを楽しめるようになる。	自分のペースだけでなく他と競って最後まで走り通す。
	具体内容	サイドに手をかけてのバタ足や教師が手を引いてのバタ足練習。3時間実施。	簡易ゴルフ。15時間実施。	約1.2Kmのマラソン。15時間実施。
授業中の様子		常に教師の話をよく聞き、他の生徒がしていることを真似したりして泳ごうとする。	一度やってみせるとすぐにやり方を飲み込み、ルールも理解して、ボールを目標に向け打ち続ける。	
単元終了後の成果		よるこんでプールに入り、教師の話を聞いて、バタ足動作が行えるようになってきた。(○)	積極的にクラブを振って、ゴールを目標に打ち、少ない数でゴールさせられるようになった。(○)	長期欠席のため指導記録なし。

資料Ⅱ-5-3 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (H.R.-3)

項目/単元		球 技 Ⅱ	体 力 作 り Ⅱ
年間計画	ねらい	余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。	・体力の向上。 ・克服する力や気持ちを高める。
把握の理由		以前より、昼休みにボールを蹴って遊ぶ姿が見られたので、本単元にも積極的に参加すると考えられる。しかし、本生徒は動作がゆったりとしており、多人数で行うゲームの際には、他の生徒の動きについていけず、ただ走ったり見ているだけという状況が予想される。これでは、他者と関わって行う運動とはならず、配慮をする必要がある。	冬のスポーツ教室では、そり遊びの為に雪の斜面をそりを持って一人で登らなければならない。本生徒は徒歩通学で歩くことに慣れてはいるが、雪道や起伏のある斜面を少し苦手としている。しかし、今後も冬の雪道を歩くことは避けられず、滑る道や凸凹のある所を寒い中、歩かなければならない。冬のスポーツ教室で一人で活動する為に、ぜひ乗り越えて欲しいと考える
実態把握項目		そこで、 ・ボールを足で扱うことに関する実態 ・ルールを理解する力 ・介助の程度 等を把握し、練習の内容やゲームへの参加のさせ方、介助の仕方、ルールのあり方等を知ろうとした。	そこで、 ・起伏や滑る場所で歩く力 ・心身の状態 ・寒さに対する実態 等を把握し、どの様な場所を歩くか、寒さの対策をどの様にするか、配慮すべき事柄等を知ろうとした。
具体化した理由		ルールも理解でき、止まったのプレーなら十分行え、また教師の声がけをよく聞いてプレーできる。 そこで、パスゲームをし集団の動きを理解させた上で、実際のゲームでは教師が声をかけながら行うようにし、ボールを追いかけ、友達にパスしたりして楽しむことを目標とした。	毎日の通学のおかげで寒さに対して問題はなく、健康状態もよい。起伏のある所は少し苦手だが、積極的に挑もうとしている。 そこで、意図的に起伏のある所を歩かせ、バランスが取れるようになることを目標にするとともに、教師の手を借りずにそりに乗れることを目標とした。
単元計画	目 標	ただ蹴るのではなく、友達にパスしたりして、ゲームを楽しむ。	雪道をバランスを取りながら歩く。そり遊びを一人で行う。
	具体内容	2対2や3対3のパスゲーム。7時間実施。	友達と手をつないで歩いたり、意図的に起伏のある場所の歩行。9時間実施。
授業中の様子		周囲のスピードについていけない面があり、やりたいことがあるのだが、そのチャンスになかなか恵まれない。	雪のない所と同じように、頑張って歩き通すが、バランスを崩してしまうこともある。また、そり遊びも進んで行う。
単元終了後の成果		ボールの方向に走ってプレーをし、ボールを蹴ることができた。友達にパスすることもあった。(○)	寒いでも元気に歩き通し、バランスを取ることもうまくなった。そり遊びも一人で行った。(○)

資料Ⅱ-6-1 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (I.Y.-1)

項目/単元		体力作り I	運動会	球技 I
年間計画	ねらい	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動。	・克服する力や気持ちを高める。 ・他者との関わりを持つ運動。	・余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。
把握の理由		2km程の距離を徒歩で通学し、帰宅後や休日も自転車で10km以上の距離を移動する等基礎的な体力は十分あり、本単元で歩く力を高める必要はあまりない。小学6年位の学力があり、自分で判断し生活できるが、複雑な家庭環境や小・中学時代の生活から、他の生徒とは関わらず特定の教師に会話を求めようとする。今後の生活では同年代の人と関わることが多いと思われる。1年を通してその態度を身につけていくことが必要であると考えた。	走力も、障害物を軽々と越える能力もあり、運動会の種目を行う為には一度説明するだけでよい。本生徒には、各種目もさることながら、最高学年であり生徒会長でもあることから、高等部全体、学校全体を見渡し、運動会を盛り上げられるような活動を行って欲しいと願った。しかし、いつ精神的に不安定になるか分からず、その点も配慮して過度な負担とならないようにする必要がある。	運動会の成果か、精神的に安定し、自信も伺えるようになってきた。この気持ちを本単元に繋げていければ、さらに友達と関わることができると考えた。本単元は手を使った球技としてバレーボールを行うよう計画したが、本生徒ほどの運動能力があっても、普通のバレーボールは難しいと推測された。普通のボールの堅さやスピードでは、ラリーを続けることができないと思われたからである。
実態把握項目		そこで、 ・現在の体力や心身の状態 ・他者との関わり等を把握し、他の友達とどのようにしたら関わって歩き続けることができるかを知ろうとした。	そこで、 ・現在の心身の状態 ・家庭での生活 ・他者との関わり等を把握し、他生徒と競争意識を持ちながらも、チームの為どの様に貢献させていけるかを知ろうとした。	そこで、 ・ボールを扱う技能 ・ルールの理解 ・他者との関わりを把握し、どの様な内容でどの様なルールにすれば、ラリーを続けて楽しむことができるかを知ろうとした。
具体化した理由		健康状態もよく精神的にも安定しており、最高学年であるという自覚も芽生えつつある。 そこで、友達をお世話する意味を込め、中度の障害がある生徒と手を繋ぎ他者のことを考えて歩くことを目標とした。	精神的に不安定な面があり、友達のことを考えない。運動会での自分の役割は認識している。 そこで、応援団長という役割を与え、自分のことだけではなく、全体を考えて運動会に参加する意識を高めていくようにした。	運動会以来積極的に声を出せるようになってきている。軽いボールであれば上手に扱うことができ、ルールも理解できる。 そこで、ゲームで中心的な役割を与え、友達に声をかけながらプレーできることを目標とした。
単元計画	目 標	友達のペースに合わせてたり段差に気を配りながら手をつないで歩き通せるようになる。	自分の種目だけでなく、全体を考えて運動会に参加できるようになる	チームの中での自分の役割が分かり、他者と関わってプレーできるようになる。
	具体内容	学校の周囲(1.5Km)を、30分間歩く。14時間実施。	200Mの徒競走と障害物走。15時間実施。	ビーチボールを用いてゲーム形式の7時間の授業。
授業中の様子		興味の対象は教師であり、友達と手をつないでいるが、教師とばかり話をしている。歩き続けることに問題はない。	精神的に不安定なときがあり、活動に波がある。	積極適にゲームに参加し、声を出したり、移動しながらプレーしたりする姿が見られる。 精神的に不安定である。
単元終了後の成果		ペースも速くコースを歩き通せたが、友達と手を繋ぎながらも教師と話をする等、友達に配慮しながら歩くことはできなかった。 (△)	最後まで自分の出場する種目をがんばった。(○) チームリーダーとして大きな声で応援することもできた。(○)	役割やルールを意識し、友達の名前を呼びながらプレーすることができた。 (○)

資料Ⅱ-6-2 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (I.Y.-2)

項目/単元		水 泳	球 技 Ⅱ	マ ラ ソ ン
年間計画	ねらい	・克服する力や頑張る持ちを高める。	・余暇や将来に行える運動ができるようになる。	・体力の向上。 ・克服する力や頑張る気持ちを高める。
把握の理由		本生徒はプールが好きで積極的に泳ごうとする。教師の指示をよく聞き、模倣もしようとするが、残念ながら前年度までの指導では、泳ぎを身につけるまでには至っていない。本生徒自身は、泳げないことを悔しいと感じているようで、是非泳げるようになりたいと言うこともあった。	本生徒は、休日に自転車や散歩をしたり一人で映画を見に行く等、趣味や余暇活動は充実している方である。しかし、同年代の人と関わることがほとんどなく、行える運動も少ない。しかし、球技Ⅰで友達に声をかけながら活動する様子が見られるようになってきているので、球技Ⅱでも他者と競い合ったり教えたりしながら楽しんで運動を行って欲しいと願った。	マラソン大会は中学部との合同行事であり、各々の生徒と一緒に走る機会である。中学部の生徒でもマラソンの得意な生徒がいて、競争を意識させるよい機会であるといえる。本生徒は生徒会長であり、対抗心も強いことから、中学部や他学年の生徒と競わせることで、自己の記録を高めることができると考えられる。
実態把握項		そこで、 ・水に対する気持ち ・過去の指導記録 ・心身の障害の状態等を把握し、今までどのような活動を行えたか、どのような指導内容にしたか水中で進めるようになるか、また水中で配慮すべき事柄等を知ろうとした。	そこで、 ・道具を操作する力 ・理解する力 ・他者との関わり等を把握し、どのような道具にすればよいか、どのようなルールにすればよいか等を知ろうとした。	そこで、 ・休まずに走り続けられる距離やペース ・現在の心身の状態や意欲等を把握し、本生徒に合った大会のコースや練習の内容、意識付けの程度等を知ろうとした。
具体化した理由		精神的に安定しており、物事に取り組もうとする意欲も高い。手足を動かして進むということを理解しているが、うまく体を使えないので進むことができない。 そこで、泳ぎたいという気持ちをバネに、教師が示範して指導しながら、バタ足で進めるようになることを目標に指導することとした。	本生徒は、ルールや道具の使い方を理解できるが、目と手の対応動作が苦手なことが難しい。 そこで、クラブの操作を身につけてボールを打てるようになれば、自信を持って一人で進めるようになり友達と関わって楽しめるのではないかと考えた。	体調や精神状態がよく、頑張ろうという意欲もある。走るペースは速くないものの走り続けられる距離は長い。 そこで、一番長いコースを走ることにし、練習では他者との比較が自分で行えるように意識付け、徐々に自己の力を高めて、大会では入賞を目指すよう目標を設定した。
単元計画	目 標	バタ足で5m位泳げるようになる。	ルールを理解し、積極的にゴルフを楽しめるようになる。	精一杯頑張って他と競い走り通すようになる。
	具体内容	サイドに手をかけてのバタ足や教師が手を引いてのバタ足練習。3時間実施。	ルール説明をし、教師が示範して行わせるようにした。15時間実施	1.5Kmのマラソン。15時間実施。
授業中の様子		教師の指示を聞くが、実際に泳ごうとすると余裕がなくなり、めちゃくちゃな動きとなってしまふ。	クラブの操作を上手に行えるが、握りとボールとの距離を把握するのが難しいようで、何回か振ってやっとボールに当たる様子が見られる。	体調もよく精神的に不調なときが少なかったので、積極的に取り組む様子が見られる。
単元終了後の成果		教師の話聞くがうまくできなかった。しかし面かぶりのバタ足が行えるようになってきた。(○)	当てる技術が十分に高まったとはいえないが、ルールを理解し一人でコースを回ることができるようになった。(○)	頑張ろうとする気持ちが最後まで持続し、記録を徐々に伸ばしていき、4位入賞を果たした。(○)



資料Ⅱ-6-3 個に基づいて作成された際に用いた考え及び単元終了後の成果 (I.Y.-3)

項目/単元		球 技 Ⅱ	体 力 作 り Ⅱ
年間計画	ねらい	余暇や将来に、他者と関わって行える運動ができるようになる。	・体力の向上。 ・克服する力や気持ちを高める。
把握の理由		本生徒はテレビや過去の経験を通して、サッカーのルールやボールの扱い等を理解していると思われる。球技Ⅰ、Ⅱから他の生徒ととの関わりが少しずつ見られるようになってきており、本単元でも中心的な役割を果たし、友達とサッカーを楽しんで欲しいと思った。しかし、体調や精神状態が悪い為、過度の負担とならないようにしなければならない。	冬のスポーツ教室では、スキー班とそり班とに分れて活動を行うが、本生徒は能力的に今後スキーを行うことがあるかもしれないので、それを予想し授業ではスキーに向けた活動を行うことが望ましい。しかし現在の体調や精神状態からいって、それを要求することは難しいと判断した為、そり班の活動(雪の上や氷の上を歩く)を行うこととした。
実態把握項目		そこで、 ・ボール操作やルール理解 ・他者との関わり ・現在の心身や障害の状態	そこで、 ・起伏や滑る場所で歩く力 ・現在の心身や障害の状態
具体化した理由		等を把握し、どの程度まで行わせることができるか、どのように友達と関わりを持たせられるか、配慮すべき事柄等を知ろうとした。 サッカーの技術やルール理解は問題ないが、年末以来てんかん発作があり、体調・精神状態ともに思わしくなく、意欲が低下し何事にも無気力である。 そこで、過度な動きを要求せず、本人の意思を尊重しながら、ゲームに参加し楽しむことを目標とした。	等を把握し、どの位の活動までなら行えるか、配慮すべき事柄は何か、できない場合どのようにすべきか等を知ろうとした。 てんかん発作の為、体調不良であり、精神的にも不安定なので、教師の付き添いを要することが分かった。また、負担となる声かけなども行ってはいけない。 そこで、無理をしない程度の活動を行わせようと考え、本人の意思を尊重し、外に出られる時にだけ活動を行うこととした。
単元計画	目 標	友達にパスしたりシュートしたりして、ゲームを楽しむ。	外にでられるときには外にでて歩く。そり遊びをひとりで行う。
	具体内容	2対2や3対3のパスゲームを行う。7時間実施。	教師が付き添いながら歩く。大雪の時はそり遊び。9時間実施。
授業中の様子		てんかん発作がでて欠席が多いため、十分な活動できない。	欠席が多く、出席時も保健室で休養することが多い。
単元終了後の成果		動きが鈍く、授業に参加しても意欲が高まらず、ゲームに参加することができなかった。(一)	体調不良のため外で活動することが十分にできなかった。(一)

資料Ⅲ-1 各単元の指導計画（体力作りⅠ）

指導形態	体 育	期 間	4月17日～5月19日	対	高等部	指 導	1. 集合・整列・方向転換・行進を通し、集団での活動の仕方を学ばせる。	
単 元 名	体力作りⅠ (集団行動・陸上)	時 数	14回 14時間扱い (1単位40分)	象		目 標	2. 走ることを通して、基本的な運動能力を高めるとともに、総合的な体力の向上を図る。 3. 個に応じた指導により、健康で安全な生活を営む能力を養う。	
学習活動・内容		編成	指 導 計 画			内容表との関連	指導上の留意点等	
			1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14					
			4/ 5/					
			17 18 19 23 24 25 1 8 9 10 14 15 16 17					
1. 集合・整列する.	学 部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆					1. 遅れずに集合し、各クラスごとに集合する。体育委員が中心になって整列させる。 2. 元気よく大きな声であいさつさせる。 3. 教師を注視させる。 4. 1) 号令をしっかりと聞かせる。 2) 姿勢の変化をしっかりとらせる。 3) 体育座りをしっかりとらせる。 4) 間違えてもいいから自分で行わせる。 5. 1) 順番を覚え、正しく大きく体操させる。 2) 教師と同じように動かせる。 6. 学校の周辺を一定のスピードで歩く。慣れてきたら、スピードを速めるようにする。 7. 柔軟運動も取り入れ、疲労した体をほぐさせる。 9. 頑張った者を称賛し合う。 10. 元気よく大きな声であいさつさせる。	
2. あいさつをする.	学 部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆				生654-VI, VII		
3. 今日の学習予定を知る.	学 部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆				国101, 107-V		
4. 集団行動をする.								
1) 号令により整列する.		☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆				体503-VI		
2) 気をつけ、休めをする.		☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆				体504-VI, VII		
3) 腰を下して休めの姿勢をする		☆☆☆				体505-VI, VII		
4) 方向転換をする.		☆☆☆				体503-VII		
5. 準備体操をする.	学 部	☆☆☆	☆☆☆☆			体324		
1) ラジオ体操第一.		☆☆☆☆☆☆☆				音103, 104-VI, VII		
2) ストレッチ体操.	グループ	☆☆☆☆☆☆☆				体11-VI, VII		
6. 長い距離を歩く		☆☆☆☆☆☆☆						
Aグループ 0.8Km								
Bグループ 1.2Km								
Cグループ 1.5Km								
7. 整理運動をする.	学 部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆				体624-VI		
8. 集合・整列をする.	学 部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆				生654-VI, VII		
9. 学習のまとめをする.	学 部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆				国101, 107-VI		
10. 終わりのあいさつをする.	学 部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆				生654-VI, VII		

資料Ⅲ-2 各単元の指導計画(運動会)

指導形態	体育 / 生活	期間 時間 時数	5月21日～6月 5日	対 高等部	目 標	1. 競技に楽しく参加し, みんなと一緒に行動する。 2. 最後までがんばろうとする気持ちを持つ。 3. 友達の競技を最後まで見て, 応援する。		
単元名	運 動 会	15回	15時間扱い (1単位40分)					
学習活動・内容	編成	指 導 計 画					内容表との関連	指導上の留意点等
		1 ① 2 3 4 ② 5 6 ③ 7 8 9 10 ④ 11 5/生活 生活合練 合練生活 合練 総練 総練 21212223242427272828282929303030313131 1 2 5						「生活」は生活扱い, 「合練」は合同練習, 「総練」は総練習で, 「外」「内」は校庭, 体育館を表わす。
1. 集合・整列をする。 1) チーム毎に集合する。 2) 前ならえの号令により整列する。 3) 気をつけ, やすめをする。 2. あいさつをする。 3. 今日の学習予定を知る。 4. 準備体操をする。 1) 楽しい体操を行う。 2) 体操を行う。	チーム  全体 全体 全体	☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆	体502-VI, VII 体503-VI 体504-VI, VII 生654-VI, VII 国101, 107-V	1. 紅白各チーム毎に指揮台前に集合する。 2. 大きな声であいさつさせる。 3. 教師を注目させる。 4. 1) 順番を覚え, 正しく大きく体操させる。 2) 教師に注目させ動きをしっかりとまねさせる。				
5. 駆け足をする。 6. 入場行進の練習を行う。	全体  全体	☆エ☆☆ 応練 練し 練 応 ☆ン ☆☆☆ 援 ☆☆☆ く☆☆ ☆☆☆ 援	体12-VI, VII 体12-VI, VII	5. 音楽に合わせて駆け足を行う。 白線に注意させる。 6. 整列した状態で行進できるようにさせる。				
7. 徒競走の練習を行う。 1) クラッシュスタートの練習をする。 2) ピストルの号砲で競走する。	グループ	テ 小 ば 習 習小日会 ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆   ☆道 ☆り ☆ ☆ 道	体18-V 体18-V, VI, VII	7. 競走する意識を高める。 1) クラッシュスタートを目指す。 2) ピストル合図で競走させる。				
8. 団体種目の練習を行う。 9. 運動会の準備を行う。	チーム  全体	シ☆☆ 具 ☆☆☆ ☆☆☆ 具 ☆☆☆ ヨ 作 鶴 作★	体28, 29, 30, 31 32, 33-VI, VII 生552-VI, VII	8. <別紙参照> 9. 準備をさせる。 <別紙参照>				
10. VTRを見る。 11. 整理運動をする。	学部  チーム	ン り 外 内 養 予 外 内 予 ☆ ☆ ☆☆☆ ☆☆☆ 音☆☆ ☆☆☆	体624-VI 体401～420 生654-VI, VII	10. 頑張った姿を見せ, 互いに称賛させる。 11. 柔軟運動も取り入れ, 疲労した体をほぐさせる。				
12. 集合整列をする。 13. 学習のまとめをする。	チーム  チーム	☆ ☆☆☆ ☆☆☆ 頭☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆	国101, 107-VI 生654-VI, VII	12. 先頭の者にしっかりと並ばせる。 13. 頑張った者を称賛させる。				
14. 終わりのあいさつをする。	チーム	☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆	生654-VI, VII	14. 元気よく大きな声であいさつさせる。				

**資料Ⅲ-3 各単元の指導計画（球技Ⅰ）**

指導形態	体 育	期 間 時 数	6月12日～6月21日	対 象	指 導 目 標
単 元 名	球技Ⅰ（バレーボール）		7回 7時間扱い (1単位40分)	高等部	1. バレーの基本技能を身につけ楽しくゲームができるようにする。 2. 自分の役割が分かり互いに協力して運動を行い、体力を高める。 3. ルールや規則を守って活動し、自主的に活動に参加する。 4. 用具の準備や片付けを行い、健康や安全に留意して活動する。
学 習 活 動 ・ 内 容	編 成	指 導 計 画 1 2 3 4 5 6 7 6/ 12131418192021	内 容 表 と の 関 連	指 導 上 の 留 意 点 等	
1. 集合・整列をする。 1) クラス毎に集合する。 2) 前ならえの号令により整列する。 3) 気をつけ、やすめをする。 2. あいさつをする。 3. 今日の学習予定を知る。 4. ラジオ体操をする。 5. 駆け足をする。 6. 練習をする。 《A》①パスとキャッチ(自由) ②下手打ち練習 ③片手打ち練習 ④円陣パスを数える。 《B》①風船をたたく ②風船を落さないようたたく ③風船を頭上に上げる ④風船をパスする 《C》①大玉を転がす ②風船に触れる ③風船をたたく ④風船を落さないようたたく 7. 集団技能の練習をする。 ①味方同士でパスする。 ②回数を限定してパスする。 ③相手へパスする。 ④ゲームの始と終了を理解する。 ⑤3回で相手へ返す。 8. ゲームをする。 9. 整理運動をする。 10. 集合整列をする。 11. 学習のまとめをする。 12. 終わりのあいさつをする。	学級    全体 全体 全体 全体 グループ	☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆	体502-VI, VII 体503-VI 体504-VI, VII 生654-VI, VII 国101, 107-V 体324 体21-VI, VII 体110-VI, VII 体112, 113-V, VI 体…… 体…… 体…… 体…… 体113-V, VI 体101, 102 体109-V 体…… 体…… 体624-VI 体401 生654-VI, VII 国101, 107-VI 生654-VI, VII	1. ステージに向かってクラス毎に整列させる  2. 元気に大きな声であいさつさせる。  4. 師範者をよく見て、大きな動作で行わせる。  6. グループ毎にボールの扱いに慣れ、ボールを落さないように基本的な技能を取得させる。      7. ネットや仕切りを使って敵味方を区別し、攻めと守りを理解させる。     9. 柔軟運動も取り入れ、疲労した体をほぐさせる。   11. 頑張った者を称賛し合う。 12. 元気に大きな声であいさつさせる。	

資料Ⅲ-4 各単元の指導計画（水泳）

指導形態 単元名	体 育 水 泳	期 間 時 数	7月 9日～9月12日 12回 12時間扱い (1単位40分)	対 象	高等部	指 導 目 標	1. 水遊びを通して、水に対する楽しさを味わわせる。 2. 水の特性を利用して、体力を養う。 3. 水泳の初歩的的技能ができるようにする。 4. 安全に留意して活動できるようにする。	
学 習 活 動 ・ 内 容		編 成	指 導 計 画 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 7/ 8/ 9/ 91114182930 3 51012			内容表との関連	指導上の留意点等	
1. 集合・整列・あいさつをする。 2. あいさつをする。 3. 今日の学習予定を知る。 4. 準備体操をする。 1) ラジオ体操第一。 2) 補強体操をする。 5. 駆け足をする。 6. 靴を脱ぎ、シャワーを浴びる。 (洗体槽に入ってから小プールへ) 7. 大プールサイドに整列する。 8. 模範の泳ぎを見る。 9. 泳ぐとき注意することを知る。 10. 水に慣れる。 1) 入水し腰まで水に浸かった状態でプールサイドに沿って歩く。 2) 肩まで水に浸かる。 11. 競走をする。 1) 前の人の上に手を掛け、クラス毎一列になり往復する。(腰まで) 2) 1)と同じ。(肩まで) 12. グループ毎に活動する。 《A、Bグループ》 1) 手をつないで円を作り水に潜る 2) ビート板を使いけのびをする 3) 浮き身の練習をする 4) バタ足の練習をする 5) ビート板を使いバタ足で泳ぐ 《Cグループ》 1) 一人でプールに入る 2) 水の中を走る 3) 水の中を一人で歩く 4) 教師と水を掛け合う 5) 腰かけてバタ足をする 13. リレーゲームをする。 14. 自由に水遊びをする。 15. 集合整列をする。 16. 終わりのあいさつをする。	学部 学部 学部 学部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	体502-VI, VII 生654-VI, VII 国101, 107-V	1. ステージに向かってクラス毎に整列させる。 2. 元気に大きな声であいさつさせる。 3. 教師を注視させる。 4.				
	学級	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	体324 体406～420 体201-VI, VII	1) 順番を覚え、正しく大きく体操させる。 2) 腕の回旋や脚の曲げ伸ばし等を行う。 5. 体育館内を音楽に合わせて駆け足させる。 6. 靴はクラス毎にまとめ、ゆっくりとシャワーを浴び、洗体槽に入って小プールへ移動させる。 7. 中学部があがりしだい、大プールへ移動しグループ毎に整列させる。				
	グループ 学部 学部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆ ☆	体502-VI, VII 国4-VI 国101-VI	10. プールサイドに手を掛け、ゆっくりと歩く。始めは時計回り、笛の合図で反対回りをさせる。 2) 水に慣れてきたら、号令に合わせて肩まで水に浸からせる。				
	グループ	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	体207, 208-IV, V	1) 1列に並び、肩に手をかけさせプールを往復させる。手が離れないように注意する。 2) 肩まで水に浸かって、1)と同じように歩かせる。				
	学級	☆☆	体204-VI, VII 体208-IV, V	11. 1) 1列に並び、肩に手をかけさせプールを往復させる。手が離れないように注意する。 2) 肩まで水に浸かって、1)と同じように歩かせる。				
	グループ	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	体208-IV, V	12. 各グループに分かれて活動する。				
	学部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	体211-IV 体210-VI 体210-VI 体213-VI 体213-VI, VII	13. 目標物を回ってくるリレーをさせる。 14. 遊具を使って遊ばせてもよい。				
	学部	☆☆	体203-III 体207-V 体207 体202-II 体213-II 体205, 206	16. 元気に大きな声であいさつさせる。				
	グループ	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	生654-VI, VII 生654-VI, VII					
	学部	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆						

資料Ⅲ-5 各単元の指導計画（球技Ⅱ）

指導形態	体 育	期 間	10月1日～11月1日	対 象	高等部	指導目標	
単 元 名	球技Ⅱ(ゴルフ)	期 間 時 数	15回 15時間扱い (1単位40分)				1. ゴルフの基本的な技能を身に付ける。 2. ゲームのやり方が分り、自分から行おうとする。 3. ルールや規則を守って活動し、楽しく活動する。 4. 用具の準備や片付けを行い、健康や安全に留意して活動する。
学 習 活 動 ・ 内 容		編 成	指 導 計 画 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 10/ 1 2 3 4 8 9 16 17 18 22 26 29 30 31 1			内容表との関連	指導上の留意点等
1. 駆け足をする。 2. 集合・整列をする。 1)学級毎に集合する。 2)前ならえの号令により整列する 3)気をつけ、やすめをする。 3. あいさつをする。 4. 今日の学習予定を知る。 5. ラジオ体操をする。 6. ダンスを行う。 7. 長い距離を歩く。 8. ゴルフのやり方を知る。 ①ゴルフのビデオを見る。 ②示範をみる 9. 練習をする。 ①各グループに分かれる。 ②クラブの持ち方を知る。 ③クラブの振り方を知る。 ④大きなボールを打つ。 ⑤小さなボールを打つ。 ⑥目標物にボールを当てる。 ⑦移動しながらボールを打つ。 10. ゲームをする。 11. 整理運動をする。 12. 集合整列をする。 13. 学習のまとめをする。 14. 終わりのあいさつをする。		全体 学級	☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆	体21-VI, VII	1. 9時40分ごろまで駆け足を行わせる。 2. 指揮台に向かって学級毎に整列させる。  3. 元気に大きな声であいさつさせる。  5. 師範者をよく見て、大きな動作で行わせる。 6. 各自好きなように踊らせる。 7. 学年毎に町内を30分間歩かせる。 8. グループ毎にゴルフのやり方を知らせる。  9. クラブの使い方や打ち方、目標に向かって打つ練習などをさせる。体育館や校庭内の任意の場所で、各グループ毎に活動させる。  10. 各グループ毎にスコアをつけながら行わせる。 11. 柔軟運動も取り入れ、疲労した体をほぐさせる。  13. 頑張った者をお互いに称赞し合う。 14. 元気よく大きな声であいさつさせる。		
		全体 全体 学級 学級 学年 グループ	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆	体502-VI, VII 体503-VI 体504-VI, VII 生654-VI, VII 国101, 107-V 体324			
		グループ	☆☆☆☆☆☆☆☆				
		グループ	☆☆☆☆☆☆☆☆				
		グループ	☆ ☆☆☆☆☆☆☆	体624-VI 体401			
		グループ	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	生654-VI, VII			
		学級	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	国101, 107-VI			
		全体	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	生654-VI, VII			
		全体	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆				

資料Ⅲ-6 各単元の指導計画（マラソン）

指導形態 単元名	体 育 マ ラ ソ ン	期 間 時 数	11月21日 ~ 12月13日 15回 19時間扱い (1単位40分)	対 象	高 等 部 (中学部と 合同)	指 導 目 標	1. ゆっくりとでもいいので歩かずに最後まで走り続けることができるようになる。 2. 最後までがんばろうとする気持ちを養わせる。 3. けがなどをしないように安全に配慮するとともに、準備運動をしっかりと行う習慣を身につける。
学習活動・内容			編成	指 導 計 画 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 11/ 12/ 21 22 25 26 27 28 29 3 4 6 7 10 11 12 13		内容表との関連	指導上の留意点等
1. 集合・整列をする。 1) クラス毎に集合する。 2) 前ならえの号令で整列する。 3) 気をつけ、やすめをする。 2. あいさつをする。 3. 今日の学習予定を知る。 4. 瓢箪沼まで移動する。 5. 準備体操をする。 1) ラジオ体操を行う。 2) 体操を行う。 6. 10分間走を行う。 7. マラソン大会のコースを走る。 8. 表彰式を行う。 9. 整理運動をする。 10. 集合整列をする。 11. 学習のまとめをする。 12. 終わりのあいさつをする。			学級  学部 学部  グループ  学部 グループ 学部  学部 グループ  グループ グループ グループ	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  ☆ ☆☆ 合大 同会  ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆☆☆ ☆ ☆ ☆☆☆☆ 記記記 録録録  ☆ ☆☆ ☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	体502-VI, VII 体503-VI 体504-VI, VII 生654-VI, VII 国101, 107-V  体324 音103, 104-VI, VII 体12-VI, VII  体12-VI, VII  体624-VI 体401~420 生654-VI, VII 国101, 107-VI 生654-VI, VII	1. 各クラス毎に式台前(ステージ前)に集合する。 2. 元気よく大きな声であいさつさせる。 3. 何をするのか、目標は何か、グループは・・・などをよりわかりやすく説明する。 4. 安全に配慮して移動させる。 5. 1) 教師の動作を真似て行うようにさせる。 2) 各グループで必要な体操を行わせる。 6. 周回を記録する。各グループ毎に走り、10分後の笛の合図でその場に止まらせる。 7. 別紙参照 8. 各グループ毎に上位3名を表彰する。 9. 柔軟運動も取り入れ、疲労した体をほぐさせる。 10. 先頭の者にしっかりと並ばせる。 11. 各グループで1名感想を発表させる。 12. 元気よく大きな声であいさつさせる。	

資料Ⅲ-7 各単元の指導計画（球技Ⅲ）

指導形態 単元名	体 育 球技Ⅲ(サッカー)	期 間 時 数	1月14日～1月31日 9回 9時間扱い (1単位25分)	対 象	高等部	指 導 目 標	1. 円陣パスなどを通してボールの扱いになれるとともに、集団で行うことを意識する。 2. 簡単なルールで行うことにより、ゲームへの参加意欲を高める。 3. 協力し用具の準備や片付けを行い、健康や安全に留意して活動する。
学 習 活 動 ・ 内 容		編 成	指 導 計 画 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1/ 141721232428293031	内 容 表 と の 関 連		指 導 上 の 留 意 点 等	
1. 3分間駆け足をする。 2. 集合・整列をする。 1) クラス毎に整列する。 2) 気をつけ、やすめをする。 3. あいさつをする。 4. 今日の学習予定を知る。 5. ラジオ体操をする。 6. 集団技能の練習をする。 1) ボール1つで円陣パスをする。 2) ボール数個で円陣パスをする。 7. 個人技能の練習をする。 1) 1対1で対面パスをする。 2) ドリブルの練習をする。 8. ゲームをする。 1) ボール2個を使ってゲームをする。 2) ゲームをする。 9. 整理運動をする。 10. 集合整列をする。 11. 学習のまとめをする。 12. 終わりのあいさつをする。		学部	☆☆☆☆☆☆☆☆	体21-VI, VII		1. 9時45分から3分間駆け足を行わせる。ボールを蹴りながら走らせる。 2. Tの指示で並足になり集合する。体育委員を中心に整列させる。 3. 元気に大きな声であいさつさせる。 4. 話を聞くときの姿勢は体育座り。 5. 師範者をしっかりと模倣させる。 6. クラス中心に活動する。 7. クラス中心に活動する。 8. できるだけ前コートを使うようにはたらきかけるようにする。 9. 柔軟運動も取り入れ、疲労した体をほぐす。 10. 体育委員を中心に整列させる。 11. 頑張った者を称賛し合う。 12. 元気に大きな声であいさつさせる。	
		学部	☆☆☆☆☆☆☆☆	体502-VI, VII 体504-VI, VII			
		学部	☆☆☆☆☆☆☆☆	生654-VI, VII			
		学部	☆☆☆☆☆☆☆☆	国101, 107-V			
		学部	☆☆☆☆☆☆☆☆	体324			
		学年	☆☆ ☆	体115 体115			
		学年	☆ ☆	体115 体115			
		学年	☆☆☆☆☆☆	体115, 116, 117 体115, 116, 117			
		学部	☆☆☆☆☆☆☆☆	体624-VI 体401			
		学部	☆☆☆☆☆☆☆☆	生654-VI, VII			
		学部	☆☆☆☆☆☆☆☆	国101, 107-VI			
		学部	☆☆☆☆☆☆☆☆	生654-VI, VII			



資料Ⅲ-8 各単元の指導計画（体力作りⅡ）

指導形態 単 元 名	体 育 体力作りⅡ (雪上歩行)	期 間 時 数	2月 4日～2月13日 7回 7時間扱い (1単位40分)	対 象	高 等 部	指 導 目 標	1. 冬のスポーツ教室へ向け意識を高めるとともに、積極的に悪路に挑戦しようとする意識を高める。 2. できるだけ一人で、防寒着を着て活動に臨めるようにする。 3. 汗をかいた後の処理ができるようにする。
学習活動・内容		編成	指 導 計 画 1 2 3 4 5 6 7 2/ 4 5 6 7 11 12 13	内容表との関連		指導上の留意点等	
1. 集合・整列する。	学部	☆☆☆☆☆☆	生654-VI, VII			1. 遅れずに校庭(雨天体育館)に集合し、各クラス毎に集合する。体育委員が中心となって整列する。「まっすぐ・きれいに・落ち着いて」	
2. あいさつをする。	学部	☆☆☆☆☆☆	生654-VI, VII			2. 日直とともに元気よく大きな声であいさつさせる。	
3. 今日の学習予定を知る。	学部	☆☆☆☆☆☆	国101, 107-V			3. 教師の話をよく聞くように注目させる。	
4. グループに分かれる。	グループ	☆☆☆☆☆☆				4. 3つのグループに分かれる。	
5. 町内を歩く。	グループ	☆☆☆☆☆☆	体21-VI, VII			5. 学校の周辺を一定のスピードで歩く。慣れてきたら徐々に速くしていく。	
6. 雪上を歩く。	グループ	雪がふったとき	体21-VI, VII			6. 学校周辺の歩道を歩く。滑らないように注意させながら歩く。	
7. そり遊びをする。	学部	雪がふったとき				7. 雪が大量にふったときには雪山を作り、そり遊びをする。	
8. 整理運動をする。	学部	☆☆☆☆☆☆	体624-VI 体401～420			8. 柔軟運動も取り入れ、疲労した体をほぐさせる。	
9. 集合・整列をする。	学部	☆☆☆☆☆☆	生654-VI, VII			9. 体育委員が中心となって整列するようにさせる。	
10. 学習のまとめをする。	学部	☆☆☆☆☆☆	国101, 107-VI			10. 頑張った者を称賛させる。	
11. 終わりのあいさつをする。	学部	☆☆☆☆☆☆	生654-VI, VII			11. 元気に大きな声であいさつさせる。	